

事業ID: 2019525277

事業名: 海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名: 海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

日本財団御中

海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020) 実施報告書

2021年3月31日

海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

事業ID: 2019525277

事業名: 海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名: 海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

実施概要

1. 事業目的

海と日本プロジェクトの主旨に賛同し、そのムーブメント化のために、自発的かつ能動的に活動してくれる全国の“熱源人材”を発掘して束ね、彼らの優良取組やノウハウを共有する場づくりを行う。“熱源人材”同士が相互に交流し、海と日本プロジェクトを更なる大きなムーブメントに成長させていく。

2. 契約時事業目標の達成状況

【助成契約書記載の目標】

1. 全国でソーシャルイノベーターである“熱源人材”を発掘し、ネットワークを形成する
2. 熱源人材について、その取組みを共有出来るプラットフォームを作成する
3. 海と日本プロジェクトを自ら広報・活動してくれる人たちを増やす
4. 熱源人材、および、その活動が多数のメディアでとりあげられることを目指す

【目標の達成状況】

1. 各エリア事務局と連携し、全国各地から59名の熱源人材を発掘し、熱源人材同士の活動内容を共有する特設サイトで熱源人材のネットワークを形成した。
2. 熱源プロジェクト特設サイトを立ち上げ、熱源人材の取組みを取材した紹介記事を公開した。
3. 熱源人材に認定したことで、各種SNSや各々の取組みににおいて、海と日本プロジェクトの情報発信を行っていただいた。
4. TVや新聞などの各メディアを通して熱源人材の紹介を行った。

3. 事業実施によって得られた成果

年齢や性別、業界を超えた、海に対する様々な活動を行う熱源人材の発掘を通し、海洋環境保護に向けたあらゆる視点や取組みを全国で共有することができ、海と日本プロジェクトのムーブメントの最大化を図ることができた。

5. 成功したこととその要因

全国のエリア事務局との連携を密に行うことで、全国規模の人材発掘を行うことができた。
また、専任のライターを立て、一人ひとりに対して内容の深い取材を行うことで、その取組みや今後の目標、熱源人材の人柄などを特設サイトで情報の発信及び共有を行った。

6. 失敗したこととその要因

熱源人材の発掘にあたり、全国のエリア事務局と連携して行ったが、通常業務の中で熱源人材発掘業務の依頼をしたことで負担をかけてしまった。
今後はよりスムーズに連携を取れる体制を整える。

7. 活動を通じて明らかになった新たな課題と対応案

熱源人材の活動は多岐にわたるため、今後の熱源人材同士のシナジー形成及び、異業種間の業務連携を見据えたコンテンツ作りが重要である。

事業ID: 2019525277

事業名: 海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名: 海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

1.全国の熱源人材発掘及び認定

事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

1-(1) 全国の熱源人材発掘

2020年7月1日(水)～7月31日(金)の期間で、各エリア事務局を通じて熱源人材を発掘。
エントリーシートを作成し、全国の熱源人材候補の方々がどのような取り組みを行っていて、どのようなヴィジョンを持っているのか、熱源人材にふさわしい人材であることがわかる形式で、熱源人材発掘を行った。

熱源サミット2021 海の熱源人材 募集要項	
詳細 終了後必ずご所属のところに書き添え下さい。 ※、公益財団法人 日本財団と熱源プロジェクト実行委員では「海と日本2020」の一環として、その活動への「熱い思い」を持ち、プロジェクトを支える「熱い」人財を幅広く積極的に活動を生み出す「熱源」プロジェクトを実施したいと考えています。 実施にあたり、熱源人材を広く募集したいと考えていますので、各エリアからのエントリーへのご協力をお願いいたします。	
【「熱源人材」の募集及び推薦のお願い事項】 【募集要項】 ・熱源人材部門：これまでに「海と日本2020」に関与したことがある人財。 ・未来の熱源人材部門：・中学生までの未成年で、海に対する強い関心と熱意があり、未来の熱源となる人財。 各部門向けに2名以上を熱源人材「推薦」して熱源事務局へエントリーをお願いします。 【推薦人材募集方法】 ▼日本財団より所管事務局にて、募集の案内があります。 ※エントリーシートは「推薦」した人財の推薦書と、各エリアからの各熱源人材に送付いたします。 ▼募集に際しては、 ・活動の募集は、今後の募集の案内 ・推薦書は、推薦の案内の「募集要項」 ・地域の人材、 ・年齢、性別のバランス - を考慮した上で選出。 ※上記に加え、熱源事務局からの推薦状として募集を募集。(推薦書からの選出など。) 【募集期間】 ・熱源人材募集(推薦)期間：2020年7月1日(水)～7月31日(金) ・初代熱源人材募集の選出：2020年8月中旬予定 【応募方法】 エントリーシート及び推薦書4枚を 熱源事務局へ送付してください。 ※詳細は、熱源事務局へお問い合わせください。 熱源事務局 〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1 熱源事務局(熱源事務局) 熱源事務局 TEL: 03-5561-1111 FAX: 03-5561-1112 E-MAIL: info@heat-source.jp	

熱源サミット2021 【熱源人材部門】エントリーシート	
1. 熱源について	
フリガナ	
氏名	
住所	〒
年齢	歳 性別
所属団体/所属	
連絡先	TEL: FAX: E-MAIL:
2. これまでの取り組み内容について	
海に繋がる これまでに 取り組み	

3. 活動内容について(詳細)	
現在の課題	
活動の成果	※これまでに取り組みの成果やそれによって変わった点など。
未来の希望 ～今後の計画～	※10年後に目指す「海、の夢」を教えてください(人々への呼びかけなど)。 また、その実現のために今後取り組みたい内容を教えてください。

※エントリーシートを提出するための別資料の提出も可能です。

4. エリア事務局に提出書	
フリガナ	
氏名	
エリア名(派遣先)	
連絡先	TEL: FAX: E-MAIL:
5. エリア事務局に提出書 推薦コメント	

1-(2) 全国の熱源人材の認定

2020年8月19日(水) 日本財団様にて1次選考会を実施。
1次認定として全国から51名の熱源人材、2名の未来の熱源人材を認定した。

2021年1月25日(月) 日本財団様にて2次選考会を実施。
2次認定として全国から5名の熱源人材、1名の未来の熱源人材を認定した。

事業ID: 2019525277

事業名: 海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名: 海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2. 全国の熱源人材リスト作成

事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(1) 全国の熱源人材発掘リスト

No.	都道府県	氏名	年齢	性別	所属団体/肩書
1	北海道	村井 克詞	51	男	オホーツク・ガリンコタワー株式会社/総務課長 港湾海洋調査士
2	北海道	杉本 夏子	47	女	津軽海峡マグロ女子会北海道とりまとめ代表/温泉旅館矢野 女将
3	青森県	桐原 慎二	62	男	国立大学法人弘前大学地域戦略研究所/教授
4	青森県	志田 崇	40	男	志田内海株式会社/代表取締役会長 マリンコラボ株式会社/代表取締役 NPO法人あおもりみなとクラブ/理事 NPO法人青森県環境パートナーシップセンター/理事 弘前大学大学院/理工学研究科理工学専攻博士後期課程
5	岩手県	川村 将崇	29	男	GEOTRAIL 代表
6	岩手県	鈴木 良太	38	男	共和水産株式会社 代表取締役専務 ※別名「イカ王子」として活動
7	宮城県	畠山 紳悟	26	男	環境系学生団体海辺のたからもの/立ち上げ代表、(公財)みやぎ・環境とくらし・ネットワーク/非常勤職員、 東北大学工学部4年
8	宮城県	萌江	26	女	いしのまき観光大使/ほやドル/シンガーソングライター
9	秋田県	甲本 亮太	45	男	秋田県水産振興センター 資源部 主任研究員 博士(水産科学)
10	山形県	富樫 繁明	41	男	NPO自然体験温海コーディネット 事務局長
11	山形県	大谷 明	32	男	パートナーシップオフィス 事務局 スタッフ
12	福島県	目黒 英樹	50	男	只見中学校 教諭
13	栃木県	鈴木 和幸	53	男	日本サーフィン連盟 理事
14	千葉県	山路 由美子	56	女	九十九里海の塩プロジェクト
15	東京都	矢澤 成殊	21	女	NPO法人国際ボランティア学生協会 (IVUSA)
16	新潟県	肥田野 正明	52	男	株式会社バウハウス 代表取締役
17	富山県	稲村 修	62	男	魚津水族館 館長
18	富山県	高倉 寿弥	11	男	射水市立小杉小学校
19	石川県	浦田 慎	46	男	一般社団法人・能登里海教育研究所 主幹研究員
20	石川県	蒲田 ちか	50	女	株式会社ロータスコンセプト 代表取締役社長
21	福井県	高島 直子	49	女	エコプランふくい
22	福井県	野坂 昌之	57	男	福井県プロジェクト実行委員会
23	山梨県	仲山 英之	65	男	帝京科学大学 教授
24	長野県	青山 雄飛	31	男	
25	長野県	北村 優斗	18	男	第73期長野県長野高等学校生徒会長 学生団体Gomitomo (代表) 長野県生徒会連合NaSU (共同代表)CreativeUnit 6G
26	岐阜県	白滝 治郎	62	男	郡上漁業協同組合 副組合長・ダイワ(グローブライド)フィールドデスター
27	静岡県	馬塚 文司	69	男	サンクチュアリN.P.O 理事長
28	愛知県	神谷 友成	63	男	一般社団法人 大日本水産会 魚食普及推進センター 名古屋駐在
29	三重県	落合 真弘	17	男	海洋環境保全グループSOM 代表/鈴鹿高等学校3年生
30	滋賀県	中村 清作	34	男	漁師・滋賀県漁業協同組合連合青年会会長理事
31	滋賀県	黒川 琉伊	12	男	大津市立志賀中学校
32	京都府	橋本 弘	45	男	株式会社橋本水産 代表取締役社長
33	大阪府	鍋島 靖信	66	男	大阪市立自然史博物館友の会 会長
34	兵庫県	大継 康高	38	男	株式会社海空/代表取締役社長
35	和歌山県	中村 和哉	59	男	和歌山県セーリング連盟・理事長
36	鳥取県	大原 徹	40	男	hidden west代表(サップ)、KRCA専務(カヤック)、大山ローカルサーフィンクラブ理事
37	島根県	深谷 治	60	男	NPO法人 隠岐しぜんむら 理事長
38	島根県	武田 祐子	63	女	大田市教育委員会 学校教育課 大田市教育魅力化主任コーディネーター
39	岡山県	塩飽 敏史	45	男	公益財団法人水島地域環境再生財団(みずしま財団) 理事兼研究員
40	広島県	馬場田 真一	35	男	一般財団法人広島県環境保健協会/地域活動支援センター 主任 みやじま未来ミーティング/事務局 一般社団法人ふるさと楽舎/理事
41	広島県	山田 賢一	72	男	安浦町まちづくり協議会(副会長)/呉市まちづくりサポーター
42	山口県	新名 文博	54	男	NPO法人コバルトブルー下関ライフセービングクラブ/理事 株式会社海耕舎/代表取締役社長
43	山口県	船崎 美智子	62	女	権野川流域連携促進協議会/理事 権野川河口域・干潟自然再生協議会/会員 NPO法人やまぐち県民ネット21/理事・事務局長 ライフスタイル協同組合/代表理事
44	徳島県	黒川 剛史	42	男	MEER (メーア)
45	香川県	森田 桂治	50	男	特定非営利活動法人アーキペラゴ 理事
46	愛媛県	岩田 功次	59	男	一般社団法人E.Cオーシャンズ/代表理事
47	愛媛県	田中 政利	74	男	まつやま里山ツーリズム連絡協議会会長松山離島振興協会理事
48	高知県	神田 優	54	男	NPO法人黒潮実感センター/センター長
49	福岡県	井口 剛志	24	男	株式会社 ベンナーズ 代表取締役
50	福岡県	清野 聡子	56	女	九州大学大学院 工学研究院 環境社会部門 生態工学研究室
51	佐賀県	藤井 直紀	43	男	佐賀大学 農学部 特任助教・鹿島市干潟交流館 指導員
52	長崎県	瓜生 信汰朗	20	男	長崎海援隊・代表/海洋未来イノベーション機構/グローバル人材育成プログラム/縁JOYプロジェクト/魚料理研究 会/長崎市民活動センター「ランタナ」
53	熊本県	東濱 孝明	36	男	株式会社SUSTAINABLE JAPAN 代表取締役社長
54	大分県	海原 明子		女	NPO法人 国東市手と手とまちづくりたい
55	大分県	石濱 ひとみ		女	NPO法人 国東市手と手とまちづくりたい
56	宮崎県	杉尾 哲	76	男	NPO法人 大淀川流域ネットワーク 代表理事
57	鹿児島県	池田 龍介	35	男	非営利任意団体 誇れるふるさとネットワーク
58	沖縄県	友寄 隆秀	38	男	「ゴミがすべての始まりだった。」 代表
59	沖縄県	金城 由希乃	40	女	ジーエルイー合同会社 代表

事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	1
熱源人材名	村井 克詞
活動エリア	紋別市を中心に北海道全域
生年月日	1969年7月2日
内容	オホーツク・ガリンコタワー株式会社総務課長、タワー受付担当。 港湾海洋調査士でもあり研究員。神奈川県平塚市出身。 海の観測を継続し、蓄積したデータの解析と研究発表を通して オホーツク海の現状と課題を分かりやすく伝えている。 海上保安庁の巡視船が大好きで、海上保安友の会紋別支部理事、 海上保安協力員。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	2
熱源人材名	杉本 夏子
活動エリア	北海道松前郡
生年月日	-
内容	津軽海峡マグロ女子会北海道とりまとめ代表/温泉旅館矢野 女将 地元愛が深く、松前の海の魅力をこれまでと違った切り口で発信する、 熱源人材の名の通り、熱い旅館の女将。 松前岩糊のブランド化、自治体の枠を超えた青函エリアの「津軽海峡マグロ女子 会」の取り組み、松前藩の婚礼祝膳を参考にした「藩主料理」の提供など、 城下町松前の海の魅力を全国に発信、PRしています。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	3
熱源人材名	桐原 慎二
活動エリア	青森県内
生年月日	1957年12月16日
内容	弘前大学地域戦略研究所教授。岩手県盛岡市出身。 専門は応用藻類と水産物の増養殖で、主に青森県の水産試験研究機関において、海藻を中心にアワビやナマコなどの生態研究や増養殖技術の開発に取り組んできた。 2016年4月から現職(*当時の名称は弘前大学北日本新エネルギー研究所)。 海洋エネルギーの利活用へと研究分野を広げている。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	4
熱源人材名	志田 崇
活動エリア	青森県内
生年月日	1980年5月7日
内容	志田内海株式会社代表取締役会長。青森県青森市出身。 海草アマモの保全活動に尽力し、コンクリート製のアマモ・ナマコ増殖礁を開発して特許を取得。建設業に携わる一方で弘前大学大学院理工学研究科の社会人大学院生でもあり、2018年には弘前大学が認定する大学発ベンチャー、マリンコラボ株式会社を設立。漁業、地域、水生生物、そして海洋再生エネルギーの協調を目指した取り組みを続けている。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	5
熱源人材名	川村 将崇
活動エリア	岩手県下閉伊郡山田町内
生年月日	1992年3月4日
内容	GEOTRAIL代表。岩手県下閉伊郡出身。 JSCA(日本セーフティカヌーイング協会)公認インストラクターとして、 シーカヤックによる体験型観光で地域おこしに取り組む。 人気のうどん専門店「釜揚げ屋」の2代目でもあり、地元食文化を盛り上げるため 特産品を活かしたメニュー開発も行う。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	6
熱源人材名	鈴木 良太
活動エリア	岩手県内
生年月日	1981年11月8日
内容	共和水産株式会社代表取締役専務。岩手県宮古市出身。 東日本大震災が起こった2011年に30歳で2代目代表に就任。 自ら「イカ王子」と名乗り情報発信を始める。翌年に地元の若手後継者らと 「宮古チーム漁火」を結成し、以来、海産物のブランド化に協業で取り組む。 異業種コラボで開発した「王子のぜいたく至福のタラフライ」は インターネット販売で大ヒット。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	7
熱源人材名	畠山 紳悟
活動エリア	:仙台市唯一の海水浴場深沼海水浴場(荒浜)と周辺の里海、宮城県沿岸部
生年月日	-
内容	環境系学生団体海辺のたからもの/立ち上げ代表, (公財)みやぎ・環境とくらし・ネットワーク/非常勤職員, 東北大学工学部4年 荒浜の最若手の大学生として学生達をまとめ、地元の方々と共に「海と周囲の自然、暮らしと観光が調和した里海の暮らしを取り戻す」活動を行っている。 取り組み:津波被災地により居住のできなくなった仙台市荒浜で、地元の方々と外部の方々と巻き込んで海岸清掃を行ってきた。また「海洋ごみをたからものに変える」をコンセプトに、拾い集めたプラスチックごみからイヤリングやネックレスといったアクセサリーを制作販売&体験ワークショップを年間50件行ってきた。この活動により海や環境問題に関心のなかった子ども達とその保護者の層が関心を寄せて、30分以上コミュニケーションのとれる機会を創出できている。またアクセサリーの販売を通じて海洋ごみを減らしながら団体の運営費を賄う、社会性の極めて高いビジネスモデルを実現している。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	8
熱源人材名	萌江
活動エリア	宮城県石巻市
生年月日	-
内容	2017年に大学を卒業し、シンガーソングライターとして活動を始めてからは、地元の海産物「ホヤ」や「牡蠣」をテーマにした曲を作り、音楽を通して海に対する想いや地元のことをPRしてきた。 その中でも特に好きな「ほや」に特化し、ほやのアイドル「ほやドル」として胸に「ホヤ」と書かれたTシャツを着て、ホヤをイメージした髪型で、ホヤカラーの衣装を身にまとい、見た目からもホヤをアピールしている。 2019年4月 石巻市より、いしのまき観光大使に任命される。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	9
熱源人材名	甲本 亮太
活動エリア	:秋田県沿岸部
生年月日	-
内容	秋田県水産振興センター 資源部 主任研究員 博士(水産科学) 秋田県沿岸におけるハタハタ仔稚魚の水深別分布と摂餌生態を調べるため、2009年2-5月に仔稚魚の分布密度と食物組成および餌サイズ組成を調査した。 海に関する熱量はトップクラス。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	10
熱源人材名	富樫 繁朋
活動エリア	:山形県鶴岡市
生年月日	-
内容	NPO自然体験温海コーディネットの事務局長として、庄内浜(温海地域)の魅力を発信し続けている。海で手作りのいかだに乗ったり、イカの一晩干しを作ったりする自然体験を提供、庄内で獲れた魚をさばく体験ができる暮らし体験(民泊事業)など、自然豊かな温海(あつみ)地域において、子どもから大人まで幅広い年代層を対象にした自然体験や環境教育プログラムの提供し、県内外の多くの人に庄内浜・山形の海の学びの提供を行っている。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	11
熱源人材名	大谷 明
活動エリア	:山形県酒田市
生年月日	-
内容	飛島クリーンアップ作戦を事務局として運営。「美しいやまがたの海プラットフォーム」の協働事務局の一員として、小学校～高校、社会人を対象に年間10～20件の海ごみに関する出前授業を行っている。 2013年度は山形県からの委託事業「平成25年度海岸漂着物発生抑制対策事業実施業務委託」の中で、「海岸漂着物を題材にした環境教育プログラム」の開発を担う。 プログラム開発にあたっては、県内外で活躍している自然体験のプロにヒアリングを行った上で、学校教職員を交えた検討会を設置。様々な立場の方の意見を集約した。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	12
熱源人材名	目黒 英樹
活動エリア	:福島県南会津郡
生年月日	-
内容	「レジ袋の魔術師！プラごみ削減へ！〇〇をレジ袋に！」 海まで直線距離で約70km。日本有数の豪雪地帯の中学教師と生徒が共にプラごみ削減に、町から活動 ・取り組み①「新聞紙でレジ袋」 ・取り組み②「コメ袋でレジ袋」 生徒が作った特製レジ袋が、只見町内ではレジ袋の代わりに使われている。 取り組み①は、東京大学主催の第7回海洋教育サミットで優秀賞受賞。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	13
熱源人材名	鈴木 和幸
活動エリア	茨城県鉾田市の勝下(かつおり)海岸周辺
生年月日	1967年3月26日
内容	日本サーフィン連盟・強化本部国際委員。栃木県小山市出身。 同連盟理事として次世代サーファーの育成や選手強化に取り組み、 2021年東京オリンピックのサーフィン種目競技委員も兼任。 サーフィンのプロショップ「DEVICE」代表。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	14
熱源人材名	山路 由美子
活動エリア	千葉県内
生年月日	1964年8月26日
内容	九十九里海の塩プロジェクト代表。千葉県東金市出身。 九十九里浜のほぼ中央に位置する山武(さんむ)市の海岸で、 機械を使わない昔ながらの方法で塩を手作りしている。 製塩から販売まですべての工程を一人で担うほか、 観光客や小学生らを対象とした塩づくり体験も行う。看板商品「山武の海の塩」は、 千葉県優良県産品としても認定され、多くのファンに愛される逸品。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	15
熱源人材名	矢澤 成珠
活動エリア	白山地域（東京都文京区内）
生年月日	1999年6月27日
内容	東洋大学法学部3年生（2020年9月現在）。埼玉県川越市出身。 NPO法人国際ボランティア学生協会＝IVUSA（イビューサ）の会員で、 支部の一つである「東京白山クラブ」に所属。環境保護を中心に、 国際協力や災害救援など多分野で活動中。 小学1年生から高校3年生まで12年間サッカーに打ち込んだという 本気の体育会系で、体力と声出しには自信アリ。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	16
熱源人材名	肥田野 正明
活動エリア	新潟市中央区
生年月日	—
内容	志民委員会N・Visionプロジェクト 志民委員会N・Visionプロジェクトは、2019年の新潟開港150周年を一つの節目ととらえ、市民が自ら望む将来のまちの姿を想い描き、新潟市の発展に向けて自主的・自発的に取り組み、「共に実践する場」として2013年に設立されました。肥田野さんはこの志民委員会の事務局長として、2019年の開港150周年まで、さまざまな事業に携わってこられました。 そのほかにも、商業エリアの道路空間に水辺を創出し、新潟開港150周年を広く市民にPRしたり、開港を記念して新潟港にかんするフォーラムや、「海フェスタ」イベントを開催するなど多くの事業を展開されました。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	17
熱源人材名	稲村 修
活動エリア	富山県魚津市
生年月日	—
内容	魚津水族館 館長 1980年より、魚津水族館に勤務し、2011年からは館長を務める。 専門分野は魚類学・生態学・環境科学と幅広く、ホタルイカ研究の第一人者でもある。また最近は、富山湾に頻繁に出現するようになったリュウグウノツカイについての情報収集、調査にも注力し、その生態解明にも取り組んでいる。さらには、富山の魚と食文化に関する調査にも取り組んでいる。 日本海学推進機構専門委員、立山黒部ジオパーク理事 なども務める。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	18
熱源人材名	高倉 寿弥
活動エリア	富山県射水市
生年月日	—
内容	小さい頃から、釣りが好きで、釣った魚の名前が知りたくて、知らべているうちに魚に詳しくなる。 魚を釣った後は、家に帰ってからキッチンで自分で洗い、心臓・うき袋を出すなどさばきながら観察することが好きで魚に詳しくなる。 特技は、たくさんの魚の名前や特徴などが言えること。 日本産魚類大図鑑というふ厚く、重さ4kgほどの大図鑑を持っており、何千種類の魚が掲載されていて、見るのが好き。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	19
熱源人材名	浦田 慎
活動エリア	石川県内、求められればどこにでも
生年月日	1974年6月23日
内容	一般社団法人能登里海教育研究所の主幹研究員。金沢市出身。 金沢大学で海洋動物を研究し博士号を取得後、大阪大学を経て広島大学で研究者として約10年間勤務。2015年にUターンして現職。金沢大学非常勤講師、環日本海域環境研究センター臨海実験施設連携研究員。広島大学大学院統合生命科学研究科附属瀬戸内圏フィールド科学教育研究センター客員研究員。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	20
熱源人材名	蒲田 ちか
活動エリア	石川県金沢市
生年月日	1970年6月25日
内容	株式会社ロータスコンセプト代表取締役社長。石川県金沢市出身。 エシカルな(環境や社会に配慮された)チョコレートや大麦ストローの製造・販売など社会貢献型ビジネスを手がける。2018年、(一社)ソーシャルプロダクツ普及推進協会が主催するソーシャルプロダクツ・アワードで「love lotus Bean to Bar & Raw チョコレート」が国際部門の大賞を受賞。2020年には「大麦ストロー」が同アワードのソーシャルプロダクツ賞を受賞。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	21
熱源人材名	高島 直子
活動エリア	福井県内の海岸一帯
生年月日	1971年1月14日
内容	NPO法人エコプランふくいに勤務する傍ら、漂着物愛好家としてビーチコーミングに情熱を注ぐ主婦。福井県大野市出身。福井市自然史博物館友の会会員で、漂着した生き物の骨格標本などを作る「骨部(ほねぶ)」でもボランティアスタッフとして活動。漂着物学会の会員でもある。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	22
熱源人材名	野坂 昌之
活動エリア	福井県内
生年月日	1963年6月4日
内容	有限会社あまから代表取締役社長。福井県福井市出身。 昭和9年創業の老舗洋食店「グリルあまから」3代目オーナーシェフ。 2016年に紙製の岡持ち「多段式食品梱包容器」で特許取得。 2020年には容器にもプラスチックを使わない「使い捨てOKAMOCHI」で 二度目の特許取得。2014年発足の福井県プロジェクトでは実行委員長を務め、 脱プラの食イベントを牽引している。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	23
熱源人材名	仲山 英之
活動エリア	山梨県上野原市
生年月日	—
内容	陸域におけるマイクロプラスチック汚染の実態調査と発生抑制に関する以下の研究を、研究室の学生で行ってきた。 1. 河川から海に流出するマイクロプラスチックの量の見積もり 海に存在するマイクロプラスチックには、プラスチックごみが海域で劣化したものと陸域で発生し川を通して流出したものがあるが、その割合はわかっていない。この情報は海洋のマイクロプラスチック汚染を抑制するための対策を施すうえで重要である。そこで、東京湾に流入する主要河川と富士川でその量を調べた。 2. 内陸県の河川および市街地におけるマイクロプラスチックの実態調査 上記1の調査から、海のマイクロプラスチック汚染を抑制するためには、河川からの大きなプラスチックごみだけでなくマイクロプラスチックの流出も抑制する必要があることがわかったので、主に山梨県の河川および市街地で汚染状況を調査した。 3. マイクロプラスチックの発生抑制のための啓発活動 得られた調査結果を、専門学会以外に地元報道機関・県・ボランティア団体の協力により広く地元の市民に発信した。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	24
熱源人材名	青山 雄飛
活動エリア	長野県野沢温泉村
生年月日	—
内容	青山さん宅は、1枚のソーラーパネルで電力を賄い、水は裏山の湧き水を使う。台所用具は譲り受けた年代物が中心。室内には一見して、プラスチック製品はもとより、洗濯機も冷蔵庫も、ごみ箱すらないという徹底ぶり。

事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	25
熱源人材名	北村 優斗
活動エリア	長野県長野市
生年月日	—
内容	第73期長野県長野高等学校生徒会長 学生団体Gomitomo(代表) 長野県生徒会連合NaSU(共同代表)CreativeUnit 6G 長野県軽井沢町でG20エネルギー・環境関係閣僚会合が開催された。長野市にある長野高校の3年生が、海洋プラスチックごみ対策について、ごみ拾いに参加した人にチケットを配る、ロックフェスティバルを開催し、問題解決を呼びかけたいと、各国閣僚を前にスピーチした。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	26
熱源人材名	白滝 治郎
活動エリア	岐阜県内
生年月日	1958年1月4日
内容	郡上漁業協同組合副組合長。岐阜県郡上市出身。 長良川の魚を釣って糧を得る職漁師の技術を受け継ぐ釣り師。 渓流釣り・アユ釣りをはじめとする釣りの振興や後継者育成のため、 講演や釣り教室の講師、テレビ・ラジオ出演、書籍・雑誌・新聞コラムの執筆など 精力的に活動中。ダイワ(グローブライド株式会社)のフィールドテスターとして 釣り具の開発にも関わる。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	27
熱源人材名	馬塚 文司
活動エリア	静岡県浜松市
生年月日	1958年1月4日
内容	サンクチュアリN.P.O 理事長 アカウミガメの保護観察を通し、砂浜面積減少に対して抑制するための取り組み やプラスチックごみ削減のための講演や活動を実施。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	28
熱源人材名	神谷 友成
活動エリア	主に愛知県内(呼ばれれば全国どこへでも)
生年月日	1957年3月15日
内容	一般社団法人大日本水産会「魚食普及推進センター」名古屋駐在。 愛知県名古屋市出身。 2020年6月までは名古屋市中央卸売市場の中部水産株式会社取締役執行役員。 2008年日本おさかなマイスター協会認定「おさかなマイスター」取得。 2009年大日本水産会の魚食普及表彰、 名古屋市中央卸売市場市場協会功労者表彰。 2012年から水産庁長官が任命する「お魚かたりべ」。メディアへの露出も多く、 魚の生産者と消費者の橋渡しとなる情報発信を続けている。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	29
熱源人材名	落合 真弘
活動エリア	三重県
生年月日	—
内容	—

事業ID:2019525277

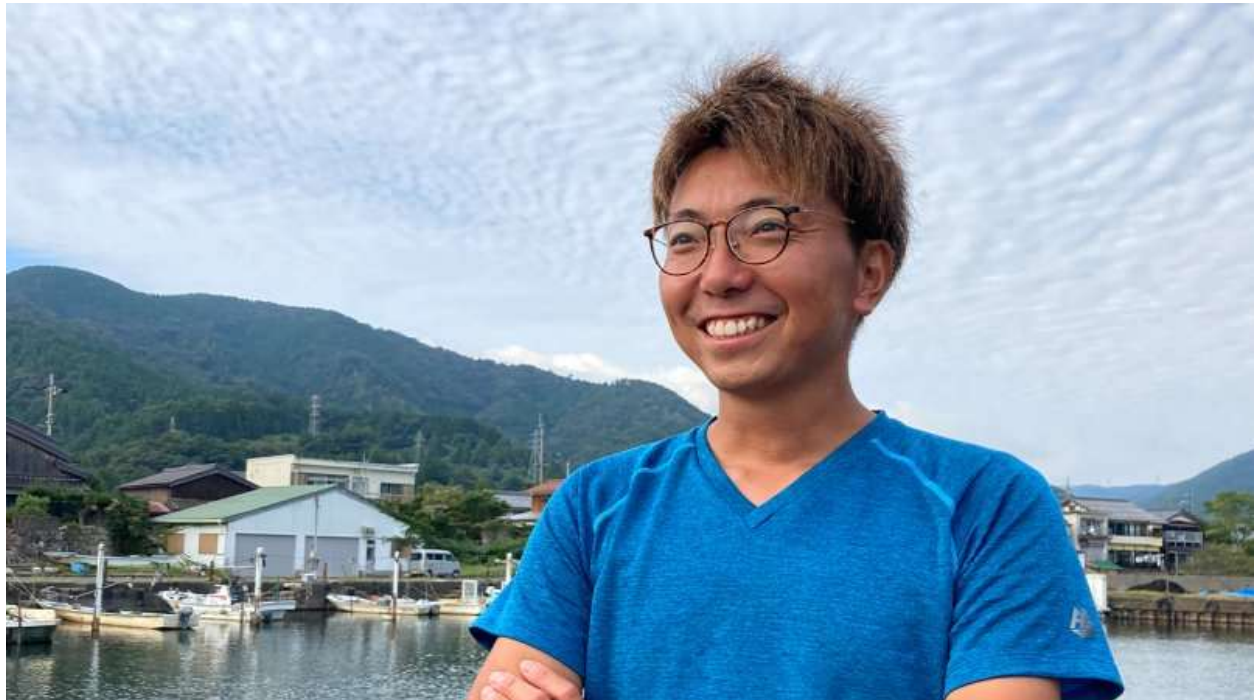
事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	30
熱源人材名	中村 清作
活動エリア	琵琶湖
生年月日	1985年9月8日
内容	琵琶湖の漁師。滋賀県高島市出身。 全国漁業共同組合連合会青年会会長理事。漁師一家の3代目。 漁業の傍ら、出前授業や食イベント等で湖魚の美味しさを積極的に発信。 「中村水産」の屋号でオンラインショップも運営。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	31
熱源人材名	黒川 琉伊
活動エリア	滋賀県大津市
生年月日	—
内容	滋賀のお魚博士！ 2018年度ラムサールびわっこ大使に選出され、世界湖沼会議に出席。 琵琶湖ならではの伝統食・湖魚料理・漁法を学び発表する。 2015年、2017年に外来魚駆除大会にて最優秀・滋賀県知事賞を受賞。 2020年度～JST主催琵琶湖ジュニアドクターで3期生として受講中。 1年を通して琵琶湖周辺で魚を採り、水草も自然採取で飼育、観察をたのしんでいます。特に琵琶湖固有16種の魚に興味をもつ。 生物の進化や環境にも興味を持ち、海水魚も淡水魚も大好きで、海には年に数回しか行けない環境でも、採取した魚についても答えることができる。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	32
熱源人材名	橋本 弘
活動エリア	京都府与謝郡
生年月日	—
内容	株式会社橋本水産 代表取締役社長 23歳の時にUターン就職する形で伊根の漁師になった。 ブリ・マダイ養殖・小型定置網での漁業を生業に、父から跡を継いで早々に経営を黒字転換させたうえ、“伊根ブリ”を全国ブランドにまで育て上げる。10年ほど前から新たな特産品として岩牡蠣の育成に挑戦。 漁師として自社の売り上げを立てるだけではなく、伊根町の漁師初の株式会社化、新規就業者への支援、観光事業にまで幅広く取り組んでいる。 京都府が、新規の漁業就業者を増やすために府と漁業団体・地元自治体が協働して、人材育成のための場「海の民学舎」の伊根町の漁師として運営に携わっている。また、観光産業の振興として「舟屋日和」という伊根町観光交流施設の立ち上げから関わり役員に就任。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	33
熱源人材名	鍋島 靖信
活動エリア	大阪府、和歌山県
生年月日	1953年9月23日
内容	大阪市立自然史博物館友の会会長。大阪府堺市出身。 大阪府立環境農林水産総合研究所(旧・水産試験場)水産技術センターの 元主任研究員。2017年から大阪海区漁業調整委員会専門委員。 大阪湾の漁業や海洋生物に精通し官民の複数の環境保全活動に関わる。 磯の観察会や出前授業、テレビ出演や講演会などで活躍する傍ら、 現在も大阪湾沿岸での調査を続けている。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	34
熱源人材名	大継 康高
活動エリア	京都市と週末前後は淡路島
生年月日	1982年2月7日
内容	株式会社海空(うみぞら)代表取締役社長。映像ディレクター、イベントプロデューサー。兵庫県淡路島洲本市出身。京都の映像制作会社で経験を積み、2012年に海空を設立(オフィスは京都市と淡路市)。自ら企画した「うみぞら映画祭」を淡路島の大浜海水浴場で2016年から開催。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	35
熱源人材名	中村 和哉
活動エリア	和歌山市内
生年月日	1960年9月10日
内容	和歌山県セーリング連盟理事長。和歌山県和歌山市出身。 県施設である和歌山セーリングセンターへのナショナルトレーニングセンター誘致に関わり、現在はその運営にあたる。幅広い世代のヨット選手のサポート、若年層へのヨットの普及・指導に尽力。日本セーリング連盟理事として競技艇の計測委員長も務める。本業は和歌山放送(ラジオ局)の報道制作局長。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	36
熱源人材名	大原 徹
活動エリア	鳥取県西部
生年月日	1980年1月24日
内容	Hidden west代表。鳥取県米子市出身。 皆生レクリエーションカヌー協会(KRCA)専務。 NPO法人大山ローカルサーフィンクラブ理事。マリンスポーツのほか 山遊びにも精通したネイチャーガイド。 子ども向けに自然体験と地域の歴史文化をセットで伝える活動も行う。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	37
熱源人材名	深谷 治
活動エリア	島根県隠岐島前地域(海士町、西ノ島町、知夫村)
生年月日	1959年9月7日
内容	NPO法人隠岐しぜんむら理事長。愛知県半田市出身。 幅広い年代を対象とした自然環境教育やエコツーリズム活動、 また野生動植物調査など、隠岐諸島の環境保全を目的に数々の取り組みを 継続的に行う。博物館学芸員、環境省鳥類標識調査員、環境省自然公園指導員。 海士町では文化財保護審議委員も務め、町の希少野生動植物保護条例制定に 尽力した。一方、調理師免許を有し蕎麦打ちはプロ級の腕前。合気道三段、 極真空手初段という硬派な一面もある。ニックネームは(しぜんむらの)そんちょう。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	38
熱源人材名	武田 祐子
活動エリア	大田市を中心とした島根県全域
生年月日	1957年6月29日
内容	大田市教育委員会学校教育課、大田市教育魅力化主任コーディネーター。 島根県美郷町出身。 38年間の教員生活を経て現職。小学校長時代には、演劇を学ぶワークショップや 囲碁を切り口としたふるさと教育など地域に開かれた画期的な授業を展開。 環境分野では平成26年度に島根県緑の少年団最優秀賞、 27年度には全国みどりの奨励賞(国土緑化推進機構理事長賞)を島根県で初めて 受賞。現在は、教員時代の経験と幅広い人脈を活かし、子どもがワクワクする 教育プログラムの企画提案、DVDやアニメなど新しい教材の開発等に取り組む。 海と日本プロジェクトinしまねでは小学生向けプログラムの教育コーディネーターと して活躍。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	39
熱源人材名	塩飽 敏史
活動エリア	岡山県倉敷市
生年月日	1957年6月29日
内容	公益財団法人水島地域環境再生財団(みずしま財団) 理事兼研究員 みずしま財団では、設立前の1990年代後半より海ごみ、特に海の底に沈み普段人目につく機会の少ない「海底ごみ」に着目して、その実態を明らかにする調査研究事業に取り組んできた。塩飽は、当財団設立後本事業を担当し、水島灘に面する寄島町漁協などの協力を得て、海底ごみの実態把握調査を10年以上にわたり取り組んだ。2002年には、海底ごみの減量化に向けた政策提言を国や県に提出し、2003年には、漁業者が回収した海底ごみを一時保管するための海底ごみステーションの設置を岡山県の補助金で実現した。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	40
熱源人材名	馬場田 真一
活動エリア	広島県内
生年月日	1984年8月19日
内容	一般財団法人広島県環境保健協会の地域活動支援センター主任。 広島県広島市出身。 宮島の環境を守るボランティア団体「みやじま未来ミーティング」事務局。 2017年に仲間と一緒に立ち上げた一般社団法人「ふるさと楽舎」で 豊かな里山づくりに挑戦中。カヌーやシャワークライミング(峡谷を登るアクティビティ)といった自然体験のガイド・インストラクターでもある。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	41
熱源人材名	山田 賢一
活動エリア	広島県呉市
生年月日	1984年8月19日
内容	安浦町まちづくり協議会(副会長)/呉市まちづくりサポーター 平成19年より 町内小学校にて水辺教室実施。毎年子供たちと川の生き物を観察し環境の変化を学ぶ。 平成20年より町内小学校にて水産教室実施。三津口湾海上にでて山根水産(山根周志さん)の協力にて海草アマモ観察、カキ養殖について学習 ※水辺教室、水産教室において安浦地区公衆衛生推進協議会、呉市農林水産振興課の協力によって実施 平成23年には粕島の海岸清掃を安浦町まちづくり協議会会員にて実施 循環型社会を意識し、山から川から海へという流れを意識し活動。 野呂川ダム上流にて植林、野呂川下流の桜の植林にも取り組んでいる。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	42
熱源人材名	新名 文博
活動エリア	山口県下関市内
生年月日	1965年12月31日
内容	株式会社海耕舎代表取締役社長。山口県下関市出身。 2012年、NPO法人コバルトブルー下関ライフセービングクラブ設立。 競艇選手として活躍していたが49歳で引退し、2016年に海耕舎を立ち上げ 体験型観光事業を展開。漂着ごみ回収や環境教育、 過疎化など地域課題の解決に向けた取り組みが認められ、 令和2年度チャレンジやまぐち！地域貢献賞を受賞。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	43
熱源人材名	船崎 美智子
活動エリア	山口県下関市内
生年月日	1965年12月31日
内容	NPO法人やまぐち県民ネット21の理事・事務局長として、「やまぐちの豊かな流域づくり構想(榎野川モデル)(H15.3)」の策定委員として、森川海の繋がりの大切さを訴え、当時、全国的にも非常に先進的な地域通貨フシノの流通モデル実験や、流域マップの作成等を活動の中心となり、取り組む。 自然再生推進法に基づき、H16年に発足した「榎野川河口域・干潟自然再生協議会」は、全国から注目されており、大学やNPO等からの参加や、活動資金の確保等を担い、再生活動を推進する核となる人材となっている。 こうした経験を活かし、県内の海で活動するリーダーと連携しながら、H29年から日本財団「海と日本プロジェクトinやまぐち」に参画し、海を愛する子供たちの成長をサポート。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	44
熱源人材名	黒川 剛史
活動エリア	徳島県鳴門市内
生年月日	1977年8月27日
内容	徳島県鳴門市の海岸清掃活動「うずしおクリーンアップ」呼びかけ人。 京都府八幡市出身。 2012年に鳴門市へ移住し、簡易郵便局で勤務する傍ら、海で拾う流木で 手作りした「流木ペン」の売上を活動資金にして海岸清掃を続けている。 市民団体や小学生などを対象に海ごみ対策の出前講座をする機会も多い。 2021年春に合同会社スターフィッシュを立ち上げてリユースショップ運営を開始。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	45
熱源人材名	森田 桂治
活動エリア	香川県
生年月日	—
内容	特定非営利活動法人アーキペラゴ理事



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	46
熱源人材名	岩田 功次
活動エリア	愛媛県八幡浜市
生年月日	—
内容	一般社団法人 E.Cオーシャンズ／代表理事 海岸清掃・調査 宇和海に面した愛媛県南予地方は、入り組んだリアス式海岸を形成しているため漂流ごみが海岸に溜まりやすい傾向にある。このことを知った岩田氏は、持参の船で各地を回り、所轄の行政協力のもと漂着ごみ海岸清掃を行っている。採取した海洋ごみは、種別に分別し重量を計測、海洋ごみ発生源を明確にするため瀬戸内海全域で700箇所の清掃・調査を実施中。



事業ID:2019525277

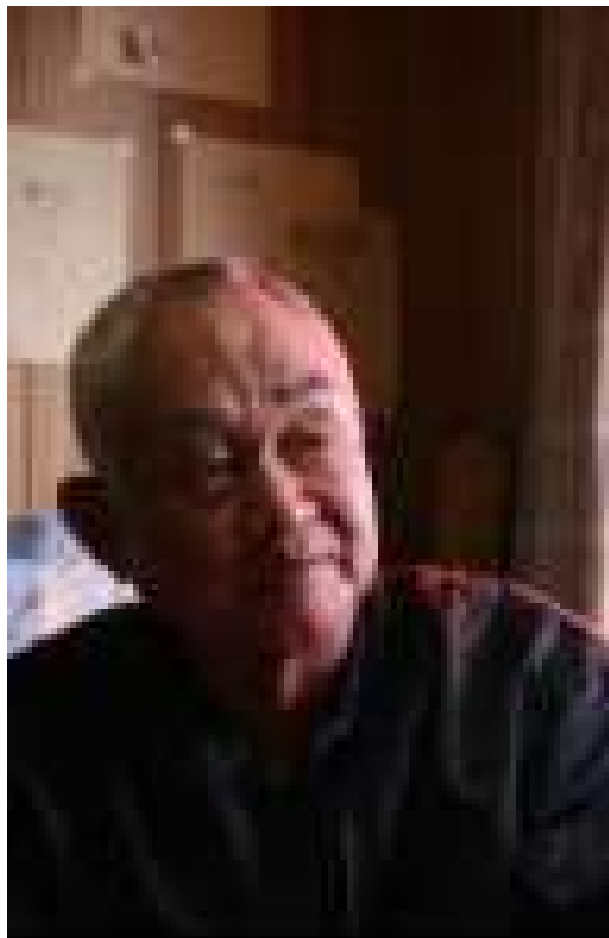
事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	47
熱源人材名	田中 政利
活動エリア	愛媛県松山市
生年月日	—
内容	まつやま里山ツーリズム連絡協議会 会長 松山離島振興協会 理事 釣りで餌として使用するゴカイの養殖を日本で初めて成功させた伝説の男。 離島というハンデをもらともせず、ゴカイの養殖を成功させ、島の産業の発展に努めた。また、漁師としても活躍し、愛媛の海の第一次産業の発展に努めた。 離島振興関係(現在) 現在はまつやま里島ツーリズム連絡協議会の会長として忽那諸島の観光・文化の振興を行っている。忽那諸島で一番の有名人。怒和島にあるゲストハウスには年間数百人が 田中会長に会うだけに怒和島を訪れる。島のこどもはもちろん、関東からも子ども大勢 受け入れ、島の生活を通じて子供の心の育成にも注力している。「島はヒトを育てる」海と共に生活し島の生活を通じて、子供たちの育成や、島の魅力発信を精力的に行っている。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	48
熱源人材名	神田 優
活動エリア	高知県幡多郡
生年月日	1966年10月8日
内容	高知大学農学部栽培漁業学科卒業後、東京大学海洋研究所で大学院博士課程修了。農学博士。専門は魚類生態学。2007年より、高知大学大学院黒潮圏海洋科学研究科客員准教授。2010年より神戸大学非常勤講師。 学生時代は釣りと高知県柏島および沖縄県座間味島でのダイビングガイドで生計を立てつつ学問に励む。潜水時間7000時間以上。 四国の西南端、高知県大月町柏島に“島が丸ごと博物館”という構想の元、海のフィールド・ミュージアムを作ろうと98年に単身柏島に乗り込み、2002年NPO法人黒潮実感センターを立ち上げる。現在、センター長。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	49
熱源人材名	井口 剛志
活動エリア	福岡県中心
生年月日	1995年5月26日
内容	株式会社ベンナーズ代表取締役。長崎県長崎市出身、福岡育ち。 福岡の高校を1年で中退し2年生からアメリカの高校へ編入。 ボストン大学でアントレプレナーシップ(起業家・企業家精神)と経営学を学ぶ。 2018年4月にベンナーズ創業。福岡市の官民共働型スタートアップ支援施設「Fukuoka Growth Next」に入居し、「日本の食と漁業を守る」を経営理念に掲げてビジネスを展開。バスケ漫画「スラムダンク」を愛読し、 「桜木花道のように強く優しく純粋に、行動でチームを引っ張っていく経営者でありたい」と奮闘中。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	50
熱源人材名	清野 聡子
活動エリア	福岡県西区
生年月日	—
内容	九州大学大学院 工学研究院 環境社会部門 生態工学研究室 沿岸・流域環境保全学、水生生物学、生態工学を専門とし、九州ならびに福岡の海が抱えているさまざまな海洋問題について、フィールドワークやイベント・シンポジウム等を通じての情報発信を積極的に行う。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	51
熱源人材名	藤井 直紀
活動エリア	佐賀県佐賀市
生年月日	—
内容	賀大学 農学部 特任助教・鹿島市干潟交流館 指導員 内湾域における動物プランクトン及びクラゲの現存量と生産速度解析 クラゲ類大量発生機構の解明 豊後水道で発生する急潮・底入り潮現象解明に関する研究 海洋における科学コミュニケーションに関する研究 有明海における動物プランクトン(クラゲ類)に関する研究



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	52
熱源人材名	瓜生 信汰朗
活動エリア	長崎県内、福岡県宗像市
生年月日	1999年11月30日
内容	長崎大学水産学部3年生。 同大の研究拠点「海洋未来イノベーション機構」非常勤職員。福岡県福岡市出身。 同大環境系サークル「ながさき海援隊」代表。大学サークル「魚料理研究会」、 長崎市市民活動センター「ランタナ」、長崎市清掃審議会委員、 宗像国際環境100人会議の学生分科会実行委員長など、多数の団体で活動。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	53
熱源人材名	東濱 孝明
活動エリア	熊本県内
生年月日	1984年4月8日
内容	株式会社SUSTAINABLE JAPAN 代表取締役社長。熊本県熊本市出身。 29歳で東京から帰郷し、IT企業勤務を経て2019年1月に起業。 主な事業は、オーストラリアで開発された海洋浮遊物回収装置「SEABIN(シービン)」の輸入販売・リース。SEABINを日本に普及させることで、 海洋ごみ・マイクロプラスチック問題の解決に貢献することを目指す。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	54
熱源人材名	海原 明子(石濱 ひとみと連名での認定)
活動エリア	大分県国東市
生年月日	—
内容	NPO法人 国東市手と手とまちづくりたい かつては瀬戸内でも珍しいアカウミガメの産卵地と知られる国東市の海の環境保全を行っているNPO法人。2010年に設立され団体独自で砂浜の減少調査、ウミガメが上陸するシーズンには海水温の調査などを実施。 環境活動の第一歩として、海亀の保護活動からその海亀を切り口に誰もが参加することができる海岸清掃を通して地域の輪を広げていき、毎年小学生や高校生、企業や行政とも連携し展開している。 一方で、目に見えるゴミばかりでなく近年問題となっているマイクロプラスチックが地元にも海にも漂着している現状を受け、海ゴミ問題を身近に迫る課題として学校での環境学習を開き、海ゴミ削減に向けた啓発の促進にも取り組みながら海岸のゴミの量の調査や、景観を守る活動を続けている。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	55
熱源人材名	石濱 ひとみ(海原 明子と連名での認定)
活動エリア	大分県国東市
生年月日	—
内容	NPO法人 国東市手と手とまちづくりたい かつては瀬戸内でも珍しいアカウミガメの産卵地と知られる国東市の海の環境保全を行っているNPO法人。2010年に設立され団体独自で砂浜の減少調査、ウミガメが上陸するシーズンには海水温の調査などを実施。 環境活動の第一歩として、海亀の保護活動からその海亀を切り口に誰もが参加することができる海岸清掃を通して地域の輪を広げていき、毎年小学生や高校生、企業や行政とも連携し展開している。 一方で、目に見えるゴミばかりでなく近年問題となっているマイクロプラスチックが地元にも海にも漂着している現状を受け、海ゴミ問題を身近に迫る課題として学校での環境学習を開き、海ゴミ削減に向けた啓発の促進にも取り組みながら海岸のゴミの量の調査や、景観を守る活動を続けている。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	56
熱源人材名	杉尾 哲
活動エリア	宮城県宮崎市
生年月日	—
内容	NPO法人 大淀川流域ネットワーク 代表理事 海の環境汚染に歯止めをかけようと「大淀川流域ネットワーク」が発足しました。ネットワークでは、毎年7月の河川愛護月間に合わせてふるさとの川、大淀川を大切にする意識を高め、川から海へ流れるプラスチックごみの削減を図ることを目的に2014年から「大淀川クリーンアップ」を実施。大淀川下流域を14区間に分け、企業や行政、学校、流域住民に呼びかけて、河川敷や堤防沿いなど延長34キロをみんなで分担し清掃活動を行っています。今年も7月18日にボランティア約1000人が参加し清掃活動を実施した。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	57
熱源人材名	池田 龍介
活動エリア	与論島内
生年月日	1984年11月27日
内容	非営利任意団体「誇れるふるさとネットワーク」代表。鹿児島県大島郡与論町出身。SUP等マリンレジャーのガイドやエコツアーガイドとして働きながら、漂着ごみを回収する「拾い箱」の普及を通じて海の環境保全に取り組む。日本財団と環境省が共同で実施する海ごみゼロアワードで『一人の100歩から100人の一歩へ「拾い箱」プロジェクト』が2019年度のアクション部門・日本財団賞を受賞。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	58
熱源人材名	友寄 隆秀
活動エリア	沖縄県内
生年月日	—
内容	「ゴミがすべての始まりだった。」代表 2か月に1回ビーチクリーン大作戦として沖縄本島の管理が行き届いていない自然の海岸を清掃しており、ビーチクリーン大作戦終了後には、海や海ごみ問題、海ごみを活用したモノづくりなどのワークショップやスクールを開催。 年に1回の活動報告イベントを設け、ビーチクリーン活動の成果や子供たちによる海ごみ問題の現状を伝えるプレゼンテーション、実際に回収したゴミの展示、有識者を招いた講演を実施している。また、他団体の取材するビーチクリーン活動への参加やアウトドアイベントなどへブースを出展し、ビーチクリーン活動への参加呼びかけや啓もう活動を実施しています。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

2-(2) 全国の熱源人材発掘詳細

No.	59
熱源人材名	金城 由希乃
活動エリア	沖縄県内
生年月日	1979年9月7日
内容	株式会社マナティ代表取締役。沖縄県沖縄市出身。 海の環境保全活動の一環として化粧品等の商品開発・販売を手掛け、 2017年に発売した「サンゴに優しい日焼け止め」は 日本青年会議所主催JCI TOYP 2019で環境大臣奨励賞、 生物多様性2018アクション大賞で審査員賞を受賞。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3.全国の熱源人材紹介特設HP

事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3-(1) 全国の熱源人材紹介特設HP記事リスト

No.	投稿日	記事タイトル	熱源人材名	都道府県
1	2020/9/16	凍る海は地球のエネルギーそのものだ！	村井 克詞	北海道
2	2020/10/20	海は、暮らしの場所。	桐原 慎二	青森県
3	2020/10/27	海は、食糧とエネルギーの供給場	志田 崇	青森県
4	2021/1/6	海は、遊び場。	川村 将崇	岩手県
5	2021/1/6	海は、強み。産地の可能性そのもの	鈴木 良太	岩手県
6	2021/1/8	海は生きがい。人生になくってはならぬもの	鈴木 和幸	栃木県
7	2020/10/30	海は神。恩恵も試練も与えてくれる。	山路 由美子	千葉県
8	2020/10/6	海は“繋がり”をつくってくれる。	矢澤 成珠	東京都
9	2021/1/6	海は人生の必須栄養素。ビタミンSEA(シー)！	高島 直子	福井県
10	2021/1/22	海は怖くてやさしい、母ちゃんみたいな存在。	野坂 昌之	福井県
11	2021/1/7	海は生命の源、心の源	白滝 治郎	岐阜県
12	2021/3/10	海は、始まり。いろんな世界の入り口	神谷 友成	愛知県
13	2021/3/15	湖(うみ)は、わくわくのかたまり！	中村 清作	滋賀県
14	2021/2/22	海は、生き物の住む宝箱や！	鍋島 靖信	大阪府
15	2021/1/7	海は、エンタテインメントの源！	大継 康高	兵庫県
16	2021/1/12	海は、わくわくするところ。	中村 和哉	和歌山県
17	2021/2/12	海は、多様性と循環	大原 徹	鳥取県
18	2020/9/16	海は、いのち。すべての“これから”を育むもの。	武田 祐子	島根県
19	2020/9/16	海とは、地球環境を学ぶ場	深谷 治	島根県
20	2021/3/15	海は、遊び友達！	馬場田 真一	広島県
21	2021/2/17	海はステージ。信念を態度で示す場。	新名 文博	山口県
22	2021/2/15	海は、憧れ！	黒川 剛史	徳島県
23	2020/9/17	海は、地球上で一番大事なプラットフォームです。	井口 剛志	福岡県
24	2021/1/18	海は、自分の人生を構成するすべて	瓜生 信汰朗	長崎県
25	2020/11/26	海は、人を育ててくれる場所。	東濱 孝明	熊本県
26	2021/2/24	海はメッセンジャー。地球の声を届けてくれる。	池田 龍介	鹿児島県
27	2021/2/5	海は、大事にするのが当たり前！	金城 由希乃	沖縄県
28	2021/3/18	海は、未知と探究の場所	浦田 慎	石川県
29	2021/3/26	海は生命の源。なんとしても守りたい。	蒲田 ちか	石川県
30	2021/3/31	海は、無限の可能性と無限のパワーを与えてくれる。	神田 優	高知県
31	2021/3/31	海は、“玄関”	馬塚 丈司	静岡県
32	2021/4/2	海はサードプレイス。自分をリセットできる“居場所”	友寄 隆秀	沖縄県

事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3-(2) 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	1
投稿日	2020/9/16
都道府県	北海道
記事タイトル	海は、暮らしの場所。
活動内容	漁師に寄り添う技術開発者
熱源人材名	桐原 慎二
記事本文	観測調査と発信施設への集客、どちらも使命 水の海をこよなく愛する彼を流水ヲタクと人は呼ぶ。その正体は、海の調査の専門家。流水が流れ着く紋別港の展望塔オホーツクタワーを拠点に、地道な観測と独自の情報発信に取り組んでいます。 流水との運命の出会いには約30年前。日本では珍しい海洋学部で学んでいた村井さんは、卒業論文を書くために紋別を訪れ、初めて流水を見ました。 「水平線まで見渡す限り一面が真っ白で、海全体が凍ってしまうという凄まじいエネルギーに圧倒されました。この光景を毎年見たい、流水をもっと知りたいたいと思い、北海道に住むことを決めました」 恩師の助けもあって卒業後は札幌の海洋調査会社に就職。継続的な観測と研究発表など様々な経験を20年以上積んだのち、再び憧れの紋別へ。紋別観光協会を経て、観光砕氷船ガリンコ号IIの運航とオホーツクタワーの運営を行う現在の会社に入社しました。 研究に加え、流水を軸に海の魅力や危機的な実態を発信していくことも村井さんの使命です。 「流水には植物プランクトンが付着しているため漁場を栄養豊かにする働きがありますし、流水に乗ってシベリアからやってくる動物もいる。多様な生態系を育むのに大きな役割を果たしている流水が、主に温暖化の影響で減少傾向にあることは深刻な問題。流水を学べば、地球規模の視野で環境問題をとらえることができるんですよ」 観光スポットでもあるタワーの館内をより魅力的にしようと、自作の映像展示やクリオネ観察会など新しいメニューも増やしてきました。以前、飼育中のタコを夜な夜な調教して、キャップを自分で開けて容器の中のカニを食べるという芸(?)を仕込んだこともあったとか。 「お客さんに喜んでもらえるよう必死です。館内の魅力アップはひとりで始めたことですが、最近では協力者や応援も増えてきて、手応えを感じ始めているところです」 いつか紋別港が、海を愛する人たちが集う聖地になる。それが村井さんの夢です。そのためにオホーツクタワーを、調査研究機能と観光的な魅力が融合したハイブリッドな施設に育てていくことが目標。 「日々の観測データや海の写真、貴重な映像を活用したユニークな展示や体験型コンテンツをもっと充実させて、海洋学習をしたい人にも観光客にも楽しんでもらえるように工夫していきます。館内ガイドができる人材も育てたいですし、なんなら自分もガイドしたい(笑)。2021年1月には3代目ガリンコ号Ⅲイメル(※アイヌ語で「光」)が就航するので、それに向けてパンフレットを刷新したり、イメルの流水観光と連携した海洋学習プログラムを企画したりと、やりたいことは尽きませんね」 凍る海に魅入られた熱いヲタク、いや熱い男、村井さんの流水愛とチャレンジ精神はますますヒートアップしています。 ★ 編集後記 ★ 実はこんな人！ 「もともと物理屋なもので、実は生物は嫌いでした…」と衝撃の告白が。しかしタワー海底階のミニ水族館で飼育する生物と触れ合ううちに約3年で情が移り、今ではすっかりいきもの大好きに。毎朝、水槽のソイやオオカミウオにおはよう挨拶してしばらく見つめ合ってからフロアの電灯を点ける、というのが習慣だそう。 こんなふうになりたいな、という海の生き物は？ 「タコ。やりたいことが山ほどあるから8本くらいは手足がほしい！頭が良いところも好きだし、なんだか得体がしれないところにも魅かれますね～」 八面六臂の働きで仕事をこなす切れ者のミステリアスな流水ヲタク、を目指しているというわけですね！



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3-(2) 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	2
投稿日	2020/10/20
都道府県	青森県
記事タイトル	凍る海は地球のエネルギーそのものだ！
活動内容	進化を続ける流水ヲタク
熱源人材名	村井 克詞
記事本文	漁師目線で、海・人・地域の共存共栄を 青森は陸奥湾を中央に抱き、三面を海に囲まれた県。日本海を北上する対馬暖流の一部が津軽海峡に入って津軽暖流となり、北からの親潮(寒流)、南からの黒潮(暖流)とがぶつかり合うことで、多くの魚が集まる日本有数の好漁場が形成されています。また、陸奥湾にはぐるりと囲む山々から栄養豊富な水が注がれ、波も穏やかなことから養殖が盛んで、特にホタテの産地としても有名です。そんな水産県・青森で、長年に渡り漁業者の後方支援にあたるのが桐原さんです。水産資源を効果的に増やしたり、海の環境を修復したりするためのさまざまな調査や技術開発に心血を注いできました。 専門はマコンブなどの海藻類で、その生態に関する数多くの研究成果は、“海のゆりかご”とも呼ばれる藻場(もば)造成の公共事業等に活かされています。さらに、定着性水産生物であるアワビ、ウニ、ナマコなども桐原さんの得意分野。つぶさな生態調査と実証実験から得られた知見をもとに編み出される増養殖技術には独創的なものが多く、例えばこんやくを偽ナマコに見立てて漁場にばら撒くことでナマコの資源量を推定したり、エゾアワビの種苗を食い荒らすイトマキヒトデをニチリンヒトデを使って追い払う手法を開発した時には、メディアでも話題になりました。 「ホタテの貝殻を利用してナマコ増殖に成功した時もテレビで紹介されました。ホタテの殻を海に撒くと、浮遊しているナマコの幼生が殻に付いて定着するので赤ちゃんナマコがどんどん育ち、湧くように増えるんですよ！かつて国道沿いには溜まりに溜まった30万tを超える貝殻が積み上げられていて、それらは産業廃棄物になるのでむやみに海に戻せず漁師さんたちは困っていました。その殻をうまく使って稚ナマコの発生場を作る手順を確立できた時は、とても嬉しかったですね。漁業者の役に立てることが一番の喜びですから」 現在の職場である研究所に移ってからは、よりスケールの大きなテーマにも取り組んでいます。それは、豊かな海洋エネルギーの利活用。目指すのは漁業と洋上風力発電とが共生・共栄する道です。 「青森県沖は風況に恵まれて洋上風力発電に適しており、今年7月には国が開発を先行的に進める『有望な区域』として県内の2区域が指定されました。今後は、発電設備の水中音が水産生物に与える影響を調べたり、藻場を造成することで水中音を低減する技術の開発などが必要になります。洋上風力を漁業に活かすにはどうしたら良いか。漁業者はもちろん地域住民が納得できるような、より良い地域づくりに直結する漁業ビジョンを示していきたいです」 長年の経験からフィールドを熟知し、地域の課題や漁師の悩みを分かっていることが桐原さんの強みであり、モチベーションの源でもあります。 「海は漁師さんが生活の糧を得る場であり、100年後も今と変わらず暮らしの海であって欲しい。そのために自分が出来ることは何でもやります。青森の漁業が持続的な成長産業として脚光を浴びる未来が見たいですから」 人と海とが共に生きていくために、地域密着かつ漁師密着型の技術屋、桐原さんの研究に終わりはありません。 ★ 編集後記 ★ 実はこんな人！ 同じ大学の仕事仲間から「海藻おじさん」と呼ばれることもあるほど海藻に関する知識は圧倒的で、「海藻のこととなると1つ質問したら答えが100返ってきて困る」という証言も。 海の生き物は何が好き？ 「う～ん、難しいですね…敢えて言うならば、海洋細菌」 …先生、そこは海藻じゃないんですね(笑)



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3-(2) 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	3
投稿日	2020/10/27
都道府県	青森県
記事タイトル	海は、食糧とエネルギーの供給場。
活動内容	アマモを守る！建設マン・兼・研究者
熱源人材名	志田 崇
記事本文	海のゆりかご、アマモの役割を知ってほしい 海草は、ワカメやコンブなどの藻類とは違い、海に生える種子植物。その代表格がアマモで、アマモが草原のように群生している場所をアマモ場(ば)といいます。アマモ場は、水生生物が生まれ、その棲みかになるだけではありません。光合成で酸素を供給し、窒素やリンを吸収して水質を浄化するなど、さまざまな機能をもった重要な存在です。 日本屈指の大きな内湾である陸奥湾は、静穏で透明度も高いことからアマモが生育しやすく、アマモの群生面積では日本一を誇ります。その一方で、実は失われた面積も日本一。埋め立てや護岸工事、ナマコの桁曳き漁による影響などで、広大なアマモ場が消滅してしまいました。そんなアマモ場を回復させようと、地元住民や漁業者と連携しながらアマモ保全の輪を広げているのが、志田さんです。 アマモの種苗を育てて海底へ移植する活動を続ける傍ら、アマモが安住できるシェルターのような“家”を開発したことが、保全推進の大きな一手となりました。その“家”の名は、「竜宮礁」。アマモの地下茎を守るドーム型の漁礁です。 「いいネーミングでしょ(笑)。竜宮城みたいで、いろんな生き物で賑わう場所になればいいなと願って仲間たちと名付けました。私の仕事は建設業で、港湾整備を通じて海の環境問題を知り、アマモ場の重要性和、その一方で直面している危機的状況を痛感しました。以来、アマモを増やそう！私たちが食糧を得るためにもアマモは大事なんだぞ！という発信をしています。竜宮礁は、桁曳き網からアマモを保護できる構造になっていて、且つナマコやウニなどの棲みかにもなります。2013年から県の公共事業で扱われているので陸奥湾での設置数は2万個近いはず。アマモ場回復に貢献できて嬉しいです」 設置後の追跡調査でヤリイカの産卵も確認され、水産資源を増やすために竜宮礁を活かさない手はないと、外海の強い波にも耐える大型版の開発に着手。387kgの標準型から15tへの大型化に成功し、現在は青森県内のほか新潟県(佐渡島)にも設置し、実証試験を行っています。 その竜宮礁の効果をまとめた学術論文が、2019年に日本水産工學論文賞を受賞しました。なんと志田さん、弘前大学大学院で学ぶ研究者でもあるのです。 「アマモは、大気中の二酸化炭素を取り込んで海に炭素を貯蔵してくれる、所謂ブルーカーボンです。なのにその種苗を育てるための揚水ポンプに二酸化炭素を出す火力発電の電力を使っているなんて矛盾してますよね。だから電力ではなく風車の動力で海水を汲み上げてアマモを育てたくて、揚水風車を研究するため大学院に入りました。開発した揚水風車は平館漁港で実験中で、実用化の目処がたっています」 さらに今注目しているのは洋上風力の可能性。海の上で風力エネルギーを生産し、海の中では風車の基礎や漁礁で多様な水生生物が豊かに育ち、浜では暮らしたり食糧生産に風力を活かす。そんな、再生可能エネルギーを軸とした海と人との共存共栄が理想のイメージだと言います。 「洋上風力発電は青森にとって重要な産業になるはずですが、漁業と協調し地域の為になることが大前提で、その歯車を合わせる仕事を今後やっていきたい。並行してアマモの保全と啓発、漁礁の開発、そして若者への海の勉強会も継続します。未来の循環型社会を思い描きつつ、地域で地道な活動を続けることが一番大事ですから。アマモを、海を、一緒に守る仲間を増やしていかなければ」 ★ 編集後記 ★ 実はこんな人！ 水の中にいることが大好きで、3歳から水泳をはじめたそうです。「今でも調査で潜水するのは仕事というより癒し。海に浸かっていると二日酔いもスッキリ治るんですよ！」…って本当ですか！？多忙のストレスに心も肝臓も負けない秘密は、海の浄化パワーらしい。海の生き物は何が好き？ 「ヤリイカとタコ。美味しい」 愛するアマモは、食べられなくて残念！



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3-(2) 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	4
投稿日	2021/1/6
都道府県	岩手県
記事タイトル	海は、遊び場。
活動内容	海を遊びこむカヤック乗り
熱源人材名	川村 将崇
記事本文	楽しめば好きになる。海を守りたくなる！ 日本財団が実施した「海と日本人に関する意識調査」(*)で、子どもの頃に楽しい海の思い出がある人は、大人になってからも海へ行きたいと思ったり、環境問題に配慮したりする傾向があることがわかりました。すなわち、海を楽しむ体験こそが海を大切に人をつくるということです。 「でも今、大人も子どもも海での遊び方を知らない人が増えているんですよ。だからこそ私が、“海で遊ぶプロ”として色んなことを伝えたい。さらにその海体験を観光コンテンツにして、交流や地域おこしにも繋げられたいですね」 そう語る川村さんは、大好きなマリンスポーツ「シーカヤック」を山田町の体験型観光の目玉にしようと、インストラクターとして活躍しています。 川村さんのフィールドは、リアス式海岸で知られる三陸のほぼ中央に位置する山田湾。山田湾は陸に囲まれた大きな湖のようで、「海の十和田湖」とも称されるほど波が穏やか。カキやホタテ等の養殖が盛んで、シーカヤックの場所としても最高の環境なのです。 「とは言え、山田湾でもともとシーカヤックが盛んだったわけではありません。漁師が多く、昔から海は仕事場でありアクティビティの場ではなかった。でも東日本大震災の後の復興ムードの中で、山田でも観光に力を入れようという流れが生まれました。そこで、私が小学4年の頃からずっと親しんできたシーカヤックで人を呼べないだろうかと、体験型交流観光への挑戦を始めました。シーカヤックは海を自由に漕ぎ、陸からは行けない場所にも上陸できたりするのが醍醐味。その体験に魅了されてリピーターになる方も多いです。起業して5年、お客様で交流人口の増加に貢献できています」 2代目である家業の「金揚げ屋」は1985年創業のうどん屋で、震災以前から入店待ちの行列が当たり前だった繁盛店。三陸産の海藻たっぷりの磯うどんや、山田湾のカキの天ぷらうどんのほか、地元食材にこだわったメニューや自社開発の特産品を揃え、町外からも多くの客が訪れます。2020年10月には店内を改装して席数を倍にし、地元の海産物をその場で焼いて味わえるコーナーも新設して客足はますます増加傾向。シーカヤックは冬季休業とは言え、うどん屋の厨房との“二足の草鞋”はさぞ大変かと思いきや... 「いや逆に面白いんですよ！私は、体験型観光と地域の食べものを繋げたいんです。シーカヤックした後に店でうどんを食べ、さらにカキとホタテの浜焼きを堪能し、おみやげ用に海の特産品を買って帰る。地元密着のエンタテインメントですよ」 シーカヤックや食を含む“山田ならではの体験”を求める観光客が増える中、川村さんが大きな課題だと思っているのは、海ごみです。「ごみ対策として、まずは海を大切に思う人を増やす。このためにシーカヤックで海に親しむのは有効だと思って取り組んでいます。もう一つは、ごみを回収する方法を探す。三陸には海ごみを回収する会社が無く、各地域で砂浜の管理にとても苦労しています。そこで、無いなら作るしかないかなと。ごみと砂を分けて回収できる『ビーチクリナー』という機械を導入して、ビーチクリーンの会社を新しく作ってしまおうと準備中なんです。三陸全体のニーズに応えられるはず！」 海ごみ回収事業も含め、やりたいことが山ほどあってマンパワーが足りないと言苦める川村さん。 「東北にはみちのく潮風トレイルというコースがあるので、トレイルのガイド業もやりたいんですけど、今は忙しくて...。未来の仲間であるUターンがもっと必要です。地域の人材が戻ってきたいと思うように、ふるさとへの愛着を増やさなきゃいけない。そのために自分は、シーカヤックと食の充実で、観光客だけでなく地元の人に向けても、遊び場としての海の魅力を発信し続けたい。『海、楽しいな！』という体験が、元気な地域や綺麗な海への第一歩だって信じてます」 (*)「海と日本人に関する意識調査」(2019年) ・対象:全都道府県15歳～69歳の男女(男性5,800 女性5,800) ・有効回答数:11,600 ・期間:2019年5月24日～6月3日 ・調査方法:インターネット調査 ★ 編集後記 ★ 実はこんな人！ “海遊びのプロ”には、伝統芸能の達人という一面も。鹿踊(ししおどり)の一つ、山田町に伝わる「八幡鹿舞(はちまんししまい)」の舞い手でもあり、伊勢神宮で奉納の舞をしたこともあるとか。文化継承の面でも地域を支えています。 自分を海の生き物に例えると？ 「サケ！一度はふるさとを離れてもちゃんと戻ってくる。そんな人間をもっと増やして、地元を元気にしたいなあ」 長旅をして大きく育ち、母なるふるさとに戻るサケ。困難に打ち勝って遡上してくるタフなイメージも良いですね！「鮭ターン」の若者が増えますように。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3-(2) 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	5
投稿日	2021/1/6
都道府県	岩手県
記事タイトル	海は、強み。産地の可能性そのもの
活動内容	宮古の味を守る！熱いイカ王子
熱源人材名	鈴木 良太
記事本文	「美味しい！」を産地に増やしたい 世界三大漁場の一つ、三陸。その海岸沿いにある宮古市に、『イカ王子』はいます。イカ王子。そのチャームイン称号の裏に熱い想いを秘め、ふるさと宮古を水産の特産品で盛り上げようと挑み続けている人こそ、鈴木良太さんです。 「東日本大震災で地域も会社も大打撃を受け、その惨状の中、自分に何ができるのかを必死で考えました。答えはシンプルで、結局宮古は水産のまち。そして俺は水産の人間だと。俺ができる“泥かき”は、水産加工で地域を盛り上げることだと。でも当時の俺はまだハートが弱かった。自分を変えて強くなりたいと思って、敢えて『イカ王子』を名乗ったんです。決してふざけてたわけじゃないんですよ(笑)メッセージ性や話題性も大事な目的ですが、むしろ自分を世の中に晒すことで追い込むというか...腹を括ってこの地域で生きていくぞ！という覚悟ですね」 イカ王子の登場は、鈴木さんにとっては決死のファイトニングポーズでした。 その後は会社のホームページ等でイカ王子として発信を始め、イカ王子を名前に使った商品を含め、共和水産の加工品から続々とヒットが生まれました。宮古で水揚げされた肉厚なスルメイカを使った「いかそうめん」の冷凍シリーズは不動の看板商品に育ち、現在は一日に2万～2万5000食を製造しています。 一方で、震災後に地元の水産仲間と立ち上げた「宮古チーム漁火」では、各々の得意を生かしてノウハウや販路を共有することで業務を効率化し、新製品の開発や、台湾やアメリカなど海外での販路開拓と一緒に進めてきました。 「チーム漁火は自分にとって本当に大切な存在で、いつも仲間に支られています。一緒に取り組むメリットは大きくて、チーム全体での売上げは震災前と比べて3倍以上になりました。これから他の業者とも連携を広げていけたら、宮古の水産業界の底上げに繋がるはずだと考えています」 地域の宝を生かし切ることを使命とする鈴木さんは、イカ以外の水産物にも光を当てています。例えばタラ。宮古港は真鱈(マダラ)の水揚げ量が日本でトップクラスですが、その魅力をアピールする加工品が乏しいのが課題でした。そこで、地元の異業種3人で発足したプロジェクト「三陸王国イカ王子」(代表＝鈴木さん)で「王子のぜいたく至福のタラフライ」という新商品を開発したところ、大当たり。人気テレビ番組で紹介されたことも後押しし、ネット販売で数ヶ月待ちの大人気商品になりました。 「王子のタラフライは今では地元のソウルフードになりつつあると自負しています。宮古でずっと愛されていたものを、手軽で美味しくお腹いっぱい食べられるような加工品としてブランド化する。まさに俺が目指していたことを実現できたのが、この商品です」 「共和水産として売る大ロット製造のいかそうめんと、地元向け商品や、こだわり抜いた少量生産の商品では、ターゲットに応じて加工や味つけを変えていますし、売り方も販路も戦略的に選んでいます。特にいかそうめんは宅配が強く商品種類も多いですが、コンビニでは決して売りません。新型コロナ時代にも対応するため、宅配やネット販売には更に強くなりたい。魅力ある商品を作るだけではなく、狙ったお客様にちゃんと届けるということが大事ですね」 会社では仕入れから製造、営業まで何でもこなすのは当たり前。その他にも「イカ王子の魚市場ツアー」など観光と水産の融合を試みたり、地元で「イカ王子塾」と呼ばれている実践型インターンを行ったりと、地域おこしや教育、人材育成の分野にまで活動の幅を広げている鈴木さん。ベースにあるのはやはり、宮古愛です。 「地域に多様な若い人材を増やして、もっと宮古を盛り上げたいですから。そして俺の軸はあくまで海と水産。海は地域全体で守るものだし、そのためには、宮古で水揚げされた水産物を地域のみんなが愛し、美味しく食べていることが大前提だと思うんです。産地のすごさを見せつける加工品をこれからも作って、発信して、それを地域のパワーに変えていきたい」 宮古だからできる。その信念は揺るぎなく、イカ王子には希望しか見えていません。 ★ 編集後記 ★ 実はこんな人！ 「食うために生きてます」と断言するほど飲食が好きで、時間があれば調理法や冷凍法の研究に没頭。イカふ(＝イカのわた)を夜な夜なかき混ぜて、いろんな塩で発酵させて味の違いを食べ比べてみたりと、とにかく美味への探究心が尋常ではないマニアック王子。自分を海の生き物に例えると？ 「スルメイカ！食べ方のアレンジが無限大で、その柔軟性が自分っぽい。あとイカは鮮度が高ければ高いほど美味しく、しかも1年魚。遠い未来より一瞬一瞬を鮮やかに熱く生きるのが俺の生き方なので、そういうところもイカと同じだな」 イカ愛溢れるイケメン、いやイカメン。「イカみたい！」は王子にとっては褒め言葉なんですね...



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3-(2) 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	6
投稿日	2021/1/8
都道府県	栃木県
記事タイトル	海は生きがい。人生になくってはならぬもの
活動内容	海に一途な熱血サーファー
熱源人材名	鈴木 和幸
記事本文	気持ちよく波に乗れる環境を絶対に守りたい！ サーフィンが好き。だから海が好き。 19歳で波に乗る快感に魅了され、以来35年間も海に通い続けている鈴木さんのサーフィン熱は、今も「1週間サーフィンしないと体がおかしくなる！」というほど。まさに骨の髄までサーファーですが、出身は意外にも「海のない、栃木県です。 「そう、海なし県なんです(笑)だからこそ海への憧れがありました。たまたま知り合いに誘われて、片道1時間半の茨城の海でサーフィン初体験。波をとらえる瞬間がもうたまらなくて1回でハマりました。波の大小に関わらず、この気持ち良さは他ではどうしても味わえない感覚なんです」 鈴木さんが運営するDEVICEは、サーフィン関連用品を扱うショップであると同時に海好き仲間の集まる場。サーフィンの魅力を広めるために、初心者向けから上級者向けまで様々な内容のレッスンも行っており、「海なし県だからって海の楽しさを知らないのは勿体ない」と、子ども向けサーフィンスクールにも力を入れています。 「海の楽しさは勿論ですが、大切さも伝えたい。海ごみの8割は内陸部から出ていると言われていたのに、海との関わりが無い人はどうしても海ごみへの意識が低くなりがちです。栃木の人にも何かをきっかけに海を身近に感じてほしい。私の場合はサーフィンを通じて、大切なことを伝えていきます」 さらに、長年取り組んでいるのが定期的なビーチクリーンです。茨城県のサーフィン団体と一緒に清掃活動が続けてきたことで、海ごみ問題を共に考える仲間が増え、ビーチ周辺住民からも積極的に協力してもらえるようになりました。 「海ごみだけでなく、海岸の浸食問題にも危機感を持っています」と話す鈴木さん。海岸の浸食とは、海岸線がどんどん後退して陸地面積が減っていく現象のことで、海岸にある土や砂が波によって海へと流されてしまうことで起きます。海岸浸食問題は、近年、日本各地で深刻化しており、その原因は、ダム建設や河川の工事などにより、内陸から運ばれて海岸線に堆積するはずの砂が急激に減ってしまったことだとされています。 鈴木さんは東京オリンピックのサーフィン種目競技委員の一人ですが、その競技会場である千葉県九十九里海岸でも、ここ約40年の海岸浸食によって30kmにも及ぶ海岸線が侵食されています。 海岸浸食の対策として波消しブロックを整備するケースもありますが、それが原因で快適なサーフィン環境が失われることも起こり得ます。鈴木さんによると、例えば茨城の阿字ヶ浦。かつてはサーフィンのメッカで、北関東一の海水浴場でした。しかし、その阿字ヶ浦でも、港の拡張工事のために沖に巨大な防波堤がつくられ、波を消すためのブロックがたくさん設置されました。そのせいで、潮流も海底の地形も変わってしまい、サーフィンも海水浴もできなくなってしまったそうです。 海岸浸食はサーファーの力だけでは解決できない課題です。しかし、例えば乱開発へのチェック機能を持つなど、海を愛する仲間が集まって声を上げることで可能になることも何かあるはず。そう鈴木さんは信じています。 「サーファーも釣り人も地域の皆さんも、海を守りたい！という気持ちは同じ。横の繋がりを意識して、輪を広げながら発信していくしかないですね。これまでの環境保全活動を通じて地元の自治体とは連携を図れているので、諦めず、現状を知り、地道な活動を続けていくことで何かしらの成果を出せると考えています。大袈裟ではなく日本中、世界中を巻き込んで、未来の海について考えていきたいです」 ★ 編集後記 ★ 実はこんな人！ 栃木から茨城へ、サーフポイントへ向かう車の中が最高にテンション上がるという鈴木さん。片道1時間半の距離が愛を育てました。海に入るとスイッチが入ったように「見える世界が変わって心が晴れる！ストレスが消し飛ぶ！」そうで、まるでサーフィン健康法。自分を海の生き物に例えると？ 「イルカかな。いつか野生のイルカと並んで波乗りしたいですね」 今でも無邪気な少年っぽさを残す鈴木さん。いつか、「イルカに乗った少年」ならぬ、イルカと波乗りする少年(?)になれるかも。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3-(2) 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	7
投稿日	2020/10/30
都道府県	千葉県
記事タイトル	海は神。恩恵も試練も与えてくれる。
活動内容	塩でご縁をむすぶ人
熱源人材名	山路 由美子
記事本文	使命に燃えて、塩(えん)むすび！ 「海の恵みを結晶にしてお届けするのが私の仕事です」 そう語るのは、千葉県九十九里の塩づくり職人の山路さん。九十九里浜の海水を使い、太陽や風、自然の力を借りながら作り上げる「山武の海の塩」は、粒が大きく、さくり、ふわりと甘みを感じさせるのが特徴です。 山路さんの塩づくりの手順は、次の通りです。 ①潮汐を見極め、澄んでいる場所を選んで海水を汲んでくる。 ②垂れ下げた魚網にひしゃくで海水をかけ、海風と日光で余分な水分を飛ばして塩分を濃縮させる。＝流下式採鹹(さいかん) ③濃縮された海水を平釜に移し、薪を焚いて、丁寧に灰汁を取りながらじっくり煮詰める。＝煎熬(ぜんごう) ④約4日煮詰めると塩の結晶が現れてくるので、すくい取る。 ⑤すくった塩を天日干し。余計な水分を飛ばしたら出来上がり！ まさに自然との共同作業。約1tの海水から生み出される塩はたった20kgほどです。 「手間がかかる上に大量生産はできません。工程の中では特に平釜の薪の火加減が難しく、かつ重要なので、今でも緊張しますよ」 山武では戦後、塩田方式での塩づくりが盛んに行われていました。塩は薪や食糧と物々交換され、山間部の住民と浜の住民とを繋ぐ存在でもありましたが、燃料が手に入りやすくなるにつれ、もともと重労働だった塩づくりは徐々に廃れていったそうです。 その塩づくりを復活させようという機運が生まれたのが約10年前。地域の人や観光客に海の魅力を再認識してもらおう、海への注目を取り戻そう！という挑戦でした。 「塩田ではなく魚網を使う方法を採用して、平釜での炊き方は、以前の塩づくりを知る世代の皆さんに教わりました。昔の良さを生かしながら現代風にアレンジして手順を決め、試行錯誤して、品質が安定するまでは時間がかかりましたね。事業が始まった2014年は山武市の観光協会が運営しており塩づくり体験がメインでした。ところが出来た塩がとても美味しいと評判になり、商品化が決定。私は当初は観光協会職員として関わっていましたが、色んな経緯があって、プロジェクトを一人で引き継いで独立しました」 山武の塩が美味しい秘密は、こだわりの製法によって海のミネラルがそのまま閉じ込められていること。中でも特にカルシウムが多く、100g当たりの含有量が1,300mgというのは全国の有名産地で作られる塩と比べても圧倒的です。 「甘みが強いのはカルシウムのおかげですね。さらに味が尖らずまろやかなので料理やお菓子作りに使いやすく、羊羹やブッセ、パン、餃子などコラボ商品がどんどん増えています。海水は大潮の時が一番綺麗なので、出来る限りその日を狙って汲みます。月のリズムに合わせることで神秘的なパワーが増すような気がして…。最近では神社のお清めの塩として使っていただくこともあるんですよ」 2019年4月、山路さんが海水を汲む海岸の本須賀海水浴場が、国際環境認証である「ブルーフラッグ」を千葉県で初めて取得し、安心安全で美しい海岸であるというお墨付きを得ました。そして同年夏、山武の塩は商品パッケージをリニューアル。人と人とをむすぶ塩であって欲しいという想いを込めて、「塩(えん)むすび」と大きく記しました。 「私たちの海にブルーフラッグ が掲げられ、海への想いはますます強まりました。綺麗な海あってこそこの塩。素晴らしい環境も塩づくりも100年先まで続くように、私は塩を通して海の魅力を発信していきます。正直とても大変で試練は続くんですが(笑)、待っていてくれるお客さんや助けてくださる皆さん、塩がむすんでくれたご縁が宝物。私がやめるわけにはいかないと覚悟を決めています」 ★ 編集後記 ★ 実はこんな人！ 「今年6月の新月の大潮の日の海水でつくった塩はすごいパワーでした！私には違いが分かりましたよ。ふわふわ～というか、やさしい～というか…」 山路さん、塩センサーが凄いいことになってます。 海の生き物は何が好き？ 「ながらみ！サザエみみたいな味で、アワビに似た食感なんです♪」 ながらみは別名「キサゴ」、巻貝業界(?)では「女王」や「宝石」とも呼ばれ、美しいだけでなく酒の肴に最高なんだとか。見目麗しく人を魅きつける、山路さんのイメージにぴったりですね！



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3-(2) 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	8
投稿日	2020/10/6
都道府県	東京都
記事タイトル	海は“繋がり”をつくってくれる。
活動内容	フットワーク自慢のアクティブ女子大学生
熱源人材名	矢澤 成珠
記事本文	声を上げて海を守る。海岸清掃でもまず声！ 海なし県・埼玉で生まれ育った矢澤さんが海ごみ問題に闘志を燃やし始めたのは、IVUSAでの活動がきっかけでした。IVUSAとは、約80大学の4000人近い会員が所属する国内最大級の学生ボランティア団体で、国際協力、環境保護、地域活性化、災害救援、子どもの教育支援の5分野を軸に国内外の各地で様々な活動をしています。高校卒業までサッカー漬けだった矢澤さんは、「もっと社会を知り、新しく挑戦するものを見つけない」という動機でIVUSAに入会。そして大学1年の夏、海と日本プロジェクトが支援する海ごみ対策活動「九十九里浜清掃」に参加した際に、その後の学生生活を方向づける出会いがありました。 「九十九里浜清掃は2002年から続いているIVUSAの恒例行事で、約300人が数日かけて、全長66kmの浜の全域を2チームに分かれて両端から清掃します。参加する前は、単なるごみ拾いだろうと思っていたのですが...当時のリーダーだった先輩に出会って考えが180度変わりました。その先輩は、海ごみ問題という社会課題に向かって、いかにチームで意志を統一し、いかに多くの人を巻き込んでいくかに情熱を注いでいた。絶対にごみを拾いきって自分たちの意志を示すんだという気迫に圧倒され、私も見事に巻き込まれて(笑)。『熱意をもって発信し続けたら社会はもっと良くなる』という可能性を信じるのが出来たんです」 九十九里浜でごみを拾う行為そのものが問題を根本解決するわけではなく、参加者が海ごみ問題に気づくきっかけを作ることというのが大事なんだ。真剣に伝え続けたら人は動く！...先輩の言葉から矢澤さんが学んだことは数多くあります。中でも嬉しかった気付きは、「清掃にも大きな声は役立つ」ということ。 「海岸清掃って黙々とごみを拾うイメージがありませんか？でも実際は賑やかで驚いたんですよ。ごみを分別するために声を掛け合いながら進むし、拾いきるぞー！という雄叫びや、エッサ！エッサ！という歌みたいなのもある。私は部活の経験で声出しに慣れているので頑張って大声を出していたら、先輩が大勢の中から私の存在に気付いて近づいて来て、『君もいつかリーダーの一人になるんだ』と言ってくれた。感激して、先輩への憧れだけではなく自分自身のチャレンジとしてやってみようという意志が芽生えました」 以来、海ごみ問題が自分ごとになった矢澤さんは、関東以外にも新潟や沖縄などで清掃に参加。常に声かけやコミュニケーションを重視し、現地の学生や住民の方と共に取り組み、環境意識を底上げするための啓発を続けてきました。そして今年、2020年の九十九里浜清掃ではついに、先輩の予言(?)通り、白山クラブのリーダーを務めます。新型コロナウイルス対策で夏の開催は延期され、9月現在、開催日程は未定ですが、SNSでの発信など事前に出来ることを進めています。 人生の糧となる出会いや仲間。海ごみ問題に向き合い勉強や実践を重ねる中で多くを得てきた矢澤さんは、感謝を込めて「海は私にさまざまな繋がりをつくってくれた」と言います。 「だからこそ守っていききたい。『(ごみを)拾う心よりも捨てない心』というIVUSAの理念の通り、環境を意識した行動が当たり前の中を目指します。海ごみの8割は内陸の都市部から出ているということも多くの人に知ってもらわないといけません。新型コロナウイルスの問題で年内の活動はほぼ中止になってしまったけれど、オンラインでの発表や研修など出来ることはある。そしていつか再開されたら全国各地の清掃に行きます。大きな声を武器に(笑)、参加者と一緒に海のことを考える機会をつくり、かつて先輩が私を巻き込んでくれたように、私も大勢を巻き込んでいきたいです！」 ★ 編集後記 ★ 実はこんな人！ 21歳の女子大学生だが「一切キャピキャピしていません！」と本人談。2歳の甥っ子を溺愛中で育児スキルが鰻のぼり。「このまま」オバさん化。が進んでもいい、毎日甥っ子を世話していたい...。でも今年の九十九里浜清掃の日程が決まったら、シャキッと大変身します！」 自分を海の生き物に例えると？ 「マグロ。泳ぎ続けないと死んじゃうから。私も動いていないと落ち着かないタイプで、何事も五感を使って体験していくことでしか肥やしにならない気がします」 さすがは体力自慢のサッカー女子、常に現場で身体を動かすことで色んなものを吸収し、自らを育てながら進み続けるってことですね！可憐な見た目とは裏腹に男前だな～！



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3-(2) 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	9
投稿日	2021/1/6
都道府県	福井県
記事タイトル	海は人生の必須栄養素。ビタミンSEA(シー)！
活動内容	好奇心に燃えるビーチコーマー
熱源人材名	高島 直子
記事本文	漂着物に萌える！私だけの宝探し 海の楽しみ方は数あれど、高島さんがどハマりしているのは、ビーチコーミング。 海岸には貝殻や流木、ガラス片、ごみなど、毎日様々なものが流れつきます。そのような漂着物の中から自分が「これは！！」と思う物を探し出して観察したり集めたりする、すなわち“海辺での宝探し”がビーチコーミング(=浜辺を櫛くずるように丁寧に探すという意味)です。 「15年前、3人めが生まれた頃に子どもたちを広い場所で遊ばせようと浜へ出かけたのがビーチコーミング人生の始まり。子どもよりも自分がハマってしまい、三里浜という砂丘をホームとして活動を始めました。北陸のビーチコーマーの師匠、林重雄さんとの出会いも大きかったです。林さんが講師を務めるビーチコーミング講座(福井県海浜自然センター)に参加して勉強するようになり、海流や地理にもどんどん詳しくなっていました(笑)」 ビーチコーミングの醍醐味を聞くと、 「宝は人によって違うので、まさに“自分だけのお宝”を手に入れられるところがいいんです。例えば、ある5歳の男の子は干からびたハリセンボンを10個くらい拾った。それってかなり臭いんですけど彼はホクホク顔なわけ。他に誰も欲しがらないから喧嘩にもならない(笑)。あとは、たまに食材に出会えるのも助かります。瀬死のアミモンガラを拾った時はお鍋に投入しましたね～」 なんとも楽しそうな高島さん。世界最大の豆である亜熱帯産のモダマ(藻玉)や、非常に珍しいルリガイなど様々な発見と経験を重ねるうちに、流れ着く生き物への関心も高まり、福井市自然史博物館の標本作りにも参加するようになりました。 「イルカもクジラも流れ着いたら漂着物です。絶滅の恐れがあるタイマイやヒメウミガメが打ち上げられることもあり、今年の6月にも発見しました。そのような希少種は自然史博物館に運ばれて、動物標本作製ボランティアの『骨部』が標本にします。私もその部員なので大物も解体できますよ！2010年に仲間たちとビーチコーミング展を開いた時には、県内で初めて発見されたアオウミガメの子どもを標本にして展示したこともありました」 冬の日本海というと、海は荒れて浜は閑散とし寒々しいイメージがありますが、日本海側のビーチコーマーにとって冬は胸が高鳴るシーズン。北西の季節風が強まり日本海側に多くの漂着物が打ち上げられるため、「テンション上がるアツイ季節！」なんだそうです。 「冬の海って意外と賑やかでお宝がわんさか。絶対に見つけたいものは、アオイガイ(貝殻に入った雌のタコ)！タコブネ(貝殻をもつタコ)！モダマ！ガラスの浮き！寂しいと思われがちな冬の海の魅力を知っている、ビーチコーマーって幸せだなと思いますよ」 海辺に通うようになり、宝探しを楽しむ一方で多くの漂着ごみとも向き合うこととなった高島さん。打ち上げられる漂着物は海由来のものばかりではなく、陸で捨てられたごみが河川を通して海に注ぎ込み、海を漂った後で漂着することも多いのです。 海ごみ削減に少しでも貢献できるようにと、ビーチコーミングを通じて海への興味を持ってもらうワークショップを開催し、その様子をYouTubeで発信することにも取り組み始めています。 「頻繁に海に行き身近に感じるようになれば、ごみの現状も分かるし、綺麗な海を守りたくなるはず。ビーチコーミングはみんなで楽しく安全に遊べて、ごみ問題への意識づけも出来る良い手法なので、この活動を通じて海好きを増やしたいです。海もビーチコーミングも私にとって本当になくてはならないもの。まさにビタミンSEA(シー)なんです！！」 人生を豊かにするビタミンSEAの大量摂取で楽しくパワーチャージし続ける高島さん。漂着物へのマニアックな愛、これからの発信がますます楽しみです！ ★ 編集後記 ★ 実はこんな人！ 真冬の浜へビーチコーミングに繰り出して、遭難しかけた経験も。 「いい天気だったのでヤル気満々で石川県の片野海岸まで行ったらあれよあれよという間にホワイトアウト。雪で視界が真っ白の中、ここで死んだら笑われるよな～と思いつつ足元のキノコを観察しながらてくてく歩いて帰りました。往復7.5kmでしたね・・・剛毅！！自分を海の生き物に例えと？」 「ラッコ。友達の娘さんが私を『ラッコ先輩』って呼ぶんですよ～。お腹の存在感と、甲殻類を上手に捕まえるところが似てるらしい(笑)」 イカ・カニ・タコを鮮やかに捕獲した姿を見ての命名だったとか。漂着物も食材も見事にゲットする(そして食べる)ハンター高島さんへのリスペクト溢れるネーミングですね！



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3-(2) 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	10
投稿日	2021/1/22
都道府県	福井県
記事タイトル	海は怖くてやさしい、母ちゃんみたいな存在。
活動内容	海にやさしい食文化クリエイター
熱源人材名	野坂 昌之
記事本文	脱プラスチックへ！テイクアウト文化に革新を 2020年初頭から新型コロナウイルスが蔓延し、その感染防止対策のため、飲食物のテイクアウト販売が一気に増えました。それに伴いレジ袋とプラスチック容器の消費量も激増し、このままでは海ごみ問題の悪化が避けられません。なぜなら、海ごみの多くは内陸部でポイ捨てされるレジ袋やプラスチックごみが川から海へと流れ込んだものだからです。 そんな状況の中、「プラ製のレジ袋ではなく『紙製の岡持ち』を使うテイクアウト文化を提案したい!」と、容器も梱包も全てをプラスチックフリーにできる画期的な岡持ちを世に出した人物。それが野坂さんです。 岡持ちとは、いくつもの料理をお店の器に入れたまま多段に積んで出前をし、後で回収するための、持ち手のついた箱のこと。「岡持ちは江戸時代から使われていた道具で、ごみを出さないという意味で自然環境にやさしいシステムでしたが、現代では廃れてしまいました。この岡持ち文化を時代に合った形で復活させたくて...自分は企業のマーケターでも発明家でもなく、ただの料理人なんですけれども(笑)、いいのが無いから自分で作っちゃいました」 試行錯誤して自作した「食品多段式梱包容器」で特許を取り、紙製の使い捨ての岡持ちを最初に発表したのは2017年。しかし当時は中の容器にはまだプラスチック製のものを使っていました。 「最初は、実は環境保全というよりも自分の店の差別化につなげることを狙っていたんです。でも2018年が転機となりました。鼻にストローが刺さったウミガメの映像が世界に衝撃を与えたでしょう。あれを見て自分もショックを受けました。一気に危機感が募り、これからは世界全体で脱プラスチックに向けて動かなければならんと。環境や次世代のことを考えた商品開発をしなければならんと。そこから、容器も岡持ちも全部を紙で作ろうという挑戦を始めたわけです」 その後は素材や構造を再検討して試作を重ね、中の容器やカトラリーも紙製や木製にして、テイクアウトの一式すべて脱プラスチックを実現する岡持ちがついに完成。新商品「OKAMOCHI カフェバッグ/デリババッグ」として2020年5月に全国販売を始めたところ大きな反響を呼び、80件以上のメディア取材を受けました。 料理の腕以外に、新しいアイデアを形にするオにも恵まれ、仲間を集めて盛り上げることが得意な野坂さん。多くの地元団体が協力する官民一体の取り組み「福井県プロジェクト」でも、スタート当初からずっと実行委員長を務めています。 その活動の一環として、2021年に仕掛けるっておきの企画を練っているとのこと、内容をこっそり教えてもらおうと... 「キーワードは、カップごはん！カップ自体を新しくするんです。ごはんを入れる器はみんな丼だと考えて、バガス(=サトウキビの搾りかすを使用した紙の一種)などの天然素材を使って今までに無い器(カップ)を新開発するのは、福井県のニューノーマルな取り組みとしてアリでしょう」と自信満々。 「Withコロナの時代に作り出したいブームはズバリ、『カッコいい車食(しゃしよく)』です。コンビニで買ったお惣菜を車の中で食べている人を見て、カッコ悪いなあと思ったのが着想のきっかけ。どうしたら車の中でカッコよく食べられるか？おにぎり以上・お弁当未満のボリュームにするにはどうしたらいいか？器が大きすぎず小さすぎず、持っても熱くなくて、こぼれなくて、もちろん環境にやさしくて...などなど色々考えて、答えはカップごはん！と。バガス素材のカップと、それを何個か入れられるカッコいいカップホルダーを世に出します。普及するためにはカッコいいデザインが必要なんです。新しい車食文化のイメージが俺にはもう出来ている！実現するのが楽しみです！」 「そのために、当社のOKAMOCHIが役に立つはず。普及が進めば、採用する企業もそれを使う消費者の意識も変化して、社会全体の意識改革につながります。ただ、まだ認知度が低くて単価が高いのがネックなので、今後はより多くの企業に使っていただくことでコストダウンを進めていきたい。海ごみ問題をなんとかしないと漁獲量がますます減って、飲食業界では海産物をメニューにしている店が潰れてしまうでしょう。私はOKAMOCHIの普及に社会的意義を感じている。自分が今これをやらないと日本の食文化が壊滅してしまう、というくらいの気持ちですよ」 Withコロナ時代のニューノーマルとして、海にやさしいテイクアウト文化を。 「熱源には次々と燃料を入れられないといけないでしょ。だから、敵も逆境も、私にはありがたいですよ」 コロナ禍すら燃料として、豪快に進む野坂さん。2021年は福井県から熱いムーブメントが巻き起こりそう！ ★ 編集後記 ★ 実はこんな人！ 自分自身を「天才ならぬ、天災料理人かも...」という野坂さん。かつて、目玉焼き専用ドレッシングを開発した時には河川の氾濫で工場が流され、白いとんかつソースを開発した時には大地震が勃発。「逆境も燃料!」と豪語する野坂さんなので、天災のたびにパワーアップしてるってことですね。やっぱり何かを持っています。 自分を海の生き物に例えると？ 「クラゲ。小さいけど人も殺せる、すごく弱いけどすごく強い、得体が知れない謎の存在！裏表がなく神秘的で、見ると癒されるのも良いよね〜」 得体が知れない、“只者ではない”ボスキャラ感。確かに野坂さんからもその匂いを感じます...



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3-(2) 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	11
投稿日	2021/1/7
都道府県	岐阜県
記事タイトル	海は生命の源、心の源
活動内容	伝統の技を継ぐ溪流釣り名人
熱源人材名	白滝 治郎
記事本文	川と共に生きるからこそ思う、山のこと、海のこと 岐阜県の長良川は水の美しさで知られ、高知県の四万十川、静岡県の柿田川と並び称される日本三大清流の一つです。県内を南へ縦断する長良川の源流は、郡上市の大日ヶ岳。その郡上市に生まれ育ち、伝統の「郡上釣り」という釣技を継承するのが白滝さんです。 「父親も祖父も、長良川のアユを釣って生計を立てる『職漁師』でした。父に教わって最初にアマゴを釣ったのが6歳。それ以来、溪流釣りが大好きになり、10歳でアユ釣りも始めました。郡上にはアユ文化が根付いていて、釣りが上手なことがステイタス。とにかく子どもの頃から釣りにハマっていましたね」 白滝さんが職員として38年間勤務し、現在は副組合長を務めている郡上漁協は、長良川という恵まれた漁場を守るため様々な取り組みを続けています。稚アユの放流や、釣り場環境の整備。そして特徴的なのは、漁協でありながら、森を育てるための植樹を行っていることです。 「戦後の植林政策で、天然の広葉樹を伐採してスギやヒノキなどの針葉樹ばかりがどんどん植えられました。しかし針葉樹では広葉樹のような腐葉土ができないので、山がやせてしまった。本来ならば雨が降ったら山の腐葉土に含まれる養分が川に流れ込み、川や海のプランクトンのエサとなって豊かな漁場を育むはずなのに、山がやせてしまっただけでは元も子もない。そこで、漁場である川や海をより良くするために、まずは山の力を取り戻そう！と考えて、落葉広葉樹を増やす活動を始めました」 そのような想いから、郡上漁協主催の「長良川源流の森育成事業」が2010年にスタート。趣旨に共感して植樹に参加する人が年々増え、現在も継続しています。 「私たちの植樹のスローガンは『山から川へ、そして海へ』です。川と海との連続性を教えてくれる存在はアユ。アユは秋に川で生まれ、海へ行き、栄養豊富で川より暖かい冬の海を揺りかごとして過ごす。春に川の水が温むと遡上し、夏に川で苔を食べて大きく育つ。その夏のアユを私たちが獲るわけです。アユは川の魚ですが、いい海がないと育たないんですよ。海、川、山。水産資源の管理のために生態系の中の“水の連続”を考える大切さを漁協として訴えていきたい。植樹は年に1回ですし効果がすぐ出るものではないけれど、漁業者が山に木を植えるということの意義を伝えたいのです」 “清流の女王”とも呼ばれるアユは、長良川の豊かさの象徴でもあります。その『清流長良川の鮎』は、2015年に世界農業遺産に認定されました。世界農業遺産は、アユだけでなく長良川の水の美しさや生態系、水を育む源流の森、流域に住む人々の水と共に暮らす伝統文化やなりわいなどを含んで認定されています。 「長良川は手付かずの自然の中を流れているわけではなく、周りにびっしりと人の営みがある。それでもこの豊かさと清らかさを保っているという点が凄いです。つまり地域みんなが川を大切にしてきたということであり、そういう地域で川に携わる仕事をずっと続けてこられたことは本当に有り難い。私は幸い、戦前から伝わる郡上釣りの技術を受け継ぐことができました。この技術は勿論ですが、それだけではなく、川を大切にすることや生き方そのものを後世に伝え、若い世代を育てていかなければと強く思います」 緑の山々や清冽な川の流れ、そして青い海。その“ひとつならぬ自然”への深い感謝と恩返し。この愛を原動力に、白滝さんの「川づくり・人づくり」は続きます。 ★ 編集後記 ★ 実はこんな人！ 釣り上手であることが男のステイタスの一つとされる郡上市。中学や高校でも釣りが上手いほどモテるんだそうで、白滝さんも「かなりモテました(笑)」。大学時代も夏休みは帰省して毎日アユ釣りにいそしみ、「大学4年間の生活費は自分で釣ったアユを売って稼ぎました」とのこと。釣り名人、若い頃から恐るべし...！ 自分を海の生き物に例えると？ 「生き様としてアユに憧れます。アユは1年しか生きない魚で、卵を産むと子の育つ姿を見ることなく死ぬ。夏に死に物狂いで縄張り争いをして必死で川底の苔を食べ、大きく育て、子孫を残したら潔く姿を消すんです。武士道にも通じる散り際の潔さ。アユのように生きたいって思いますね」 花は桜木、人は武士。川魚はアユなのか...。かっこいい！



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3-(2) 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	12
投稿日	2021/3/10
都道府県	愛知県
記事タイトル	海は、始まり。いろんな世界の入り口
活動内容	ディープな魚の魅力の伝道師
熱源人材名	神谷 友成
記事本文	魚を食べたいって思わせたい！耳石ワールドへようこそ 中部圏の食卓を支える名古屋市中心部卸売市場で、セリ人として年間200種類を超す魚介類の集荷販売を30年間。続く12年間は消費者向けの販売促進部で魚食普及のための情報発信に邁進。そんな経歴を持つ神谷さんは、『魚を買うプロ』であり『売るプロ』、そして『魚の魅力を伝えるプロ』です。 「おさかなマイスター」の第1期生です。日本魚類学会の先生などが講師で、旬や栄養、産地や漁法、調理や扱い方などの幅広い知識に加え、食品衛生から水産物流通、マーケティングまで様々なことを勉強させていただきました。いろんな分野の『魚のプロ』と繋がって仲間が増えたことは、魚食普及の活動をしていく上で、今でも貴重な財産です」 2012年には、官民で水産物の消費拡大を推進する「魚の国のしあわせプロジェクト」の一環で、水産庁長官から「お魚かたりべ」にも任命されています。豊富な経験に加えて話術も巧みな神谷さんは、食育イベントや、愛知県や名古屋市の食育推進ボランティアに参加したり、新聞やテレビなどのメディアで発信したりすることを通じて、子どもから大人まで幅広い生活者に魚の魅力を伝えてきました。「知識を伝えることも大事だけどそれだけじゃ足りない。いかに魚に興味を持ってもらい、実際に食べたいなと思ってもらえるか。その手法についてはすごく考えてきましたね。『美味しく食べて、楽しく学ぶ』これが大事なんです！」 そう熱く語る神谷さんが今注目しているのは、耳石(じせき)。 耳石とは、魚の頭蓋骨の中にある炭酸カルシウムでできた石のことです。大学などでは魚の生態研究に使われていて、耳石を分析することで、魚が移動した記録や年齢、成長の具合を明らかにすることができます。 「耳石を魚食普及に使ったのは私が初めてじゃないかな？ 魚を美味しく食べた後に楽しく耳石を取り出してコレクションしよう！と、『耳石ハンターのすすめ』を提唱しています。自分が食べた魚から自分で取り出すというのがルール。ゲームみたいにならなくて子どもたちが増えています。食べながら集めるというのがポイントで、耳石をフックに、魚を食べたいという気持ちを引き出しているわけですね」 神谷さんのルールでは、耳石集めは親子ペアで遊ぶゲームで、親御さんは耳石ハンターのサポーター。例えば子どもが「アジの耳石が欲しいから食べたい！」と言った場合に親御さんはアジを買ってきて調理し、子どもと一緒に食べて耳石を探すという具合。 「耳石を集めるようになって子どもと接する時間が増えた、と親御さんに感謝されることも多いです。あの県のあの魚の耳石が欲しい、という動機で家族旅行に行く人もいます。なんて楽しいスタディツアーなんでしょう(笑)。YouTubeで耳石を取り出す動画も公開しているのでも、大人も含めて多くの人に見ていただけたら嬉しいな。ちなみに初心者には、煮干し(マアジやカタクチイワシ)がおすすめです。何の道具も使わず、手で耳石を取り出せますよ」 海や魚に興味を抱くきっかけは人それぞれですが、特に子どもたちには、耳石集めは魚を食べたいと思わせる仕掛けとして抜群の効果があるよう。神谷さんは、「さばける塾in愛知」の講師を2018年から務め、参加した親子が魚を捌いて料理し、美味しく味わった後に耳石を取りだすところまでを指導しています。 「耳石採集に慣れた子たちだと、『鮭はギロチンカットよりザビエルカットがいいよね！』なんて言ったりするんですよ。魚の頭をどうカットするかの話ですけど(笑)これに分かるってことは、魚の体の構造が分かっているということなんです。素晴らしい学びでしょ。耳石をきっかけに海の生き物や環境にまで興味を広げる子もいて、そういう子たちに『海、これからどうしたらいいと思う？』と聞けば、みんな当事者として考えてくれるはずなんです。食育から環境教育にもつながっていきますね」 型にはまらないスタイルで、美味しい・楽しいをモットーに魚食普及を進める神谷さんは、本人もとても楽しそう。いつか、全国規模で耳石ハンターが集まるイベントをやりたいと目論んでいます。 「全国各地の子どもが、それぞれの地域の魚の耳石コレクションを持って集まる。100万年前の貝塚から出てきた耳石を持っている地質学者も、化石から出てきた耳石を持っている考古学者も集まって、子どもたちと一緒に耳石を語る。それって絶対面白いでしょ！ある意味、みんなが魚の語り部だね」 “魚食の伝道師”が手招きする耳石の世界。この小さな石を入りにディープな海の魅力にハマっていく、未来の伝道師がどんどん増えていきますように！ ★ 編集後記 ★ 実はこんな人！ 「お魚かたりべ」の名に違わず、語り出したら魚ネタが尽きない魚博士。幼少期からの魚エリート(?)かと思いきや、魚とのご縁は名古屋にUターンしてからだとか。 「就職して猛勉強する前は魚なんて全然興味なかったから、魚を知らない人の気持ちがよく分かるんですよ」とのこと。なるほど、一般の生活者の気持ちに寄り添えるのはそういうわけでしたか。 自分を海の生き物に例えると？ 「深海魚。いろんな圧力に耐えながら、深い暗い海の底にいます。骨が柔軟で、形が面白くて、美味しいやつも多いですよ〜」独特の存在感とクセの強さで周りをザワつかせる感じ？神谷さんの魅力はとにかく「ディープ」ということですね！



事業ID:2019525277

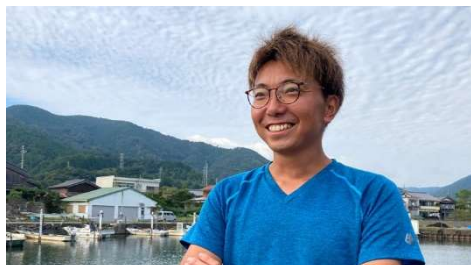
事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3-(2) 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	13
投稿日	2021/3/15
都道府県	滋賀県
記事タイトル	湖(うみ)は、わくわくのかたまり！
活動内容	琵琶湖の恵みを届ける漁師
熱源人材名	中村 清作
記事本文	「淡水魚の実力見せたる！」獲って、伝えて、未来へ繋ぐ 海がない滋賀県において、県民にとって「うみ」のような存在。それは琵琶湖です。湖のほとりで育ち、幼い頃から新鮮な湖魚を食べ、まるで家の裏庭のように湖に親しんできた中村さんは、湖魚を扱う漁師。 琵琶湖漁業を牽引する若手の一人で、主にさしあみ漁でフナやアユ、ビワマスなどを獲っています。 「実は最初は仕方なく漁師になりました。でも、いざ漁師と決めたら一生懸命。しばらくは苦労しましたが、27歳くらいかな、ニゴロブナの網入れ(=魚の通り道に網を仕掛けること)を自分で出来るようになってから俄然楽しくなりました。僕は何事も『楽しい』が動力源なんで、やる気もぐっと上がりましたね」 漁師の醍醐味に目覚めてからは、技術もめきめきと上達。ところが、湖魚を獲る漁師ゆえの悩みにぶち当たります。 ビワマスやニゴロブナなどの湖魚はとてもデリケートで、漁獲後に鮮度が落ちるスピードが早いので、締め方やタイミングなど多くのことに気を遣わないと本当に美味しく食べることができません。滋賀県内や京都など一部の地域にしか湖魚を食べる文化が無いのはそのため。海の魚に比べると、美味しく食べられる機会に限られ、その真の実力を知る人が少ないのです。 「よく、淡水魚は臭いって言う人がいるでしょう。でも琵琶湖の魚だって、時期や獲る場所に気をつければ、泥抜きしなくても刺身で食べられるんですよ。僕は湖魚の美味しさを知っているだけに、それが伝わっていないこと、誤解されていることがもうず～っと悔しくて...。だったら僕がその魅力を伝えよう！と考えたんです」 日々漁業に勤しむ傍ら、その魚をより多くの人に食べてもらうため、湖魚食の普及に乗り出した中村さん。 「漁師と一緒に琵琶湖の恵みを食べようプロジェクト」として、子どもや保護者、学校給食に携わる栄養士などに対して琵琶湖の魚の捌き方や美味しい食べ方を教える出前授業を行ったり、消費者と直接繋がるために湖魚のオンラインショップを展開したり、はたまた県内外で「琵琶湖の魚を食べる会」を開催したりと、湖魚PRのためさまざまな活動をしてきました。 さらに、魚の味と鮮度を保つのに最適な締め方とされる「神経締め」を練習して習得するなど、琵琶湖の魚の価値を正しく伝えるためのあらゆる努力を重ねてきました。 その極めつけは、2016年に東京で行われた「第4回Fish-1グランプリ」への出場です。 中村さんは、魚屋の社長や料理人など職種を超えて仲間を巻き込み、滋賀県漁業協同組合連合青年会として「天然ビワマスの親子丼」を出品。ビワマスはサケ科の琵琶湖固有種で、旬の夏にはトロのような上質な脂が乗り濃厚な旨みを持ちます。その刺身と醤油漬けの腹子を組み合わせた琵琶湖ならではの親子丼が、「プライドフィッシュ料理コンテスト」の部門で、全国から応募された数々の海の魚をしのいで見事グランプリを獲得しました。 琵琶湖は、生態系を保つために「深呼吸している」と言われます。それは、酸素を多く含む表層の水が下層の水と混ざり合う「全層循環」のこと。全層循環とは、冬場の気温の冷え込みによって酸素を多く含む表層の水が冷えて重くなり、下層の温かい水が上がってきて混ざり合う現象のことで、それによって湖底に酸素が供給されるため、水産資源の維持に無くてはならない自然のサイクルです。 ところがこの“深呼吸”が、温暖化の影響で一昨年(2019年)頃からうまく起こらなくなりました。 「水が入れ替わらないことで底の方の酸素濃度が下がってしまい、まずエビやプランクトンがダメージを受けました。その影響がどんどん上のほうにも広がってきて、最近では漁をしていても魚の減少を実感します」 幸い2021年2月、琵琶湖の全層循環が3年ぶりに確認されたことと滋賀県知事が定例会見で発表し、関係者はホッと胸をなで下ろしたところ。しかし、温暖化が及ぼす悪影響は依然としてあります。 中村さんは、水産資源の枯渇についての危機感から、特定の魚種の乱獲につながらないように未利用魚の価値を上げる取り組みも行っています。例えば、滋賀の方言で「マジカ」と呼ばれる淡水魚、ニゴイ。2019年、地元のココ壱番屋(カレーのチェーン店)と協力して、ニゴイを使った「マジカフライカレー」を誕生させて県内4店舗限定で販売したこともありました。 「琵琶湖は海の縮図だし、当然海とも繋がっている。僕たちが琵琶湖や湖魚を大切にすることは、未来の海を守ることです。これから、資源の維持に配慮しながら漁業を営む一方で、湖魚食を広め、同時に環境意識を高めるための発信もしていきたい。新型コロナの問題が落ち着いたら、湖岸清掃と魚のふるまいをセットにしたイベントを開催します。」 滋賀の宝、日本の宝、琵琶湖。その生態系や食文化、そして漁師という幸せな生業を未来へ繋いでいくことが中村さんの夢であり、心に描くビジョンは「ひ孫が仲間と肩を組んでバリバリ漁業をやっている漁場」。 「今を生きるのに必死だけど、ずっと先のことで考えられぬことを敷きたい。日本中に美味しい魚介類がありますが、僕たちの琵琶湖の魚だってめっちゃウマイって呼びながら、ファンを増やし、後継者も増やし、引き継いでいきたいです」 『楽しく・熱く』がモットーの若き漁師の心意気が、琵琶湖の恵みを多くの人へ、そして次世代へもしっかりと届けます！ ★ 編集後記 ★ 実はこんな人！ 人との繋がりを大切にしている中村さん。「みんな助け合わんといかん」との想いから、道の駅マキノ追坂峠(おっさかとうげ)でチャリティお魚販売会を開催し(2021年3月6日)、売上の一部を水色の羽根募金(=漁船海難遭児育英資金)に寄付しました。この時期だけの琵琶湖の小アユを格安で販売したほか、全国各地の仲間の漁師から、ホタテ(北海道)やホヤ(宮城)、カキ(香川)などさまざまな海産物が協賛として送られてきたそうです。まさに、中村さんの人間力の成せる技！自分を海の生き物に例えると？ 「ハス。コイ科の魚類では珍しい肉食魚で、特徴は、泳ぐ距離、遊泳力に長けること。鱗ギラギラ、産卵期はさらに強いカラー。自己主張が強いところが自分っぽい。僕、「国内外来種」と呼ばれることもありますし(笑)」 アグレッシブで行動力があり、際立つ存在感を放つ。世のため人のためになる類の“出る杭”ですね！



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3-(2) 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	14
投稿日	2021/2/22
都道府県	大阪府
記事タイトル	海は、生き物の住む宝箱や！
活動内容	大阪湾の見守り役
熱源人材名	鍋島 靖信
記事本文	昔も今も魚の宝庫！大阪湾の現状を分かってほしい 「子どもがよく『大阪湾で魚なんて獲れんの～？』って質問してくるんですよ。でも、大きな誤解やで！って返します。特に友ヶ島水道（和歌山県との県境）あたりは生き物の多様性もあるし、栄養分も豊富。大阪湾は漁獲量は瀬戸内海でトップクラスなんやで！って」 そう言って笑う鍋島さんは、大阪湾の環境や生物を調査・研究して45年。“魚庭（なにな）の海”という呼び名もある大阪湾の、水産資源のポテンシャルも温暖化の現状も知り尽くす人です。 大阪湾は瀬戸内海の玄関口にあたり、明石海峡や紀淡海峡（＝友ヶ島水道）からの潮流と、淀川や大和川など多くの河川が流入することで魚介類のエサとなる生物が豊富です。そのため良い漁場となり沿岸漁業が盛んで、魚種はイワシ類を中心にアジ、カレイ類、アナゴ、スズキ、タコ、エビ類、カニ類、イカナゴなど実に多種多様。ワカメなどの養殖も営まれています。 高度成長期（1950年代前半～70年代前半）には、沿岸部の開発による埋め立てや公害による水質汚濁が進んで漁業にも大きな影響が出ました。しかしその後、官民が協力して法制度や漁場の整備など様々な施策を講じ、今では大阪湾の環境改善はかなり進み、豊かさを取り戻しています。 鍋島さんは、父親の影響で幼少期に釣りを始めたことがきっかけで生き物が好きになり、大学では水産学部で魚類増殖と海藻を専門に研究。22歳で水産試験場（当時）の研究員になってからは、大阪湾の環境を生物から見る生物モニタリング（定期的な調査と監視）や、関西空港建設が環境に与える影響のモニタリング、大阪湾の底生生物分布と魚類の食性研究などの調査を行ってきました。ノリやワカメの養殖指導で漁業者と関わることも多く、例えば乱獲や海水温の上昇などが原因で漁獲量が急激に減少したイカナゴについては、漁師が使う魚網の網目を大きくすることで稚魚を逃す工夫をするなど、漁業者と連携した資源管理にも取り組んでいます。 「いろんなことをやってきたけど、最近の温暖化による大阪湾の変化はとて興味深い。南方生物が出現したり、イカナゴやマアナゴなどの冷水性魚類の漁獲量が減ったり、無視できない変化が起こっています。例えば熱帯性外来種のミドリイガイは、本来3cmくらいで、昔は冬の海水温の低さで凍え死んでいたはずなのに、最近では冬を越すようになったばかりか12～13cmまで大きくなる。さらに生息場所も岩の下に変わってきた。なぜかという、南方系のナルビエイが増えてきて貝を食べまくってるから。ミドリイガイはエイから逃れるために岩の下に隠れるようになったんですよ。温暖化は確実に、海の中の世界を変えている」 研究員時代に外部からの問い合わせ対応を担当していたこともあり、圧倒的な知識と経験に基づくユーモラスかつ分かりやすい説明が得意な鍋島さんは、テレビやラジオ、新聞や雑誌などでも積極的に発信してきました。 また、現在会長を務める大阪市立自然史博物館友の会には研究員になった当初から評議員として関わり、今でも会員らの磯観察会や勉強会で講師をしたり、自ら立ち上げた「大阪湾海岸生物研究会」のメンバーらと沿岸調査や他地域への合宿をしたりしています。 「海を守る仲間を増やすには、一緒に楽しく調査をするのが一番いいね。地元の海岸を観察しながら歩いて、地域の自然について現状や特色を知ることから、生物や環境への関心が深まります。そういうフィールドワークを続けてきた成果として、子どもから高齢者まで、環境保全活動に参加する人が増えたなあって実感してます」 2005年設立の「大阪湾見守りネット」も、今は鍋島さんが世話人です。この見守りネットには大阪湾沿岸で環境保全活動を行うほとんどの団体が参加しており、団体単独では行えなかった広範囲の調査も複数の団体が協力し合うことで可能になりました。 「調査に加わった多くの団体が一堂に集まって話し合い、発表できるようになったことに大きな意義があります。大阪府・兵庫県の垣根を越えて交流する『大阪湾フォーラム』を2005年から毎年開催していて、もう16回やりました。メンバー同士の連携が進んで、発信力も影響力も増えていると思います」 同志の増加を喜ぶ一方で、大阪湾が「埋め立てによって自然度が日本で最も低い海岸線になってしまった」ことを残念がる鍋島さん。環境に配慮が無い開発によって作り出された沿岸の地形や構造が原因で、海水が停滞して水質が悪化したり、生物の生存に悪影響が出ていることが調査によって分かっています。 「以前、僕は反対したのに止められなかった開発があり、それが引き金で漁業にも影響が出ました。あんなことは二度とやってはいけません。そのために僕が言いたいのは、もっと多くの人たちに『大阪湾が今どうなっているのかを分かってほしい』ということです。誰かが金儲けのために環境を壊そうとした時、海の現状をよく知ってる人がいっぱいいれば、反対の意見を大きな声であげることができる。『みんなで見守る』とは、そういうことや！」 温暖化も、乱暴な開発による環境破壊も、防ごうとするアクションの源は、一人ひとりの小さな関心。まず、遊びでいいから海を見に行くこと。何度でも行くこと。そして何かに気づいたらしめたもの。「なにこれ？なぜ？」という関心から、知りたい気持ちになり、知識に、そして環境を守りたいという行動に繋がっていくはずー。 それが、鍋島さんの教えです。 ★ 編集後記 ★ 実はこんな人！ 海藻に詳しい鍋島さんは食べるのも大好きで、メカブを細かく刻んで干してカラカラにしたものを観察会のおやつに持っていくのが定番。「塩加減がちょうど良くて、美味しいんですわ～」と自画自賛のおしゃぶり昆布でトークも絶好調。そんな観察会、絶対楽しい！ 自分を海の生き物に例えると？ 「ワカメ。波が来ればそよいで、やわらかいけど真ん中に芯があるところが好きやね」 しなやかに、でもブレず流されず。弾力性のある力強さというイメージでしょうか。ワカメのような生き方、いいかも…



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3-(2) 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	15
投稿日	2021/1/7
都道府県	兵庫県
記事タイトル	海は、エンタテインメントの源！
活動内容	奇跡の「海の映画館」を叶えた男
熱源人材名	大継 康高
記事本文	映画祭×地元民のパワーで島を元気に、海を綺麗に！ 「淡路島の海にスクリーンを浮かべて、映画を上映したいー」 そんな想いを温めながら、京都で映像制作の仕事をしていた大継さん。制作会社勤務を経て2011年に独立し、その翌年、30歳で「海空」を設立しました。 「勤めていた会社がすごく忙しくて、僕はもっとのんびりじっくり働きたいと思って独立しました。昔はごくたまにしか淡路島に帰れなかったけれど、地元の海を見ると心底ホッとする。自分にとって海は、疲れた心を癒してくれる大切な場所でした。その砂浜でくつろいでいる時にふと、ここで映画を観れたら最高だなあと思いついたんです。いつか“海の映画館”をやってみたいな」と 起業して4年目の2015年春、その無謀とも思える企画の実現に向けて、大継さんは本格的に動き出します。 「その頃、映像制作の仕事が少なくなって会社としてはピンチでした。でも逆に、今こそ昔からやりたかったことに挑戦するチャンスだと思ったんです。会社を立ち上げた時の『自分らしく新しいことをやろう』という初心にかえて、夢を叶えたいという想いに素直に行動しました。淡路島に通って協力者を探し始めると、意外なほど多くの人に応援してくれて、地元の島民のポジティブな気質を感じました」 そして、淡路島を舞台にした映画の製作と映画祭の開催を目的に、「海の映画館をつくろうプロジェクト」を発足。最大の難関だった、スクリーンをどうやって海上に立てるかという問題は、クレーン会社の社長をしている地元の先輩にお願いして巨大クレーンで吊り上げるという方法で解決しました。 そのほか多数の地元民の賛同と協力のもと、海上のスクリーンに映す前代未聞の映画上映、しかも淡路島にちなんだ映画や海が舞台となった映画を、砂浜でくつろぎながら波音や潮の香りに包まれて楽しむという「うみぞら映画祭」が、現実のものとなりました。 会場は、白砂青松が美しい遠浅の海水浴場、大浜海岸です。 第1回は2016年9月で、この映画祭のためにオール淡路島ロケで製作された映画「あつたまら銭湯」(淡路島出身俳優の笹野高史さんらが出演)も上映され、3日間で約3000人を動員しました。翌年からは台風シーズンを避けて5月開催となり、屋台やマーケットエリアを設置するなどイベント内容が年々充実。2019年の第4回にはスクリーンもクレーンも大きく(440インチのスクリーンを50tクレーン2台で吊り上げた！)2日間で約6000人を動員。 また2019年は「ひょうご瀬戸内ごみゼロ青年団」の活動として、映画祭開催と同時にビーチクリーンも行いました。 「映画上映前にみんなで海岸のごみ拾いをしたら、撤収時にごみがほとんど無いほどの効果があって驚きました！来場者の皆さんには、映画祭に来て楽しかったな～だけじゃなくて、海を綺麗にしなきゃいけないなって感じてもらいたい。結果的に、より気持ちの良い空間で映画を楽しめるということに繋がっていきますね」 観光業者をはじめ多くの地元企業の協賛を得ることができ、大勢の共感を集めたことで、大継さんの意識にも変化がありました。 「やりたからやるという動機に加えて、『淡路島のために』『地元の海のために』という使命感が芽生えました。あと、僕が無謀な挑戦に楽しそうに取り組んでいる姿を見て、地域の若者たちの中に何か新しいことにチャレンジする気風が生まれたようです。淡路島でも面白いことができるんだぞって示せたんだとしたら、とても嬉しいですね。うみぞら映画祭まだまだ続けなきゃ！って思います」 島の人たちと一緒に作り上げる、地元愛と海への愛をともに育てる特別な映画祭。2020年は新型コロナウイルス対策のため中止でしたが、2021年5月の開催に向けて着々と準備を進めています。 「これからも、映画を通して淡路島の魅力や海のある景色の素晴らしさを再認識してもらえるようなイベントであり続けたい。うみぞら映画祭に興味を持ってもらい、そこから淡路島の海に興味を持ってもらうことで、若い世代を中心に海を守っていくアクションを起こせばいいですね。ビーチクリーン活動を大浜海岸だけではなく島内の他の海や島外にも広げたり、市町村をはじめ様々な団体と連携して広げて深い活動を、熱意をもってやっていきたいです」 ★ 編集後記 ★ 実はこんな人！ 2020年はやむなくオンライン開催でしたが、映画出演者のトークショーを配信するなど新しい試みも。「ネットやSNSをもっと活用して知名度を上げていきたいので、今年は生配信のノウハウを勉強できて良かった。海で楽しむエンタメとして、全国規模に育てていきたいな～」とあくまで前向き、夢は尽きない模様です。 自分を海の生き物に例えると？ 「ジンベエザメ。のんびりと自分の思うように動いていると、気づいたら一緒に誰かが泳いでいる。同じ方向を見ている人がいつの間にか周りにいっぱいいる。幸せですよ、そういうの」 たった一人の挑戦から、大継さんを応援する淡路島の仲間たちみんなの挑戦へと変わっていった、うみぞら映画祭実現へのプロセスと同じですね。ドラマチック！



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3-(2) 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	16
投稿日	2021/1/12
都道府県	和歌山県
記事タイトル	海は、わくわくするところ。
活動内容	海にときめくヨットマン
熱源人材名	中村 和哉
記事本文	どこにも負けない和歌浦を“ヨットの聖地”へ！ 絶景の宝庫として日本遺産にも指定されている和歌浦。その風光明媚な和歌浦湾に浮かぶリゾート島「和歌山マリーナシティ」の一角に、中村さんが活動拠点とする和歌山セーリングセンターがあります。 和歌山セーリングセンターは、2008年5月にセーリング競技のナショナルトレーニングセンター（競技者の強化・育成拠点）として文部科学省から指定された施設で、レガッタ（ヨットレース）や強化合宿の開催、ナショナルチームやその候補選手の練習などに活用されている、日本のセーリング拠点です。 中村さんはここで、ジュニアから熟年まで幅広い世代のヨット選手のサポートや、海の楽しさを伝えるヨット体験イベント、海での安全への備えや環境保全についての啓発活動を行っています。 「和歌浦の環境はヨット乗りには最高です。波が穏やかで安全度が高く、水深がそれほど深くないのでアンカーを落とすのに便利。山と緑に囲まれた美しい湾なので気持ち良く、そして何より風がいい。陸に向かって一年じゅう西風や南風が吹いているのでセーリングにとっても適しています。こんな恵まれた海で練習できて幸せだよって、いつも選手たちに言ってます」 20歳くらいの頃にたまたま誘われてヨットに乗り、一気に魅了されたという中村さん。競技選手にはならなかったものの、ヨット歴は40年になります。その魅力を聞いてみると... 「風の力だけで進むのでエンジン音が無い。すなわち波と風の音だけの世界に入っていける、これが他には無い心地良さです。そして、風の流れて感じて自分の手で操作して走る爽快感はストレス解消にもなります。あとは、海から得られるインスピレーションというか...海は二度と同じ状況にはならず、見える景色も体感温度も刻一刻と変わり続けるでしょ。だからいつも何か新しい発見があるんですよ。『今年のような夏はもう無い』と思うと、愛おしさすら感じます」 ヨットを始めたことで海ごみを目の当たりにし、環境意識も芽生えました。今では子どもの体験や授業で海ごみ問題への啓発を欠かさず、イベント時にはペットボトルの使用を減らすためにオリジナルボトルを作るなど、ごみ削減へのアクションを行なっています。 和歌山セーリングセンターは、トップ選手だけではなく子どもたちがヨットに触れる場所としても重要な存在です。安全性が高く乗りやすい小型ヨットの体験会や、県の教育委員会とセーリング連盟が連携して実施している小・中学校を対象としたヨット授業は子どもたちの評判も上々だとか。 「ヨット授業は年間20校、600人ほどが参加してくれて、ヨットの操縦だけでなく海ごみのことや、落ちた時に浮いて助かる方法なども教えています。みんなすごく楽しんで、いろんなことを学んでくれるのでこちらも嬉しい。和歌山の子はみんなヨットに乗れますよ！って言えたらいいな、と思いながら取り組んでいます」 和歌浦は、全国高校総体・インターハイのヨット競技の会場でもあり、全国持ち回りで開催されるインターハイ競技の中で、ヨット競技は和歌浦での固定開催となっています。 「つまり“ヨットの甲子園”なんですよここは(笑)。幸いマリンリゾートにあるわけですから、もっと人が来てヨットハーバーも活性化してほしい。海の美しさを守りながら上手に活用することもまちづくりには必要だと思います。海から陸を見ることで、改めて自分たちの街の美しさに気付けますね。どこにも負けない和歌浦の海と、自然と一体になれるセーリングの楽しさを多くの人に知ってもらって、ここを“ヨットの聖地”に近づけていきたいですね」 ★ 編集後記 ★ 実はこんな人！ 本業は別にあり「ヨットはただ好きという気持ちだけでやってる」と言うだけあって、ヨットの魅力を語り出したらノンストップ。「わくわくしながら帆走してます。子どもたちと海に出ればいつもわくわくします」ととにかく海ではわくわくが止まらない様子。中村さんの情熱と若々しさの源はコレですね～ 自分を海の生き物に例えると？ 「イルカ。自由に気持ちよく、風と共に泳いでいる」 なるほど、風をとらえて軽やかに海を走っている中村さんのイメージと重なります！



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3-(2) 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	17
投稿日	2021/2/12
都道府県	鳥取県
記事タイトル	海は、多様性と循環
活動内容	海・山・人の仲介人
熱源人材名	大原 徹
記事本文	自然と上手に関わることで、人も地域もハッピーに 中国地方の最高峰、大山。国立公園である大山の麓には、すぐ日本海が広がります。そこには全国有数のサーフポイントが点在し、山と海、自然の横で遊ぶには絶好のエリアです。 中でも鳥取県西部の米子市にある皆生(かいけ)海岸は、山陰を代表する温泉郷・皆生温泉もある人気スポット。ネイチャーガイドの大原さんはこの皆生を拠点に、マリンスポーツや冬の雪山体験などを通じて、自然の尊さと地域の魅力を伝えています。 高校生の時にサーフィンを始め、地元である米子の海の環境の良さを実感したという大原さん。その後は山遊びもするようになり、海も山もひっくるめた大山エリアの豊かな自然にどっぷりと魅了されていきました。 サーフショップの店長をしていた時期もありましたが、「モノを売るよりもお金で買えない自然体験を提供したい」と、ネイチャーガイドに転身。「鳥取西部の隠された魅力」を伝えたいという想いを「HIDDEN WEST」という店名に込め、小学生から高齢者まで、様々な遊び方で自然を堪能してもらうサービスをしています。 例えばSUP(サップ)。近年人気上昇中し、水上スポーツの新定番とも言われるSUPは「Stand Up Paddleboard(スタンドアップパドルボード)」の略称です。その名の通り、ボードの上に立ってパドルを漕いで水面を進むアクティビティで、安定感のある専用ボードを使うことで初心者でも簡単に立つことができます。 「SUPの魅力は、自由度の高さ。サーフィンは波がないと出来ないけれど、SUPならヨガしたり釣りしたり、なんなら寝ててもOKだし、海拔ゼロの景色を楽しんでるだけでもいい。一方で洞窟探検や冒険的なこともでき、遊びの幅が広いですね。シーカヤックと比べると、海底の見え方が違います。カヤックは座っているんで光が乱反射し海底が見えづらいのに対し、SUPは海底も魚もよく見えるんです」さらに自然体験の価値を高めるにはコツがある、という大原さん。その秘訣とは...? 「それはですね、『失敗』です。SUP体験に来てくれた人には、必ず、一度、海に落ちてもらうんですよ(笑)。落ちてもOK、むしろ落ちることによって何かを発見できてクリエイティブ性が高まる。失敗を恐れない気持ちを自然体験の中で養えます。もちろん海は危ない一面もあるのでそこは押さえて、自然への畏怖を持ちつつ安心して抱かれる感じかな。普遍的な自然と人間との関わりを伝えるツールとしてSUPは優秀だと思ってます」 子どもを対象とした自然体験で海の楽しさや強さをレクチャーする機会も多くあります。特に2020年は、新型コロナウイルスの影響で修学旅行の代わりに、近場の皆生海岸を訪れる団体が相次ぎました。大原さんはマリンスポーツやサイクリング等のアクティビティだけではなく、鳥取の歴史や文化、地形の成り立ちなどもしっかりと伝えました。 「訪れた人たちに地域の素敵さを感じてもらおうと並行して、環境を守る活動も続けています。海に関わる皆さんの協力で定期的なビーチクリーンを開催し、地元住民のサーファーに対する理解が深まったり、コミュニケーションも取りやすくなりました。そのおかげで皆生のアクティビティが多様化して、地域の魅力として還元できている。ネイチャーガイドとして、いかにお金以外の喜びを提供できるか、来た人も地元もみんな楽しく豊かになるにはどうしたらいいかを模索しています」 マーケティングの視点で見ると、世の中はかつてのモノ消費からコト消費へ、そして今はヒト消費の時代と言われていています。つまりこれからの観光は、客を迎える一人ひとりの知識や知恵、経験値がそのまま観光コンテンツになるということです。 「だからこそ、お客さんとプレイヤー(=体験を提供したい人)とのマッチングが大事です。そういう意味で、幸せなマッチングを実現するプラットフォームを作りたい。海や山を愛する人は山陰にたくさんいて、それぞれの得意分野や年齢に即して多様な自然体験を提供することができる。そういう人たちが登録できるプラットフォームを作れば、すごく多様な体験コンテンツを観光商品として用意できるので、お客さんのニーズにきめ細かく応えられますよね。地域の人材を活かし、交流人口が増えて経済が潤う。海や山と触れ合う人が増えることで多くの人が自然を大切にできるようになる。この仕組みがうまく回ったら最高ですね!」 2020年、皆生温泉は温泉地として開発されてから100周年を迎え、様々な記念事業が企画されていました。その一環として鳥取初のSUPの大会も予定されていましたが、新型コロナウイルスの影響でやむなく中止し次年度に延期。100周年記念の「皆生マリンスポーツフェスティバル」や「神話の風土SUPフェスティバル」の事務局長を務める大原さんは、逆境の今こそ新しいコンテンツ(観光の選択肢)を増やしたり、横の連携を強めたりするチャンス!とばかりに、2021年夏の開催に向けて動き始めています。 「自然を守りながらスポーツツーリズムを進めていくには、地元の人どうしの繋がりが欠かせません。海も山も、そして人もみんな繋がっていますし、これからの世界のキーワードは『多様性と調和』だと思います。僕の描く理想は、ハンディキャップやLGBT関係なくすべてのジャンルの世界中の人に、何らかの形で鳥取の自然や歴史を体験してもらえるようになること。遠い道のりかもしれないけど出来ることから取り組みます。海岸のシャワー増設やバリアフリー化も必須ですし、まずは一人でも多くの方に海で喜びを感じて欲しい!」 ネイチャーガイドとして山陰の魅力を発信しつつ、変わりゆく社会の先にある“調和”を目指す。 穏やかな笑顔の裏に、熱くてブレない魂を見ました! ★ 編集後記 ★ 実はこんな人! 山も大好きな大原さん。冬の大山の楽しみ方の一つとして、雪上でサーフィンできる(!?)遊び道具も作りました。 「雪板という新しいスノーアクティビティで、足が固定されないのが特徴。体験ツアーも始めてますのでぜひ!」 自然と戯れるための創意工夫、本当にクリエイティブ! 自分を海の生き物に例えると? 「カメ。自由に緩くて平和な感じが好き。カメは万年と言いますし、色んなものと調和しながら長〜くじっくり生きるイメージ。自分もそうありたいですね」 ...そう言えば大原さんの風貌、仙人感が漂うような気も(笑)



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3-(2) 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	
投稿日	2020/9/16
都道府県	島根県
記事タイトル	海は、いのち。すべての“これから”を育むもの。
活動内容	“地域と繋がる学び”プロデューサー
熱源人材名	武田 祐子
記事本文	生の声、出会いのワクワクを教材に 独創的な授業が注目された名物先生は、教員を辞めた今も地域の教育魅力化を牽引するキーパーソンです。 「現場で発見する」「交流から学ぶ」をモットーに、学校から地域へ飛び出すフィールドワークや、アートや伝統芸能の専門家を招くワークショップなど、斬新な学校教育を展開してきました。世界遺産「石見銀山」を筆頭に、国指定天然記念物「琴ヶ浜」や国立公園「三瓶山」といった地域の宝、守るべき海や森を学ぶには、とにかく現場へGO。 「琴ヶ浜の鳴り砂学習では、砂が鳴るメカニズムだけでなく、古来から伝わる琴姫伝説の話を聞きます。浜を丸ごと体感して初めて、綺麗な砂が大切に守られているからこそ鳴るのだという意味と価値が腑に落ちるんです。漁師さんに協力してもらった地引き網体験も同じです。現場の体験とそこに暮らす人の生の声こそが、子どもたちの好奇心を震わせます。そのような学びを繰り返して世界を広げていく中で、ふるさとの自然を守ろうという想いと行動が生まれていくはず」 2017年からは、海と日本プロジェクトinしまね実行委員会による夏の体験イベント「隠岐の島発見隊！離島で学ぶ海の未来」にも、教育の視点からカリキュラム作りに加わっていて、毎年、子どもたちとともに隠岐諸島へ渡っています。 「ダイナミックな地形、貴重な生態系を目の当たりにしました。参加した子どもからは、新鮮な魚の味に感動して、それ以後は家でも魚を食べられるようになったという報告もあり、このインパクトこそ真の気づきだと、まさにいのちを感じる体験をしたんだと思いましたね」 自ら学びつづけ、実行の人でありたいという情熱も健在です。 「海をはじめとした環境問題について、自分に何ができるかを常に考えて行動をおこす。志を持って動けば仲間ができる。そんな仲間たちと一緒に、未来の地球を守っていく子どもを育てるのが夢です。」 子どもたちを素敵な大人とたくさん出会わせてワクワクさせたいし、便乗して私も出会いたい(笑)。海に関わる仕事に従事する方々から経験に基づく生の声を聞き取ることで、海の大切さを伝える魅力的な教材を生み出せると思うんです。私もまだ進化の途中。海は、子どもはもちろん、私の可能性も広げてくれるって信じています」 ★ 編集後記 ★ 実はこんな人！ 好奇心でキラつく瞳、楽しげにビジョンを語るお姿にはライターまりえもハートをわしづかみにされました。かつての赴任先の学校では、武田先生と話したい生徒たちが順番待ちをする“行列のできる校長室”現象が頻発していた…というエピソードにも納得です。思わず聞いてしまった「若さと美しさを保つ秘訣は？」という質問には「よく笑うこと！」と答えてくれました。 あなたを海のいきものに例えると 「クラゲ！ぷかぷか浮かんで海と一体化して、透明でどんな色にも染まる。海に生かされてる感じかな」 型にはまらない柔軟さと周りとの協調。なるほど～



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3-(2) 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	18
投稿日	2020/9/16
都道府県	島根県
記事タイトル	海とは、地球環境を学ぶ場
活動内容	島に恋するネイチャーガイド
熱源人材名	深谷 治
記事本文	島の自然、感動とセットで伝えたい 島根県の隠岐地域を代表するネイチャーガイドの一人。移住して22年、自然のことなら深谷に聞け！が“島の常識”となっています。ユネスコ世界ジオパークに認定されているほど豊かな自然が残る隠岐の海は、透明度が高く、島民の自慢でもあり、暮らしを支える島の宝です。その海を未来へ繋ぐために力を注ぐのが、体験をベースにした環境教育です。 「シュノーケリングや磯の観察会、海岸清掃などを通じて、海洋環境の多様性を実感してもらいながら、海の大切さや海洋プラスチック問題にも意識を向けてもらいたいと思っています。僕にとって海はレジャーではなく、教育の場です。一見美しく見える隠岐諸島の海でさえ、実は磯焼けが進み、漂着ごみも大きな問題になっています。美しい海を守っていくためには、その素晴らしさと共に危機的な実態も伝えていかないといけないと思います」 いつか実現したいと、特に力を入れるのが、自然の中で分解されないプラスチックごみをなくすこと。まずは、社会生活の中で、再生可能な素材の活用、普及を訴え、積極的に発信しています。 「離島では人の生活と自然との距離が近いので、個人の小さなアクションが自然を破壊するし、逆に環境を守ることもある。その実感から生まれる『自分も何かしなきゃ!』という気持ち、海の問題が自分事になったときに生まれる“LOVE”。こそが環境保全活動の第一歩だと思っています。だからこそ、島の自然の大切さは感動とセットで伝えたい。しぜんむらでは今年10月からE-bikeで島のジオサイトをめぐるツアーを始めますし、来夏からは海体験で水中スクーターも導入します。楽しそうでしょ？楽しいんですよ(笑)。僕自身、隠岐の自然にどっぷり浸って遊びながら、未来の“守り人”を育てていきます」 ★ 編集後記 ★ 実はこんな人！ 実は無類のあんこ好き。趣味のハーレーで全国の美しい海をたずねて回り、各地のご当地まんじゅうを食べ尽くすのが夢だそう。環境保全に人生をかけ、海を守るために戦い続ける深谷さんの素顔は、意外とおちゃめな甘党おじさんでした。あなたを海のいきものに例えると 「群れない、常に行動、いざとなったら闘う...ということで、シャチ！」 う〜ん！頼もしい熱源です！



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3-(2) 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	19
投稿日	2021/3/15
都道府県	広島県
記事タイトル	海は、遊び友達！
活動内容	地域力を紡ぎ合わせる達人
熱源人材名	馬場田 真一
記事本文	ふるさとのマンパワーを繋いで、里海や里山を守る！ 環境と健康を守るためのコミュニティ活動を支援する。これが、環境保健協会(以下、環保協)の地域支援活動センターで活躍する馬場田さんのミッションです。 例えば、地域清掃や海岸美化などの活動に対して物的支援や人材育成の手助けをしたり、県内の事例・実績を収集してノウハウを共有したり。各団体の活動を活性化させることで、ひいては地域全体を元気にすることが究極の目標です。住民活動をサポートするという業務の流れで、いつのまにか自分のライフワークになった仕事もあります。それは「みやじま未来ミーティング」。 宮島の自然を守るために環境保全に取り組む有志が集まった任意団体の名称ですが、環保協として関わっていた馬場田さんは2007年から自ら事務局に就任。以来、年4回の体験学習と年2回の海岸美化活動を実施しています。 「以前は業務の一環でしたが今では個人的にやっています。熱意ある仲間たちと共に海岸美化を継続してきたことで、トヨタ自動車や、広島に工場があるカルビー、宮島競艇、母校である修道大学など、さまざまな企業や団体と一緒に活動することができ、それらの企業から協賛をいただけるようにもなりました。ただ、僕は海岸清掃だけでは足りないと思っていて、海が好きな人を育てるところにもっと注力したい。要は、海で遊ぶ時間をもっと増やしたいんです。僕がもっと遊びたいから(笑)」 自然環境や野外活動にまつわるアレコレに精通する馬場田さんは、「川や海でハードに遊ぶのが大好き！」 高校時代は山岳部でならし、広島県内の代表的な山々は完登。自然と対峙する精神力や体力、サバイバルスキルは山で学びました。「自然って楽しい」という気持ちが原点にあって、それが今の仕事につながっています。僕には人生の師匠と呼べる人がいるのですが、「遊びの師匠」でもあるんです。とんでもない荒野を開拓してコテージを建てちゃうような、ネジが1本外れた破天荒な活動家と言いますか(笑)そんな人たちとの出会いに恵まれていて、師匠たちからは自然との付き合い方だけではなく、想いがある活動の尊さや、Uターン・Iターン人材を生かす大切さなども教わりました。そんな流れで、今の仕事や働き方にたどり着いた感じですね」 さまざまな住民活動に関わりながら行政と連携した業務もっており、瀬戸内海全域の豊かな自然環境を守るために県が進めている『湾灘(わんなだ)協議会』にもメンバーとして参加しています。 湾灘協議会とは、瀬戸内海の水質や水産資源を巡るさまざまな課題に官民の多様な主体が連携して取り組むために、兵庫・岡山・広島・山口・香川の5県がそれぞれに設置している組織で、広島県では2017年、県内の海を「広島湾」「安芸灘(あきなだ)・燧灘(ひうちなだ)」「備後灘(びんごなだ)・備讃瀬戸(びさんせと)」の3つに区分して各海域で協議会を設けました。海ごみ問題をはじめ、沿岸域のみならず内陸の自治体も一体となって対策を進めていくべきテーマについて関係者の意見をまとめていく重要な場です。 「豊かな海を目指そう！」ってひとことと言っても、「豊かな海」とは誰にとってのどういうものなのか、立場によって考えが違うわけで、それを話し合うのが湾灘協議会。『このエリアでは海と人がこうありたいから、この水準を定めて守ろう』といった具体的な目標を協議して、それを目指すアクションを実行したい。そのためにはまず「豊かな海」の落としどころを皆で徹底的に話し合うことが必要です。環保協は、県内の美化活動等の実績を県と共有することで、県の取り組みに住民活動の状況を反映させることができました。議論をもっと活性化していくために、湾灘協議会には今後ますます濃く関わっていく予感がしています」 海は、ただ透明度が高ければいいというわけではありません。海の濁りには栄養という側面もあるからです。 瀬戸内海は近年、水質の改善に伴って栄養塩類が減少し、「貧栄養化」が進んでいて、養殖漁業にも影響が出ているといいます。豊かな里海を支えるのは山や川から流れ込む栄養。そこで、海の回復のために豊かな里山を作りたいこうと思い立った馬場田さんは、2017年に仲間と「ふるさと楽舎」を設立。中山間地域で課題となっている放置竹林の整備や休耕田の整備を行うほか、自然体験イベント等で交流人口を増やすなど、里山を守り、活かすための取り組みを始めています。 さらに「地域を盛り上げ、自分たちも楽しみたい！」と企画したのが地ビールづくり。ふるさと楽舎のメンバーが休耕田で作った米、ヒノヒカリを使い、広島市内の醸造会社「広島北ビール」とのコラボレーションで製造した「郷乃米麦酒(さとのこめびーる)」は、麦汁を造る工程で米を混ぜることで独特の味わいが生まれ、美味しいと評判です。 環境保全や地域の課題を自分ごと化して、楽しむ。 いつも軽快に、それでいて使命感は熱く、自己研鑽は抜きがたく。それが馬場田さんの仕事の極意です。 「僕の役目は、地域で光っている人や団体を見つけて繋ぐこと。そのためには僕自身も光ってなきゃいけない。だから勉強するし、必要なら資格も取るし、どんどん行動して経験を積む。そして本気で遊びます。そういう姿勢を貫くことで仲間をどんどん引き寄せて、地域全体でパワーアップしていきたい。山に住む人、街に住む人、海の近くに住む人、大人も子どももみんなが自然環境について考えることができ、自然を楽しむ術を知っている。そして、循環しあう里山と里海が維持されている。そんな未来を目指したいです！」 ★ 編集後記 ★ 実はこんな人！ 大学2年生の時、授業の講師として来ていた環保協の人が格好よくて憧れたのが、環保協との最初の接点だったとか。その後、縁あってバイトすることになり、そこで出会った異能の上司にまた惚れ込んで入社を熱望。「ここで働かせてください！って、“千と千尋作戦”で入り込みました(笑)」と本人談。意欲あるところに道は開ける。 自分を海の生き物に例えると？ 「生き物そのものではないけど...牡蠣筏(かきいかだ)のようになりたい！ 広島豊かな海で牡蠣を吊している牡蠣筏には、いろんな生き物が集まってくるんです。私の周りにもいろんな人たちが集まってほしいな、という願いを込めて」 自身が牡蠣筏。となると、ふるさとの恵みを吸収しながら育てゆく牡蠣は...馬場田さんがサポートをするさまざまな活動団体の皆さんの想いでしょうか。大きく育った牡蠣の水揚げが楽しみです！



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3-(2) 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	20
投稿日	2021/2/17
都道府県	山口県
記事タイトル	海はステージ。信念を態度で示す場。
活動内容	自然も人命も地域も守る！熱きライフセーバー
熱源人材名	新名 文博
記事本文	安心で美しい海をベースに、地域を活気づけたい！ 新名さんは、海水浴場の安心安全を守るライフセーバーでありつつ、海で体験型観光サービスを提供する海耕舎を運営し、その収益を地域の課題解決に活かそうというソーシャルビジネスに挑戦しています。 大学時代にヨット部で主将を務めていた新名さんは、卒業後、ボートレースの道へ。競艇選手として全国各地を転戦していました。しかし、1999年にレース中の事故で頸椎を骨折。リハビリのために地元ビーチでサーフィンを始めたら、波乗りの魅力にどっぷりハマると同時に、美しい海への愛が深まっていきました。 「ちょうど角島大橋が開通した2000年の頃です。当時の角島は、まだウエットスーツを着たサーファーが島に出入りすることを良く思わない人もいました。でも僕たちサーファーだって海を愛しているし、角島の環境を大事にしたい。それを理解してもらうために、仲間たちと海岸清掃を始めました」サーフィンを通じて角島の海に親しみながら地道な清掃活動が続けること数年。たまたま、サーファー仲間が溺れていた人を救助したことがきっかけで、新名さんたちは「海難事故防止の面で地域の役に立てる！」と思いたち、任意団体「角島サーフレスキュー」としてボランティアガードを開始しました。角島周辺の海水浴場ではそれまで毎年のように死亡事故が起きていたため、事故を未然に防ぐレスキュー隊の登場は地元大きなインパクトを与えました。 「人命救助のスキルをもっと高めようと、仲間全員でライフセーバーの資格を取ったんです。体力や泳力が求められるのはもちろん、心肺蘇生など様々な知識が必要で大変でしたが、みんなで頑張りました！それで2012年にNPO法人として立ち上げたのが、コバルトブルー下関ライフセービングクラブです」 下関市にある東亜大学で救急救命を学ぶ学生とコラボレーションするなど、積極的に活動の輪を広め、登録するライフセーバーも増えています。メディアでも取り上げられるようになり、ライフセービングクラブが守る海水浴場は利用者数が激増しました。 しかしその一方で、NPOとして続けていくには資金面でも体制面でも限界が。そこで新名さんは、競艇選手を辞め、新たに株式会社海耕舎を設立。クリアカヌーなど、海的美しさを活かしたマリンレジャーを提供する事業を始めました。 ただ、海耕舎は単なる観光業者にあらず。収益を上げつつ地域の課題解決に役立つことをミッションとしています。 例えば、近年増え過ぎて駆除対象になっているクロガサゼ(ムラサキウニの一種)。商品価値が高いアワビやサザエの餌になる海藻を食べ尽くしてしまうことで漁業に悪影響が出る上に、海水浴客の足に刺さって危ないということで海の厄介者扱いされているこのクロガサゼを駆除する方法として、観光客にレジャー感覚でウニ捕り体験してもらおうという観光プランを実施しました。この斬新なアイデアは2017年度の山口県ソーシャルビジネスコンテストで準グランプリを受賞しています。 「NPOの活動は、ライフセービングや海岸清掃のほか子どもの自然体験や環境教育など範囲が広がり、地域の魅力化のためにとでも大事だけれど、持続的であるためには、一方で事業収益を上げていくことも必要です。それが海耕舎であり、海耕舎が手がける体験型観光サービスの質と安全を担保するのがNPO(ライフセービングクラブ)。両輪でうまく回していきたいんですよね」 そんな新名さんたちに、2018年夏、待望の「拠点」ができました。それは「渚の交番 島戸」。 渚の交番とは、海にまつわる活動のための拠点施設を整備する日本財団のプロジェクトで、新名さんたちの渚の交番は全国で6番目、中国地方では初の設置でした。 「僕はここを、海難救助だけではなくて、色んな地域課題を解決していくためのハブ(中核)施設にしたいと思っています。過疎化や高齢化、空き家の増加問題にどう対処していくか。地域をなんとかしたいという想いやアイデアを持つ人が渚の交番に集まり、話し合い、連携して、活動を面的に進めていく。今は、新型コロナウイルスという時代にマッチしながら交流人口を増やすために角島でのワーケーション(働きながら休暇を取る過ごし方)を発信したらどうか、ということも話し合っています。拠点ができたことで、本当に人が繋がります」 渚の交番ができて海での活動がしやすくなったことで、地元サーファーや地元企業の中から自発的・自立的に海岸清掃などを行うボランティアチームも生まれているそうです。また、地域の情報発信を手伝いたいという大学のボランティアサークルが合宿に来るなど、若者人材のサポートも得やすくなりました。 新名さんが目指すのは、「誰も置き去りにしない、より良い世界」。SDGs(持続可能な開発目標)の考え方を踏まえて、次世代の子どもたちへ海への想いを繋ぐために、相対的貧困や何らかの事情で海に遊びに行くことができない子どもたちを海に招くなど、体験格差を解消しながら海への愛を育てていく事業を実施する予定です。 「渚の交番島戸をハブとして、年齢や職業、性別、国籍や居住場所などすべての垣根を超えて、地域の課題解決に挑んでいく、そんな強いチームでありたい。海をステージに、若い子たちが憧れるような姿もたまには見せて(笑)。後継者に引き継いでいくことも意識しながら活動をしていきたいですね」まるで新名さん自身が、タテ(あらゆる世代)、ヨコ(あらゆる職業)の人を繋ぐハブであるかのよう。コバルトブルーの海を舞台に、新しいストーリーが紡がれつつあります。 ★ 編集後記 ★ 実はこんな人！ 「無人島で朝から晩までサーフィンできるのと、1日1時間だけ友人と楽しくサーフィンできるのとどちらかの二択なら、僕は後者です」と新名さん。仲間大好き！仲間あってこそ海！なんです。 自分を海の生き物に例える？ 「イルカ！僕が波に乗っているときに真下に来てたこともある、可愛いやつ。何となくですが、僕、前世はイルカだったかもしれないなと思っています」 イルカといえば、陽気でポジティブなイメージ。ヨーロッパでは、イルカは溺れた人を救うイメージからキリストのシンボルという説もあるとか！救済の象徴だなんて、新名さん、ドンピシャですね～



事業ID:2019525277

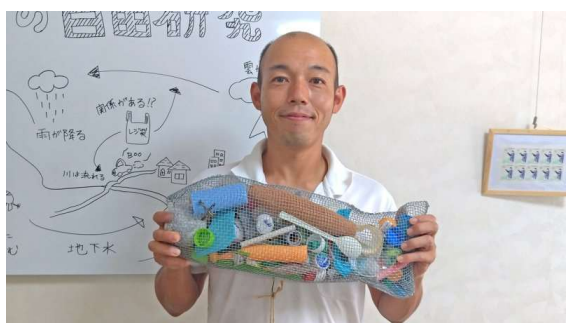
事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3-(2) 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	21
投稿日	2021/2/15
都道府県	徳島県
記事タイトル	海は、憧れ！
活動内容	流木アップサイクルの達人
熱源人材名	黒川 剛史
記事本文	漂着木材から生まれたお金を海岸清掃に回す。これぞ循環経済 鳴門と言えは渦潮。徳島県鳴門市と兵庫県南あわじ市の間にある鳴門海峡で発生する渦潮は、春と秋の大潮の時には渦の直径が最大20m、潮の速さは時速20kmにもなり、世界最大級の渦潮と言われています。 また、流れ込んだ黒潮が淡路島をぐるりと回って都市部のごみを運んでくるため、鳴門は漂着ごみが集まりやすい場所でもあります。そんな鳴門の海岸で、黒川さんはごみ拾いを続けながら、拾った流木をペンやキーホルダーとしてよみがえらせる活動をしています。2012年に兵庫県から徳島の鳴門に移住した黒川さんは、当時、鳴門市内の「MEER(メア)」に関わったのがきっかけで海岸清掃を始めました。メアとはドイツ語で海を意味し、もともとは空き店舗を活用したカフェ兼ハンドメイド雑貨店の名前です。現在鳴門市では「うずしおクリーンアップ」という大規模な海岸清掃が定期的に行われていますが、その始まりは、メアのお客さんと地域の人が一緒にやっていた月に一度のビーチクリーンだったそうです。 メアの活動として海岸清掃を始めた頃、黒川さんはひょんなことから兵庫の友人に「流木で、ペン作れる？」と相談されました。流木すなわち漂着木材は、ごみであると同時に、上手に使用えばナチュラル系インテリアの素材として人気が高いもの。友人は美容師で、店に置けるお洒落なアイテムとして流木ペンをリクエストしたのです。その要望に応じて作ったのが、黒川さんオリジナルの流木ペン第一号でした。 「確か、その友人はイマイチ喜んでくれなかったんですけど(笑)。僕は閃いたんです。海で拾った流木に付加価値をつけて高く売るのはどんなストーリーが必要か。どうしたら高い値段でも納得して買ってもらえるか。お洒落な商品に仕上げる工夫はもちろん大事ですが、さらに、その売り上げを海岸清掃の資金に回せばいいんだと。拾ったごみをお金にして、そのお金でまたごみを拾う。お金儲けじゃなくて、お金の有意義な循環！このサイクルがうまく回れば楽しいし、サステナブル(持続的)だなと」 黒川さんの流木ペンは、アップサイクル(Upcycle)。アップサイクルとは、本来であれば捨てられるはずの物に、デザインやアイデアといった新たな価値を持たせることで別の新しい製品に生まれ変わらせること。原料に戻したり分解したりして再利用するリサイクルではなく、元の形や特徴をそのまま活かしつつ別の素敵なモノに進化させる、ごみを宝物に換えるという考え方で、モノの寿命を長く引き延ばすという意味でサステナブルでもあり、近年ではファッションや家具などの分野でも注目されています。 「海ごみ問題への関わり方はいろいろですが、僕は『修理』が得意だし趣味なので(笑)、流木のアップサイクル はとてもしっくりきています。手にしていただいた方へは、なぜ流木で作るのか、何のために売ることかを説明することで、海ごみ問題により深い関心を持ってもらえています。子どもたちにも伝わりやすいですね」 流木ペンのほか魚の形のキーホルダーやストラップも開発し、最近ではイベントで流木雑貨を販売したり、海ごみ問題を解説するパネル展示をすることも。市民団体や学校、徳島県教育委員会の市民講座などで講話を行うことも増えました。 子ども向けに、宝探しに見立ててマイクロプラスチックごみの回収と講話をセットで行った時には、後日その子たちがごみの分別に関心を持つようになったそうで、「小さな規模ですが、未来の海ごみ削減に向けた活動として手応えを感じています」 2021年春、黒川さんはリユース事業にも着手します。リユースはリサイクルとは違い、繰り返し使うこと。モノを再利用して地域内でぐる循環させる「リユースショップ」として店舗を持ちつつ、鍵の開閉や電気的点灯を自動化するなどITをフル活用した省人化で、まずは一人でも運営できるような仕組みを準備中です。 「店内にはリペア(修理)やアップサイクルのための工房も作りたい。モノを大事に長く使い、なるべくごみを出さない暮らし方を発信したいですね。流木工作は、ごみから生み出したお金を循環させることで海を守って行こうという僕なりのメッセージなので、鳴門以外のいろんな海に広げていきたい。全国各地でご当地流木アイテムが誕生して販売されるのが僕の理想です！」 流木ペンを作ることが、目指す生き方のイメージにも繋がった黒川さん。「どこへでもノウハウを教えに行きますよ！」とヤル気満々です。(ライター談:島根県の隠岐にもぜひ来ていただきたい!!) ★ 編集後記 ★ 実はこんな人！ 鳴門へ移住する以前、長野ではスキーインストラクター派遣、千葉ではIT関連、兵庫では昼にIT、夜は居酒屋経営(調理師免許アリ)と職歴多岐な黒川さん。さらに趣味はリペアにリメイクで、真正正銘の「器用な人」！不要の烙印を押されたごみでも「世の中のサイクルにもう一度加えてあげたい」と愛を込めて直しちゃう、モノにとっては救世主的存在。 自分を海の生き物に例えると？ 「クラゲ。じっとしてただ流されているやつじゃなくて、せわしなく動き続けてるタイプのクラゲかな。あれこれ動き回っているものの、結局は人生の大波にゆったり流されてゆくという...。成り行きまかせが大好きなので...」 成り行きまかせ？いやいや、人生の流れに棹さす術は巧みなようです！



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3-(2) 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	22
投稿日	2020/9/17
都道府県	福岡県
記事タイトル	海は、地球上で一番大事なプラットフォームです。
活動内容	水産ベンチャーの若き経営者
熱源人材名	井口 剛志
記事本文	“獲る人よし、食べる人よし、社会よし”を目指して 祖父母も父親も水産会社を経営し、「僕は水産業界に育てていただいた」という若者が17歳で単身渡米してビジネスを学び、「この戦略なら日本の水産業をより良くできる!」と閃いて22歳で起業。まるでプーメランのように、志を果たしにふるさとへ帰ってきたチャレンジャー、それが井口剛志さんです。 その閃きのきっかけになったのは、大学3年生の授業で学んだプラットフォーム戦略でした。 「簡単に言うと、売る側と買う側をオンラインで繋ぎ、互いの情報を一元化することで取引をスムーズにする仕組みです。日本の水産業界は非効率な部分が多いと以前から知っていました。その複雑すぎる流通網に新しい選択肢を提案することで、業界全体の構造を変えたい。そう考えて会社を創り、独自の水産物流通システム「マリニティ」の開発に着手しました」 マリニティとは井口さんの造語で、元は「Marine community」という海洋生物学の用語。漁師や仲卸、市場、漁協など水産業に関わるすべての人たちが豊かになれる海のコミュニティを作りたいという願いを込めて名付けました。 その開発期間中の売上確保のため、まずは寿司ネタの卸売事業を開始。将来的にマリニティ流通の「買う側」になる取引先を徐々に増やし、順調に進み始めていたところで、まさかの新型コロナウイルスの影響が影を落とします…。 外食産業の需要が冷え込む逆境の中、次の一手として始めたのが、飲食店との協業による「うみのうち事業」です。 「ポイントは、規格外食材として流通に乗らない『未利用魚』を使うこと。今年5月にクラウドファンディングで始めた「うみのうち食堂」では、規格外魚や新型コロナの影響で出荷出来ずにいる魚などを加工して販売しています。ハンマーヘッドシャークや、背鰭に毒があるアイゴなども、上手に加工すれば美味しく食べられるんですよ! 魅力的な魚料理を提案して魚食の普及にも貢献したいと思っています」 これまで棄てられていた未利用魚が売れるとなれば、限りある海洋資源を有効活用でき、生産者である漁師の所得向上につながります。さらに環境保全面でもメリットは大きく、海洋廃棄物が減って汚染が緩和されるだけでなく、海の生態系の回復にも役立つといえます。 「海の世界連鎖がうまく回るためには、大型魚の排泄物に含まれる栄養分が重要なのですが、人気の大型魚は乱獲されがちです。これからは大型魚に偏らず、従来の未利用魚もバランス良く獲って活かしていくほうが、豊かな生態系と資源の維持に繋がると考えています」 井口さんが目指すのは、獲る人よし・食べる人よし・社会よしという「三方よし」の世界。流通改革で水産業界の仕組みを最適化し、魚をナリワイにする人々を救う。安心安全な魚を安く美味しく食べられて、消費者もハッピー。未利用魚に光を当てることで、海の生態系を健やかに。 「僕たちの小さな取り組みが良いスパイラルを生み出し、全国の海へ、地球まるごと全世界の海へと広がっていけばいいな!」 優れたビジネスモデルとテクノロジーを駆使して業界の風雲児たりえるか。グローバルな目線で水産業の未来に人生を賭け始めた井口さんの活躍から目が離せません。 ★ 編集後記 ★ 実はこんな人! 自社運営の通販サイト「Fishlle! (フィッシュル)」を自分たちだけで4時間で作り上げるなど圧倒的なスピード感で働くペンナーズ陣営ですが、井口さんの趣味はのんびり温泉めぐり。「忙しい日々を過ごす中、温泉に入っている時だけは時間を忘れて自分の世界に浸れます」とのこと、温泉の癒し効果が井口さんのハイパフォーマンスを支えているもよう! 自分を海の生き物に例えると? 「ヨコワ! ヨコワはマグロの幼魚で、南からどんどん北上して餌を食べながら大きくなっていく出世魚。僕も、小さなヨコワみたいに右も左も分らず海を彷徨っているけど、ようやく海流が見えてきたところ。これから波に乗って大きく育っていきたい! という願いを込めて、今はヨコワです。」



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3-(2) 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	23
投稿日	2021/1/18
都道府県	長崎県
記事タイトル	海は、自分の人生を構成するすべて
活動内容	行動力の鬼！水産系スーパー大学生
熱源人材名	瓜生 信汰朗
記事本文	残したい海がある。考えるのはいつも次世代のこと。 漂着ごみの回収・調査から海の問題解決を目指す、長崎大学のサークル「ながさき海援隊」の6代目代表。毎月1回の海岸清掃とICC調査(※)、海ごみに関する啓発活動や出前授業などを行っており、これ一つでも大変そうな肩書ですが、瓜生さんは海援隊の他にも10近い団体で精力的に活動しています。 「やりたいことを全部やっていたら、いつの間にかこんな状態に(笑)。忙しいですけど、海洋・水産の軸はブレていませんし、フィールドが広がっていくのはとても楽しいですね」 (※)ICC＝国際海岸クリーンアップ(International Coastal Cleanup)の通称。世界中の海に面した国や地域で一斉に海岸の清掃を行うとともに集めたごみの品目別個数を調べ、その結果から改善策を考えて提言していく国際的な活動。 瓜生さんが海と関わる道を志したのは、中学2年生の頃。夏休みにオーストラリアのゴールドコーストへ短期留学した際、裸足で砂浜を走った時にごみを見つけ、「子どもたちが安心して走れる砂浜をずっと残したいな」という想いが芽生えました。 その後は水産高校へ進学し、海洋環境の保護について学びを深める日々。放置竹林の問題と海洋環境改善とを同時に解決しようと、山で伐採した竹で「竹漁礁」を作って海底に設置するというプロジェクトにも取り組みました。 「竹漁礁は、稚魚の隠れ家や養育場、アオリイカの産卵礁としても機能することを確認しました。設置1年後には朽ちた竹から海藻が生えていたので、磯焼け問題を解決する可能性を見つけたと思っています。この竹漁礁づくりは、宗像国際環境100人会議のフィールドワークとしても採用されました」 高校3年時には生徒会長として、砂浜を含む学校周辺の清掃活動を全校を挙げて実施。全校生徒約400人のほか漁師など地域住民をも巻き込みながら環境保全の意識を高めていく活動に大きな喜びと充実感を感じ、この経験がその後の人生の大きな糧となりました。 長崎大学で入隊したながさき海援隊は、海ごみ清掃だけでなくICC調査や独自の定点観測を行っており、市内各地の海ごみの量や割合を分類したデータは長崎市の海ごみ啓発事業のデータ根拠としても活用されています。そのような調査を含め、海ごみ問題の現状を発信し地域全体を良くしようと活動していることが評価され、ながさき海援隊は「～長崎市民が選ぶ市民活動表彰～ランタナ大賞2018」で大賞を受賞しました。 また、学生として水産学を学ぶ傍ら、海洋未来イノベーション機構の大学職員としての顔も持つのが瓜生さんの凄いところ。 「日本財団・JASTO(一般社団法人日本先端科学技術教育人材研究開発機構)・リバネスが立ち上げた、海ごみ削減を目指す『プロジェクト・イッカク』という異分野協業の取り組みの中で、『衛星・ドローンによるごみ漂着状況診断システムの構築』という研究チームに僕も事務補佐で関わらせてもらっています。この研究は簡単にいうと、海ごみの天気予報を作るイメージです。将来的には地球レベルでのごみ漂着予測ができるかもしれない。未来をつくる最先端技術の研究支援に携われることは、とても刺激になりますね」 モチベーションの衰えを知らず、挑戦の意欲は尽きず...「自分の力を試してみたい」と、来年度は大学を1年休学して長崎市の任期付き職員として働くことを決めています。ただ、瓜生さんの軸はあくまで海。日本の水産業界の課題の一つは、水産業や海洋環境について若いうちからハイレベルな勉強ができる環境が整っていないことだと考えており、その現状を変えるため、「海を広く深く学べる学校」を作ることが夢だと言います。 「実は、海に関わる教育者になりたいという想いがありました。が、大学で水産を学び現状を知るうちに考えが変わり、先生になるよりも学校を作ろう!と思いました。志のある人が行きやすいよう、高専(高等専門学校)がいい。日本にはそれが必要だと思う。僕はやりたいことが本当に山ほどあって全部はできそうにないので、今回の人生は、学校を作って海を守る人材を育てることに使いたいな、なんて考えてます」 1回の人生では足りず、来世まで視野に入れているとは。。。 年齢20歳にして既に次世代を見据える、この“大物”感。日本の水産業界を変えよう熱い逸材の一人が、長崎にもいました! ★ 編集後記 ★ 実はこんな人! 高校のすぐ横は海で、昼休みは友達と堤防で釣り。「昼ごはんはみんな白米だけ持ってきて、釣った魚をすぐ捌いておかずにしました。毎日楽しくて美味しくて幸せだったなあ～」 そうやって高校3年間、海や魚への愛を育んだんですね! 自分を海の生き物に例えると? 「ウミガメ。ゆっくりと一歩一歩、着実に進むところが好きだし、そうありがたい。ファインディング・ニモに出てくるカメのキャラクターが大好きで、彼らの舞台であるオーストラリアに留学しようと決めました。自分の世界が大きく広がったのはカメが好きになったお陰ですね。海ごみ問題の深刻さを教えてくれたのもウミガメの写真でしたし、自分の人生はカメに縁がある気がしています」 瓜生さんの「焦らずどっしり構えた感じ」はカメ由来だったのか～



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3-(2) 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	24
投稿日	2020/11/26
都道府県	熊本県
記事タイトル	海は、人を育ててくれる場所。
活動内容	海ごみ回収に人生をかけた男
熱源人材名	東濱 孝明
記事本文	頼むぞSEABIN！綺麗な海へ着実な一歩 「あの綺麗な海が、こんな有様に…。何とかしなくては！」 母親の実家の目の前にある港を20年ぶりに訪れた時のこと。数え切れないごみが浮かぶ様子に衝撃を受け、何かに衝き動かされるように行動を始めた東濱さん。陸と違い、なぜ海にはごみ回収業者がいないのか。どうしたら回収できるのかと自問しながら調査を続けること数年、ついに出会ったのが、「SEABIN」でした。 SEABINは、直径約50cm、高さ約80cmの円筒で、直訳すると「海のごみ入れ」。ですがただのごみ箱ではありません。その働きはまるで海のルンバ(ロボット掃除機)！浮かべておけば、吸い込み口を上下に動かしながらせっせと浮遊ごみを飲み込み、海水は排出してごみだけ回収するという優れモノなのです。食品容器やタバコの吸殻はもちろん、水面に漂う油脂や汚染物質や約2mmのマイクロプラスチックまで回収でき、平均回収量は1基で1日約1.5kg、1年だと1/2tを超えます。これまでに、熊本県内の水俣市丸島漁港と宇城市松合漁港で実証実験を行い、丸島漁港では17日間稼働で総重量42.84kg、松合漁港では16日間で60.95kgのごみを回収しました。「行政の方や漁師さんが深く関心を持ってくれました。SEABINがごみを吸い取る様子を見て、ごみが外海へ出る前に湾内で回収する重要性を分かっていただけたようです。また、長崎県五島市からオファーをいただいて、福江港のクリーンアップ作戦で3日間だけ設置したこともありました。その時に交流した島の高校生がとても感動してくれて、長崎県の環境シンポジウムでSEABINを利用した海ごみ回収について発表してくれたんです。若い世代にも想いや意義が伝わって、すごく嬉しかったですね。SEABINは、その効果が目で見て分かりやすいということも功を奏していると思います」 SEABINの知名度がじわじわ上がる中、新しいニーズも見えてきました。稲作農家から、「肥料の殻がプラスチックごみになるので何とかならないか」という相談が来たのです。肥料をコーティングしている樹脂の膜は分解に時間がかかり、中の肥料が溶け出た後に膜だけ残って海へ流出。それらが砕かれて、いずれはマイクロプラスチックに…。肥料を使わないわけにはいかず、農家には流出防止の術もない。そこでSEABINの出番！というわけです。 「従来型だと用水路では使えないので、ポンプの仕様を改良して、農家さんの為のSEABINを作っています。完成したら初の自社製品になりますね！来春の稲作シーズンに何とか間に合わせない」と 熊本市の江津湖でも実証実験を成功させ、2021年4月からは市の事業として本格稼働する見込みです。 「江津湖で運用が始まれば、港以外でのSEABIN設置は国内初。ごみが海まで来る前に回収する重要性も発信できます。開発中の農業用水路バージョンも含めて、いろんな場所に広がってほしいです」 今、世界で年間約800万tものプラスチックごみが海に流出しています(※)。環境省「海洋ごみをめぐる最近の動向」(平成30年9月)によると、そのうち日本の発生量は2～6万tだと推計されています。途方もない量ですが、東濱さんは諦めていません。 「海のプラごみを全て回収することは難しい。でも1%でも防ごう、自分にできることをやろうという気持ちを大切にしたいんです。SEABINはオーストラリアやヨーロッパを中心に39ヶ国で約860基が設置されていますが、アジアではまだ少なく、日本は江ノ島や熊本など4カ所だけ(2020年10月現在)。これから全国の漁港やマリーナに設置できれば、日本は世界有数の海ごみ回収量が多い国として認知されることになります。稼働中のSEABINを見た人が、自分もボイ捨てを止めよう、なるべくごみを減らそうって思ってくれる効果もきっと大きいと思いますよ。とにかく各地に増やしたい」 そして、どうしてもSEABINで綺麗にしたい海がある！と力説する東濱さん。それは起業のきっかけにもなった、母親のふるさとの四番漁港(熊本市西区)です。 「幼い頃にあの海に親しんでいたからこそ、今こうして海のために頑張っている。自分もやっぱり海に育てられたということですね。港への導入はハードルが高いけれど、いつか必ず実現させます！」 グローバルな視野の一方、超ローカルな海への想いが出発点だからこそ、東濱さんの情熱は燃え続けているのでしょう。健気にごみを吸い取り続けるSEABINの普及を通じて、海ごみ削減への地道な、でも確実なスモールステップを積み重ねていく覚悟です。 (※) Neufeld, L., et al. "The new plastics economy: rethinking the future of plastics." World Economic Forum. 2016. ★ 編集後記 ★ 実はこんな人！ 20代を過ごした東京では海とは無縁だったにも関わらず、30歳で帰郷して使命感に目覚め、見たこともなかったSEABIN(当時日本には未導入)に「これだー！！」と入れ込み、英語のホームページを必死で解読して販売代理店起業にまで漕ぎ着けた。純粹に心を燃やして思い込んだら一直線、これぞ肥後もっこす！ 自分を海の生き物に例えると？ 「クジラ。堂々として周りを見守っている感じがいいですね。自分もクジラのようにこれからもずっと海を見守っていくつもりなんです！」 頼れる感じが素敵です♡



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3-(2) 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	25
投稿日	2021/2/24
都道府県	鹿児島県
記事タイトル	海はメッセンジャー。地球の声を届けてくれる。
活動内容	ごみ拾い文化のフロントランナー
熱源人材名	池田 龍介
記事本文	人が来れば来るほど綺麗になる砂浜にしたい！ 鹿児島県の最南端にある与論島は、エメラルドグリーンの海が美しく、多くの観光客が訪れます。その砂浜には、ごみを入れる白い箱が置かれています。箱の名前は、「拾い箱」。持ってきたごみを捨てるごみ箱ではなく、漂着ごみを「拾って入れる」ための箱です。 池田さんはこの「拾い箱」の生みの親であり、箱の普及を軸とした環境保全活動をコツコツと続けています。 「ごみは必ず流れてきます。でも、ごみがあったらその場で拾うという行動を、島全体で習慣・文化として根付かせることができれば、ごみの無い海岸を実現できると僕は本気で考えているんです。『拾い箱』という名前そのものが僕の願いでありメッセージです」 池田さんは、2014年3月31日に長野県から与論島へUターン。そして翌日の4月1日から、「美ら島(ちゅらしま)プロジェクト365」と名付けたごみ拾いを始めました。「最初は自分一人だけ。とにかく毎日やろうと決めて、朝6時半から1時間のごみ拾いです。そしたら4日目に突然同級生が来てくれて、まさか？！と思いましたね(笑)その後もロコミなどで少しずつ人が増えていきました。雨の日はもちろん、台風の日も安全な場所です。一人でやって、結果的に3年間毎日。プロジェクト名に偽り無しです」 ごみの回収や処分は与論町役場が協力してくれるようになり、たった一人でスタートしたごみ拾いは、1年も経つ頃には年間のべ3000人以上が参加する規模に成長。「砂浜を綺麗にしたい」という強い思いが行動を通じて島の住民たちに伝わったのは確かです。ところが池田さんは、いつからか違和感を覚えるようになったといいます。 「活動の輪が広がるのは嬉しいのですが、いつの間にか僕が“ごみ拾いの池田”と呼ばれるようになっていた。でもそれって何か違う。ごみ拾いは特定の誰かがやる特別なことではなく、みんなであつとずつ出来る時にやるのがいい。もっと普通に、あたりまえにやる。そういう島でありたいと思ったんです」そこで、2年経った頃から集まってごみ拾いをするのをやめ、各人の都合に合わせた活動にスイッチ。そんな中から池田さんが思いついたのが、誰でもいつでもごみを拾えるように専用の箱を置くこと。それが「拾い箱」でした。 2017年3月に初めて設置し、町役場はごみの運搬だけではなく箱の制作にも協力。その活動が知られるにつれ、観光客の中にもごみ拾いをする人が増えました。 また、2019年から池田さんは島の小学校で環境に関する講義を行っており、それがきっかけで生徒らにも「島の海をみんなで守りたい」という意識の芽生えが。「拾い箱」は、島の大人だけでなく子どもたちの間でも定着しつつあります。 「小学5年生の子たちに、海ごみ問題や、プラスチック製品の大量消費と使い捨てによる悪影響についての講義をしました。彼らはその後、箱のリニューアル作業を手伝ってくれたり、島外から約800人が参加するヨロンマラソン(2019年3月)の前夜祭という大舞台で『拾い箱』を紹介したりしてくれました。次世代を担う彼らが、島外の人に向けて一緒に海を綺麗にしていきたいと思います。これってすごいことですよ。環境教育として確かな手応えを感じていますし、島の文化が変わってゆく兆しだと思います」 与論島には砂浜が60カ所以上ありますが、現在(2021年2月)設置されている「拾い箱」は8個。多く設置すればいいというわけではなく、むしろ置けば解決すると思われたら逆に失敗。単なるごみ箱になってしまいます。 「向き・不向き地域性もあるし、設置に最適なタイミングも地域によって違うので、やみくもに安易に広げないように慎重に進めています。そもそも文化はじっくり時間をかけないとつくれないもの。丁寧に焦らずやろうと腹をくくっています」 海はメッセンジャーであり、海が伝えてくれる地球の声をちゃんと受け止めていきたいと語る池田さん。 自分たち人間の使い捨て社会を考え直すきっかけくれたのも海の漂着ごみでした。そして、「みんなの意識を変え、新しい文化を根付かせることができれば、島の未来はもっと良くなる」とポジティブな希望を持っているのも海のおかげです。 そんな池田さんが目指しているのは、与論島が「環境先進地」として地域の付加価値を高めていくこと。海が綺麗だから与論島に行くという観光客だけでなく、「みんなで海を守ろうとしている島だから行く」という人を増やし、観光振興と環境保全の両立が目標です。 「海ごみについては『拾い箱』の普及を進める一方で島外からの視察研修を受け入れます。また、大学生を対象とした環境教育プログラムも実施したい。別の切り口では、家庭排水にもアプローチしたくて、与論島で無農薬栽培した月桃のアロマを使って海を汚さない洗剤を作り、それを普及させるという計画も進めています。“ごみがあったら拾う島”。さらに“洗剤で海を汚さない島”になったら最高ですね！環境保全に力を入れている地域だからこそ人が集まり、結果として経済も活性化するという、そんな成功モデルを与論島で作ります。それがゆくゆくは日本全体の環境優先度を上げることに繋がっていくはず」 ふるさとの島に新しい価値を生み出すべく、じっくり長期戦を楽しむ構えの池田さん。 “一人の100歩より100人の一歩”の精神で、ありがたい未来に確実に近づいていきます。 ★ 編集後記 ★ 実はこんな人！ 島にUターンする前に池田さんが働いていたのは、海の無い長野県の泰阜村(やすおかむら)という小さな山村でした。「修行のつもりで6年間、山の中で自然体験や環境保全の仕事をしてました」とのこと。離島とは正反対の環境の中で、逆に離島の素晴らしさを思い知り、郷土愛が増したそうです。 自分を海の生き物に例えると？ 「ナマコですね。ナマコは海底の泥を黙々と食べることで浄化する役割を果たしていて、白くて綺麗な砂浜を作ってくれている。目立たないけど実は地球のためになっている、という感じがとても良いです！」 地道にじわじわ、ごみ拾い文化を広げて地域をより良くしていきたいと願う池田さん。ナマコのように頑張ってください！



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3-(2) 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	26
投稿日	2021/2/5
都道府県	沖縄県
記事タイトル	海は、大事にするのが当たり前！
活動内容	海への意識改革の仕掛け人
熱源人材名	金城 由希乃
記事本文	サンゴに優しく、人にも優しく。愛を行動で示そう 例えば「海の生きものを傷つけない」という想いや、「このビーチが綺麗だったらいいな」という願い。 そんな一人ひとりの優しい気持ちを後押しして、その人なりの小さなアクションにつなげる商品や仕組みづくりをしているのが、社会起業家の金城さんです。 金城さんが企画・開発した商品で、2017年4月に発売して一躍注目を浴びたのは、「サンゴに優しい日焼け止め」。 サンゴは、動物でありながら、体内にいる褐虫藻の働きで植物のように光合成も行う不思議な生き物です。魚たちに棲み家や産卵場所を提供し、海の生き物約50万種の4分の1はサンゴ礁に生息しているとも言われるほど、大きな生態系を担っています。 「シュノーケリングをしに座間味ビーチへ行った時、何気なく塗っていた日焼け止めがサンゴを傷つけると言われて大ショック。私は海が大好きなのに、まさか自分が、大切な海の生き物を殺す成分を何の疑いもなく撒き散らしていたなんて…。その衝撃がきっかけで、安心して使える成分の日焼け止めに自分で作って広めようって決めました」 それまでにオーガニックコスメを手掛けたこともあり化粧品には詳しくはなかったものの、日焼け止めに関しては知識不足だったため、開発のための勉強や市場調査に邁進。サンゴについても論文を読み漁って独学し、日本はサンゴ保全の意識が低い現状も知りました。一般的な日焼け止めに使われている、紫外線吸収剤と呼ばれる成分「オキシベンゾン」や「メトキシケイヒ酸エチルヘキシル」などがサンゴを傷つけ白化させてしまうということを突き止めた金城さんは、それらを使わず、かつ人の肌にも優しく美容効果が高い日焼け止めを追求しました。 「調査と開発に2年以上かかりましたが、機能面でも価格面でも納得できる日焼け止めが完成し、クラウドファンディングで集めた資金で2017年に販売開始しました。天然素材にこだわっているのがサンゴはもちろん貝や魚にも優しいし、当然お肌にも良いですよ」 苦心の末に自信作を完成させたものの、自分は決して日焼け止め屋さんではない、と強調する金城さん。開発した目的は、サンゴの大切さを広く伝え、サンゴを守ろうと思う人を増やすこと。その想いとこだわりをストレートに商品名にしたことで、この日焼け止め自体が熱いメッセージになっています。 「実はマーケティングのプロからは、たくさん売りたいならこの名前じゃダメだって言われたんです。でも、そこは譲れませんでした。私が発信したいことをそのまま商品名にすることで、これを見る人や買う人の気づきを促したい。地球環境にとってサンゴはとっても大事な存在で、サンゴに優しい日焼け止めを使うことが一人ひとりに出来るアクションなんだよって伝えていきたいです」 2020年夏、金城さんはさらに新しい取り組みを本格始動しました。そのプロジェクトの名前は「マナティ」。 旅先で気軽に、いつでもどこでもビーチクリーンを楽しめたら、自分も・地域も・環境もみんなハッピーになれるんじゃないか。そんな発想から生まれた、観光客と地域住民がごみ拾いを通じて交流できる仕組み、それがマナティです。 カフェや売店、宿泊施設などで「海を綺麗にしたい」という想いのある方々がマナティパートナーとなり、マナティ参加者(=漂着ごみを拾う人)はパートナーから500円で専用バッグ(=ごみ袋)や軍手をレンタルしてごみ拾い。集めたごみはバッグごとパートナーに返却し、パートナーはその自治体のルールに従ってごみを分別し処理します。参加費500円の内訳は、パートナーへの手間賃が半分、残り半分はごみ袋や軍手などを用意する事務局の手数料です。 「地域の協力なくごみ拾いをする、と分別されないまま放置されて適切に処理されないなど、様々なトラブルが起こりがちです。でもマナティのような協力関係があればトラブルを回避でき、参加者も気持ち良く、地域も助かる。参加者は『お金を払ってでもごみ拾いをしたい人』だから、パートナーと共感しあえる。つまりマナティは、繋がりたい人どうしが繋がる仕組みでもあるんです。観光に行った先で、海を綺麗にできる上に愛の交換まで出来るって、素敵ですよ！」 沖縄の地元企業であるオリオンビール株式会社がグループを挙げてマナティに参加し、沖縄内13ヶ所で一斉にビーチクリーンを実施するなど、県内ではじわじわと普及が進んでいるところ。現在のパートナー数は沖縄で40を超え、県外からの問い合わせも増えており、今後の広がりが期待されます。 「今は新型コロナウイルスの影響で観光客は少ないですが、この期間に提携パートナーを増やしたい。マナティにもっと参加しやすくなるようなアプリも開発中です。訪れる地域を楽しく綺麗にするという新しい遊び方、新しい観光スタイルとして沖縄から発信し、ゆくゆくは世界中に広がっていくことを目指します！」 サンゴに優しい日焼け止めやマナティを通じて実現したいのは、一人ひとりの優しい気持ちを行動で示しやすい社会。行動で繋がって価値観を共有できる仲間が増えることで、海を綺麗にできるばかりか世界平和にも繋がるはず！と、金城さんは信じています。 ★ 編集後記 ★ 実はこんな人！ 「人間関係が充実してないと人生つまんない。とにかく出会いが大切です。世界中のいろんな人と繋がりたい！マナティが広がるほどどんどん仲間が増えて嬉しいな♪」 …マナティの裏目的は、金城さんが友だちを増やすことだった！ 自分を海の生き物に例えると？ 「イラブチャーかな。寝袋を作るんですよ。なんだか楽しそうなところが良いです。私もいつも楽しんで、友だち増やして遊ぶことばかり考えてますから(笑)」 いかにも南国風の青いイラブチャーが、透明なふわふわ寝袋(ゼリー状粘膜)に包まれてのんびりしている姿。ちゅらかーぎー金城さんとはイメージ違い気もしましたが、言われてみれば、マイペースで妙に楽しげ、何となくご機嫌な雰囲気は確かに似ているかも…。鮮やかさで目を引く存在感も！



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3-(2) 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	27
投稿日	2021/3/18
都道府県	石川県
記事タイトル	海は、未知と探究の場所
活動内容	海洋教育の新境地を開く研究者
熱源人材名	浦田 慎
記事本文	縦割りを超えた協働で、常に進化する教育プログラムを！全国屈指のスルメイカ水揚げを誇る、石川県能登町小木(おぎ)。 町立小木小学校では、全国で他に例が無い「里海科(さとうみか)」という授業が行われています。 里海科は、里海の生き物や環境、水産業、海ごみ問題など海にまつわる様々なことを学ぶ学習プログラムです。体験や実験を重視した探究型の授業であることが特徴で、暮らしに身近な海を教材にしながら、子どもたちの“学びとる力”や“問題を見つけて解決する力”を育てることを目指しています。この先駆的な取り組みをバックアップしているのが、浦田さんが所属する能登里海教育研究所(以下、里海研)。 金沢大学と地域との連携をもとに2014年に設立された、日本初の「海洋教育専門の研究所」です。 能登町は、2015年度に策定したまちづくりの総合戦略で海洋教育の充実を謳っており、町の教育委員会が施策を主導しています。同年度、小木小学校は文部科学省の教育課程特例校の指定を受けて全国初の「里海科」をスタート。さらに里海科は2016年度から町内の全ての小中学校で展開されるようになりました。里海研は、研究員第一号として浦田さんを迎え、以来少数精鋭の組織で、体系的な海洋教育カリキュラムの開発や里海科の授業サポートを行っています。 浦田さん曰く、里海研の売りは「しがらみに縛られない、小さな第三者機関ならではの自由な発想と、縦横無尽な機動力」。先生たちの授業計画に沿って適切な助言を行い、信頼できる協力者や協力機関などを学校と繋ぐコーディネーター機能が最大の強みです。 「海洋教育の主役になるべきは児童と先生。その手助けをするのが里海研です。ありがちな事例ですが、著名な外部講師による一方的で単発的な出前授業を行っても、専門家に依存した学習ではその後に先生たちだけで継続していくことが出来ませんし、子どもたちも体系的な学びは得られません。そうではなく、里海研は先生と一緒に授業を作ります。人的・物的支援をすることで先生の負担を減らし、学校との“協働”でじっくり進めていく仕組みをすることで、先生は個人的な興味や想いも活かしながら自ら工夫して続けていける。教育は自律的かつ持続的であってこそ成果を生むと思います」 石川県水産総合センター、のと海洋ふれあいセンター、金沢大学の環日本海域環境研究センター臨海実験施設など、さまざまな施設が集まり海を多角的に学べる環境が整っている能登町は、里海研がコーディネーターとして本領発揮できる絶好のフィールドです。 これまでも、臨海実験施設で夜の海に集魚灯を入れて自然観察、海岸清掃と漂着ごみの分析、地元の特産品であるイカについての調査と動画(CM)制作、イカ釣り漁船の見学など、地域の協力を効果的に得ながら多彩なカリキュラムを実践してきました。 コロナ禍でイカの解剖授業が出来なくなった2020年には、各家庭で自習できる「めざせ！イカ博士キット」を開発。このキットには、釣った直後の新鮮なスルメイカを船内で急速冷凍させた「冷凍イカ」2杯と、里海研オリジナルの「海のいきものガイド イカのほん」などがセットに入っているほか、小木小学校の児童が里海科の授業で作成した「小木イカ料理レシピ本」も同封。子どもたちの学びやアイデアがそのまま教材になり、楽しく観察した後にイカの調理にも挑戦して最後は美味しく食べられるという充実した内容です。 「新型コロナウイルスの影響で体験学習の機会が減ったと言われますが、里海研ではむしろ体験学習に関わる支援実績が増えました。なぜかという、現場に丸投げのパターン化された学習プログラムでは教育環境の変化に対応できないのに対して、我々のような支援体制ならあらゆる状況に柔軟に対応できるからです。我々の目的は子どもたちの海に関する知識を増やしたり海の専門家を育てたりすることではなく、学びの力を伸ばすことであって、そのための手段は工夫次第で何でもアリなわけです。能登で里海を学んだ子どもは里山のこともきっと分かるし、社会に出て大丈夫。そんな本質的な学びの機会を提供したいんです」 小木小学校から始まった海洋教育は6年目に入り、「確かな手応えがある」と語る浦田さん。子どもたちの学ぶ意欲や地域への愛着が強まっていると現場で実感し、積極的に海洋教育に取り組む先生が増えてきていることにも大きな喜びを感じるそうです。 小中学校だけでなく高校での学習に関わる機会も増えています。ちょうど今(2021年3月)は、県立宝達高校の生徒が海洋プラスチックごみ問題を小学生に伝えるリーフレットを制作するという探究活動に、助言したり協力者と繋いだりして支援をしている真っ最中。つい先日、長野県の高校へウニと一緒に出張しました。 「高性能顕微鏡を40台ほど持って行き、ウニの卵が受精する瞬間を顕微鏡で見る実験授業をしました。生き物が誕生する仕組みを実際に目で見てすごいいんパクトがあるんですよ。ただ、それを環境問題や命の大切さの学びに繋げていくのは先生のプログラム次第。自分たちが続けていってもらうための先生向け研修も丁寧にやりました。支援とコーディネートが使命ですから」 このように県外の学校へも海洋教育のノウハウを展開していくことが今後の目標。そのためにwebサイトでの発信を強化し、各地の先生たちの情報共有に役立つようなプラットフォームを構築するのが里海研のテーマの一つです。 ICTの活用は教育の現場でもどんどん進んでおり、里海研が主催したオンラインイベント「第3回いしかわ海洋教育フォーラム・withコロナ時代の里海授業」(2021年2月)でも、体験学習とICTをうまく掛け合わせた事例が多数紹介されました。 「フォーラムでは、ICT教育は仮想的な世界に子どもを閉じ込めるものでなく、むしろリアルな学びを促進できる可能性を秘めていること、そして現場の先生はそこを意識して授業を考えておられることが分かりました。多角的な教育支援の在り方について理解を深める機会になったと思います。withコロナ時代こそ里海研の出番だと思いたい。自分たちの良さを活かしながら、行動あるのみです」 里海研が伴走することで、学校と外部の施設や協力者が無理なく繋がり、現場では先生たちが自律的に授業を続けていける。子どもたちは海を含めた地域全体を楽しみ学び、ふるさとを愛し自然と共生する姿勢を身につけることができる。 そんな「能登モデル」は、地域の人や資源を活かしながら「社会と学校とが共により良く変わっていく仕組み」とも言えそうです。 「私たち里海研に出来るのは、海を探究し、科学的な視点で海の価値を示し、より良いかたちで伝えていくこと。能登の風土を学びの環境として最大限に活かしたプログラムを開発して、現場で先生たちと共有しながら新しい海洋教育をつくっていく。里海の良さを次世代へ継承し、100年先も、人が海の素晴らしさに共感しながら暮らしている...そんな未来を願って取り組んでいます」



3-(2) 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	28
投稿日	2021/3/26
都道府県	石川県
記事タイトル	海は生命の源。なんとしても守りたい。
活動内容	大麦ストローで脱プラ！使命に燃える情熱ウーマン
熱源人材名	蒲田 ちか
記事本文	1本の大麦ストローから“気づき”と愛が世界へ広がる！と信じてるプラスチック製ストローが鼻に刺さって苦しむウミガメ。その姿を記録した動画は、インターネットを通じて世界に発信され、海を漂うプラスチックごみ、いわゆる「プラごみ」の問題の深刻さを私たちに突きつけました。「あのウミガメの姿を見た時、人間の勝手な行動のせいで海の生き物が大変なことになっていると知ってショックでした。同時に、神さまが私に『お前、動け！』と言ってる声が聞こえた気がして、何とか解決できんやろうかと考え始めたのが、大麦ストローを考案したきっかけです」そう語るのは、蒲田ちかさん。プラごみにならないどころかそもそもゴミにならない、土から生まれて土へ還る“循環型”の大麦ストローを世に出し、その普及を通じて世界をより良く変えて行こうと挑戦を続けている女性です。環境破壊や児童労働など社会が抱える課題に対して「傍観者でいたくない！」と、自分のできることを探して行動するのが蒲田さんのポリシー。そんな生き方を重ねる中から、人や地球が持続的であるために役立つ優れた商品を生み出しています。2019年に販売開始した大麦ストロー、そしてそれ以前にも、2017年から手がけている無農薬かつ児童労働による搾取のないベトナム産カカオ豆を使ったチョコレートが高く評価され、「ソーシャルプロダクツ・アワード」で二度も入賞しました。「情熱のままに動いていたら、点と点が繋がるようにいろんな出会いに恵まれて、想いが形になっていきました。でもこれまでに長い試練の物語がありまして...と根性と工夫で生き抜いてきた感じ(笑)。私はよく“協調性がある一匹狼”って言われるんですけど、波瀾万丈の中でタフさやしぶとさが身についたようです」石川県の内灘海岸の近くに暮らし、主婦業を楽しんでいた蒲田さんの人生が急展開したのは、30代前半。「若い頃から気になっていたベトナムに実際に行ってみたらスイッチが入った！」と、2004年にベトナム雑貨のインターネット通販を意気揚々とスタート。...したものの、2年近くも赤字。打開策として大好きな蓮(ロータス)に特化してみようと、蓮にまつわる雑貨の販売をネットとリアルで展開。すると、国内外の蓮雑貨を扱う店は当時珍しかったこともあり、全国の蓮ファンから人気を集めました。...が、順調だったのも束の間、諸般の事情で閉店。それでも諦めず、起死回生を狙って2015年に法人化しました。「体調崩すわけ金がかさむわけで本当に苦しかったんですけど、この頃から、自分にしかできないことにこだわりたいという気持ちが強くなりました。当時はまだ海に関わる仕事はしていませんが、私の中では重要な伏線。蓮の花のようでありたいと強く願うようになったのもこの頃です。泥から顔をだすべくと伸び、風に折れそうでも折れない。しなやかで強い生き方ですね」肝が据わった矢先、新たな出会いを引き寄せました。福島県会津若松市で保育施設を運営するNPO法人「Lotus(ロータス)」の代表、山口巴さんと、蓮がきっかけで意気投合。それをきっかけに、心の奥深くにふつふつと燃えていた「子どもたちの助けになることをしたい」という想いに気づいた蒲田さんは、Lotusと協働し、児童養護施設の子どもたちに木のおもちゃで遊んでもらう「木育キャラバン」を行うプロジェクトを2016年に発足しました。この木育活動を支えるため、自社の新規事業のアイデアを模索する中で、ベトナムに児童労働による搾取のない無農薬カカオ農園があるという情報が偶然舞い込んできたのです。「実はこの時も『あなた、次はチョコレートだよ！』って神さまの声が聞こえて(笑)」。直感を信じた蒲田さんはチョコレート製造を決意。2017年初頭からクラウドファンディングで資金を集めて試作を開始し、商品化して同年9月にはネットで販売。エシカルで美味しいチョコレートは一躍注目を浴び、早くも2018年3月にはソーシャルプロダクツ・アワードで大賞に選ばれました。受賞を機に、企業としてこれからどうあるべきかを自ら問い直していたちようどその時に目にしたのが、冒頭のウミガメの映像です。「私がやらなくて誰がやる！っていうくらい使命感がわきました。もともと海は大好きで、何としても守りたい大切な存在です」ストローに加工する大麦を提供しているのは、大麦の産地として有名な石川県小松市にある農業法人、嵐農産です。通常、大麦を刈り取った後の茎は細かく刻んで畑の肥やしにしますが、その茎を長い状態で残したものがストローになります。嵐農産は、海を守るために自分ができることをしたいという蒲田さんの想いに共感し、大麦の茎を無料で提供してくれています。刈り取った大麦はビニールハウスで2週間ほど乾燥。その後、カットして皮をむき、煮沸消毒して再び乾燥させます。その作業を担当するのは、同市の社会福祉法人こまつ育成会をはじめとする3つの福祉施設に入所している人達です。大麦の生産とストローの加工、パッケージングと保管もすべて小松市内で完結させることで、商品移動の際のCO2排出量を最も少なく、環境負荷を最小限にしているというこも、蒲田さんのこだわりです。保管時のカビ対策や茎が折れない工夫など試行錯誤を繰り返し、ようやく完成したストローは、2019年の7月に販売スタート。観光客に人気が高い「金沢 彩の庭ホテル」で採用されたのを皮切りに、県内の飲食店にじわじわと広がり、今では東京など県外でも取り扱い店が増えています。そもそも大麦は英語でStraw(ストロー)。ストローという道具の語源が大麦であることから分かるように、プラスチック製品が世界に蔓延する前は、天然素材の麦わらがストローとして使われていました。大麦ストローへの転換は、昔の知恵ある暮らしを見直すという側面もあるのです。毎年推定800万トンものプラごみが世界中の海へ流れ出ているとの研究報告があり(米サイエンス誌に2015年掲載)、その量から見るとプラ製ストローは微々たるもので、全体の0.1%にも満たないと言われています。仮にすべてが大麦ストローに置き換わったとしても、劇的な改善につながるわけではありません。「それでも、大麦ストローを目にした人は海洋プラごみ問題に気づきます。気づいた人は、普段の生活の中でも脱プラを意識するようになるかもしれない。いや、なってほしい。一人ひとりがポジティブに考えて小さな行動を変えていくことでしか、世界は変えられないんですから。そんな気づきを促すきっかけとして、大麦ストローを日本全国へ、そして海外へも広めていきたい」2020年、ソーシャルプロダクツ・アワードでの二度目の受賞がアサヒグループホールディングスの目にとまり、同社が東北復興支援のために取り組む「希望の大麦プロジェクト」の一環として、宮城県東松島市の沿岸部(津波被災地)で栽培した大麦を使って麦わらストローを作ることが決定しました。蒲田さんは、その製造の監修という形で協力しています。大麦ストローの知名度が上がるにつれ、刈り取りを手伝いたいと名乗りをあげてくれる人も増えているそうです。ベトナム雑貨に蓮雑貨、子どもを守るチョコレート、そして海を守る大麦ストロー。「いつも神さまに蹴っ飛ばされながら」と笑う蒲田さんの、自分の信念と情熱に正直に行動し多くの人を巻き込んでいく姿は、まさに熱源です。「こんな私でも、こんな小さな会社でも出来ることがあるんだって、人生をかけて伝えていきます。どんな逆境だってできることは必ずあると信じることで、とにかく動けば何かが変わる。私は常に魂を燃やして生きていたい」1本の素朴な大麦ストローから、「あなたはどうか動きますか？」という蒲田さんの問いかけが聞こえるようです。



3－（2） 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	29
投稿日	2021/3/31
都道府県	高知県
記事タイトル	海は、無限の可能性と無限のパワーを与えてくれる。
活動内容	イカと通じ合える？！魚類学者
熱源人材名	神田 優
記事本文	海は活かしながら守る。共に暮らし、生き物のメッセージを感じていたい 四国の南西端、高知県の大月町にある柏島は、暖流黒潮と、瀬戸内海から豊後水道を南下してくる栄養豊富な海水とが混じり合う場所にあります。多種多様な海洋生物が生息し、国内最多の1,150種が確認されているなど、まさに“生物多様性の宝庫”です。この柏島を“海のフィールド”に、「島まるごと博物館にしよう!」と2002年に黒潮実感センターを立ち上げたのが、神田さんです。子どもの頃から生き物が大好きで、「将来は生物学者になる!」と決めていたそうです。「ドリトル先生になりたかったんですよ。動物の言葉がわかるお医者さんですね。私は小さい頃から釣りや泳ぎが得意で、海洋生物と会話をしたいって常に思っていました。ダイビングを始めたのも、少しでも長く魚たちを観察していたいから。海の生き物が発するメッセージを代弁できるような仕事をしたい。そう思って、魚類学者になりました」学生時代は柏島などでのダイビングガイドや釣りで生計を立てつつ学問に励み、東京大学海洋研究所(現:東京大学大気海洋研究所)で大学院博士課程を修了したのち、再び高知へ。31歳の時に柏島へ単身移住して準備を始め、親身になってくれる地元協力者に支えられながら資金難を乗り越え、4年後に黒潮実感センター設立に漕ぎ着けました。シュノーケリングやクリアカヌーによる海中・海底観察やナイトサファリ、自分で釣った魚の観察・調理といった体験ベースの環境教育や、アオリイカの保護、藻場の再生など、さまざまな活動を通じて持続的な里海づくりを実践しています。活かしながら守る。利活用と保全との両立を目指すのが里海づくりの考え方です。「海は、私たちが生きていく上でなくてはならないもの。学び、遊び、暮らし、生命、安定、エネルギー...無限の可能性とパワーを与えてくれるところです。でも、もらってばかりではいけない。例えば暮らしとの関わりで言うと、海は、我が家の冷蔵庫です。食べたいものは何でも海にあり、いつでも取ってこれるように活かしてある。常に新鮮、最高の冷蔵庫ですよね。でも食材をいただいているだけでは底をつくの、海を耕すイメージで、食糧補充の意味も兼ねて水産資源を増やす活動をしているわけです」活動の拠点は、単なる黒潮センターではなく黒潮“実感”センター。「体験の先にあるものが実感だと捉えています。体験学習を行う時には何か心が響くことが大切で、それがあって初めて自分ごとになります。学習だけでなく、守るという活動も、貨幣価値や数値で捉えにくいけれど、“見える化”して伝えることで実感できます」共存とは？地元民が協力しあって海を守り、活かしていくとはどういうことなのか？それを“見える化”できたのが、アオリイカの人工産卵床を取り付ける活動でした。これは間伐材を海に沈めてアオリイカの産卵床として設置する取り組みで、まさに海の中の森づくり。神田さんが主導して地域を巻き込み20年以上も続けてきたこの活動が高く評価され、黒潮実感センターは2020年8月、水環境の健全化に貢献した活動を顕彰する「第22回日本水大賞」の環境大臣賞を受賞しました。アオリイカの保護。その一言では済ませられないほど複雑なドラマが、このプロジェクトの裏にはありました。「発端は2000年頃のダイビングバブル。元々漁業の島だった柏島にファンダイビングを導入したのは、実は私なんです。その後ダイバーが増えすぎたことで地元漁師たちとの確執が生まれました。ちょうどアオリイカが不漁となり、その原因はダイビングではないかと漁業者が訴えたことで一気に対立が激化。こんな揉め事があっては悲願の“島まるごと”が実現せんと思い、まずはダイバーと漁業者との共存の道を探ろうと、自分はダイビングガイドをすっぱり止めて中立の立場で動き始めました。両者が一緒に頑張ってイカを増やす方法はないか。イカ不漁の真の原因は磯焼けではないのか。調査を進めつつあれこれ模索して考えついたのが、イカが産卵する藻場の代わりに森の木を海に設置する方法です。石を付けて適当に放り込むのではなく、水深20mの産卵に最も適した場所に、ダイバーが潜って的確に固定することに意味があります」この提案が通って2001年から作業が始まったものの、どの木をどんなふうに立てればイカがたくさん卵を産むか、当時はまだ未知の領域。1年目、2年目と試行錯誤が続く中で、神田“ドリトル”先生が本領を発揮しました「私、イカの気持ちさが少し分かるんですよ。魚の習性を熟知した上で長年見続けていると、何となく感じ取れるものがある。イカ目線で、こんな枝ぶりが一番産みやすいだろうなとイカの好みを推測して枝を間引いたりしたら、3年目には産卵床1基に15,000房(約10万個)の卵がつけました。大成功です」地域の漁業者、ダイバー、森林組合など林業者と一緒に取り組む、海の中の森づくり。3年目には地元小学校の環境学習にも取り入れられ、山での間伐から産卵床づくり、海への投入まで可能な範囲で子どもたちも関わるように。その後は柏島だけでなく近隣市町村の小学校との連携にも発展し、参加した子どもたちは森と海の繋がりがアオリイカの保護を「実感」できるだけでなく、山間で暮らす子と海の近くで暮らす子との交流も芽生えていると言います。2013年からは、アオリイカの里親を募集するオーナー制度も開始しました。一口1万円で、購入者には漁師が釣ったアオリイカ1kgとマイ産卵床の海中写真が届けられるという仕組み。幾多の困難がありつつも、目指す「島まるごと博物館」への道を少しずつ拓いてこれたのは、いかにも高知の“いごっそう”を思わせる不屈の精神。でも全ての源は、幼い頃に「生き物大好き!ドリトル先生になりたい!」と願った純粋で温かな愛に違いありません。今の神田さんの夢は、そういう海が大好きな子どもをたくさん増やすことです。「センターの活動は多岐に渡りますが、今後はもっと海洋教育に特化したい。『人も海を耕し、育て、守る』という里海づくりの感覚を多くの子どもたちに伝え、行動を促すような取り組みを今後も続けていくことが黒潮実感センターの役割。柏島でなら、そのモデルづくりがきっと出来るかと信じています!」 ★ 編集後記 ★ 実はこんな人! 「昔から、もし何か一つだけ手に入れることができるのなら何が欲しい?って聞かれると、即答で『エラ』。ずっと海の中にいて魚たちと一緒にいたいからです」 「どれだけ魚が好きなのか。エラ呼吸を夢見るヒトは、おそらく人類で神田さんだけなのでは...」 自分を海の生き物に例えると? 「カツオ。人生止まることなくずっと走り続けてきました。やりたいことが山ほどあって、止まると窒息してしまいそうだから。ほんと、休むコトを知らんねえとずっと言われています...。あと、高知県民の血が流れているので、カツオ愛にあふれています!」 カツオを食べると疲労回復に効くという研究報告もあるようなので、これから本場のカツオを栄養源に走り続けてください!(でもたまには休んでくださいね)



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3-(2) 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	30
投稿日	2021/3/31
都道府県	静岡県
記事タイトル	海は、“玄関”
活動内容	ウミガメの浜を守り通す！信念と継続の人
熱源人材名	馬塚 文司
記事本文	守ると決めたら諦めない！法律だって変えられる ウミガメの仲間は世界で8種類いるとされ、そのうち日本で見られるのは、アカウミガメ、アオウミガメ、タイマイ、ヒメウミガメ、オサガメ、クロウミガメの6種類です。特にアカウミガメは、北太平洋では日本を主な産卵場所としており、静岡県と愛知県にまたがる遠州灘海岸にも卵を産みに毎年やって来ます。浦島太郎の昔話で知られるように、かつて日本人には身近な存在だったはずが、今では絶滅の危機に瀕しているウミガメ。その産卵の浜を守ろうと、アカウミガメの産卵調査と保護活動を30年以上も続けているのが馬塚さんです。「アカウミガメは5月中旬になると南の国から黒潮(暖流)によってやってきて、8月末まで産卵します。ウミガメは国寶だと思っているんです。絶滅危惧種であり国寶でもあるんだから大切に守らなくちゃ。国寶をお迎えする私たちの海は、玄関。玄関は綺麗にしておきたいから、海岸清掃も真剣ですよ」遠州灘は、東の御前崎から西の伊良湖岬まで総延長115kmにもおよぶ海岸で、天竜川から運び出された砂が堆積して広大な砂丘が形成されています。馬塚さんの活動拠点であるサンクチュアリネイチャーセンターは遠州灘のちょうど中間地点、浜松市の中田島砂丘入り口にあります。「遠州灘海岸全域がアカウミガメの産卵地であることから、2001年に拠点として開設しました。アカウミガメを始めとして海岸で繁殖する海鳥のコアシサシや希少な海浜植物などを調査・保護し、豊かな自然環境を守っていくこと。観察会や体験学習も頻繁に行っていて、ウミガメシーズンになると子ガメの観察会に多くの人が訪れてくれます」馬塚さんが環境のことを考え始めたのは、中学生の頃、テレビ番組で水俣病のことを知ったのがきっかけだったそうです。以来、環境を調べる技術や装置に興味をわき、職員として就職した静岡大学では環境分析や調査に携わっていました。環境保護の活動を本格的に始めたのは1979年、日本最大規模のツバメのねぐらや多くの野鳥の生息地となっている馬込川の河口に整備計画が持ち上がり、葦原や干潟といった多様な自然環境を何とか守ろうと決起したのが発端でした。1984年には馬込川サンクチュアリ市民の会を設立し、11万人の署名を県や市に提出して自然環境の保護を要望。翌年には浜松サンクチュアリ協会を設立。この団体が後のサンクチュアリジャパンです。そして1986年、馬塚さんはウミガメと出会います。「中田島砂丘でのアカウミガメの産卵が報道されて、まさか？！と。そこから翌年から調べ始めたら、調査1年目には2kmで22頭の産卵が見つかり、2年目は10kmで70頭以上と、調べれば調べるほど分かってくる。遠州灘は、全域が一産卵地だったんですよ！子どもの頃から遠足に行く場所だったけど、浜松市民のほとんどがウミガメ産卵のことを知らなかった。私も、目の前に大きなカメが歩いている様子を初めて見たときにはビックリしました」馬塚さん達の調査で、遠州灘でのウミガメの実態が明らかになりました。親ガメは5月～8月の間に3～5回の産卵をし、1回に約110個、全部で約500個の卵を産みます。8月中旬になると5月に産卵したものから孵化が始まり、10月まで続きます。孵化した子ガメは浜を進み、海に入ると暖かい黒潮に乗って南の海へ向かいます。南の海で大人に育ったアカウミガメが再び遠州灘に戻ってくるのは、約20～30年後です。一方、ウミガメの卵が盗掘されていること、ウミガメ自体が捕獲され売られていることなども調査で分かってきました。当時は砂浜でのオフロード車の走行が目立ち始めた時期でもあり、ウミガメの卵が踏み潰されてしまったり、海浜植物が踏まれて枯れたり、砂浜の荒廃が急速に進んでいました。そうした状況を「声を上げねばならない！」と奮起した馬塚さん率いるサンクチュアリは、市や県、国への働きかけを開始し、1990年に「アカウミガメとその産卵地」として市の文化財指定を実現。92年には水産庁が、アカウミガメの保護事業を重要水生生物保護事業に指定。県への働きかけが実り、海浜漁業調整委員会の指示という形で遠州灘でのアカウミガメ捕獲制限がなされました。さらに2000年には海岸法の改正に漕ぎ着け、海岸へのオフロード車進入を規制する「新海岸法」が施行されたことで、浜松市の海岸では車止めが設置されました。「海岸法の改正まで10年以上かかりましたが、粘ってよかった。法律は、私が死んでも残りますから。私はもともと高い壁があると燃える性格なんです(笑)、その時の勢いだけではだめですね。燃えたら燃え続けること。成功するまでやるんだから失敗は無い。活動を続けるうちに理解者も増えていきますしね」2014年には静岡県自然公園法条例でアカウミガメが指定希少種に指定され、無許可での採捕が禁止に。捕獲への罰則規定が盛り込まれ、ウミガメを守る体制が強化されました。馬塚さん達が産卵の保護調査を始めてから30年以上が経ち、孵化場(＝保護した卵を埋め戻し、孵化するまで安全に守るための施設)の整備も進んで、産卵数も増えているそう。違法な盗掘や深刻な海ごみ問題など課題はまだありますが、ボランティアの希望者や、野生動物の保護に意識が高い子どもたちがたくさん育っているのもれっきとした事実。地道な取り組みは着実に実を結んでいます。アカウミガメが遠州灘に産卵に来るのは、昔ながらの多様な自然が残る砂浜が維持されているから。その砂浜の減少を食い止めて回復を図るのも、馬塚さんたちの重要な活動となっています。「車が通ったりして植物が枯れると砂が露出し、海水が入って砂を持って行ってしまふ。そこが低くなってさらに海水が入り、砂浜がえぐられていきます。その対策に、テトラポットを置くのではなく自然に負荷をかけずに砂浜を回復させる方法として、コウボウムギという海浜植物を利用しています。リュウスの麻袋に砂とコウボウムギの種を入れて置いておくと、麻袋の中で種が発芽して根を張り、砂をつなぎとめてくれるんです」馬塚さんの取り組みは、長く続けてこそ成果が生まれるものばかり。焦らずじっくり、やると決めたら成功するまで、ブレず、妥協せず、諦めず...。「長いことやってジワジワ染みこませていくのが私のやり方。ふるさとの浜をずーっと守り、ウミガメ保護を始めとして良い事例をたくさん作って広げていきたい。子ガメの放流会や自然観察会に来てくれる子どもたちが増えて、みんなどんどん大人になって、私を助けてくれている。長く頑張るほど仲間が増えていくんです。力を結集すればまだまだいける、もう少しで社会を変えていくことができるって、本気で信じていますよ」 ★ 編集後記 ★ 実はこんな人！ 「私はカメに選ばれた人間です！」と胸を張りながら、「本当はね、生き物大好き～ってわけじゃないんですよ」と笑う馬塚さん。実は動物よりも花が好きなんだそうです。自分を海の生き物に例えると？ 「そこはやっぱりウミガメ。焦らずゆっくり、こつこつこつこつ、淡々と生きるのが大事だと思っています。パツと動き出すのは早くて、あとは考えながらゆっくり続ける性分ですね」 時間を味方につけて、大きな事を成す。そんな馬塚さんとウミガメとの出会いは必然だったのかもしれませんがね。



事業ID:2019525277

事業名:海洋人材発掘プロジェクト2020(海と日本2020)

団体名:海の熱源人材発掘プロジェクト実行委員会

極秘

3-(2) 全国の熱源人材紹介特設HP記事詳細

No.	31
投稿日	2021/4/2
都道府県	沖縄県
記事タイトル	海はサードプレイス。自分をリセットできる“居場所”
活動内容	チーム「ゴミすべ」の敏腕リーダー
熱源人材名	友寄 隆秀
記事本文	「美(ちゅ)ら海」を守る！ごみ拾いで人つなぎ・人づくり 「ゴミがすべての始まりだった。」、通称「ゴミすべ」。この一風変わったチーム名には、名付け親かつ団体代表である友寄さんの想いが込められています。「主な活動は2ヶ月に1回のビーチクリーンですが、その集いから無限の可能性が展開していくようにと願って名付けました。ゴミすべで出会った人どうしてネットワークが生まれて何か新しいことを始めたり、子どもたちの新たな学びやチャレンジにつながったり。そんな展開が未来に広がって、いつか過去を振り返ったときに『そう言えばこれって、あのごみ拾いが始まりだったよね〜』って言えるような、そんな場になりたいと思って」 「ゴミすべ」は、元々、友寄さんが大学生時代に立ち上げた団体です。当時、NHKの連続テレビ小説「ちゅらさん」が大ブームとなり、沖縄と言えば美しい青い海というイメージが定着。しかし友寄さんは、違和感を感じていたと言います。 「ホテルの前の人工のビーチは綺麗でも、自然のビーチは全然違った。海ごみも不法投棄もひどくて、海にテレビや冷蔵庫、洗濯機が捨てられていたのを見たこともあったし、イメージと現実とのあまりのギャップに心が痛みました。それで『なんとかしなくては』と、大学の同級生で始めたボランティアの海岸清掃がゴミすべです」 当時は月に1回ビーチクリーンを行っていましたが、就職したり家庭を持ったりとメンバーの環境が変わったことで継続が難しくなり、2010年に活動を一旦休止しました。そしてそれから8年。海ごみ問題への危機意識をもつ人が増え、「美ら海」を望む気運が高まってきたことを受けて、友寄さんをはじめ大学同級生のゴミすべ創生メンバーが再び集結して、2018年11月について活動を再開。覚悟を決めての再出発となりました。「今度こそ長く続けていきたい。そのためには無理をしないこと、そしてビーチクリーンを楽しむ工夫をしよう！と決めて、再スタートを切りました。頻度は2ヶ月に1回で、清掃時間は1時間だけ。手ぶらで来てくれても参加できるようにして、できる限り参加のハードルを下げました」 現在沖縄では数多くのビーチクリーン団体が活動していますが、中でも「ゴミすべ」は、活動エリアが広範囲であることや、家族連れでの参加が多いことが特徴です。WebサイトやSNSでも積極的に情報を発信し、活動予定日となるべく早く発表して参加希望者が予定を立てやすいようにしたり、海岸清掃と組み合わせでヨガや体験型ワークショップを企画したりして、より気軽に足を運ぶような雰囲気づくりを心がけています。「ただのごみ拾いではなくプラスαの価値をつける。子どもたちが多く参加してくれるので、彼らにとって楽しく学べる場であるような工夫を考えています。例えば、バーコードトラッキング。漂着ごみのペットボトルのバーコードの数字を見ればどの国で製造されたかが分かるんです。ごみがどの国から流れてきたのかを知り、なぜその国から流れ着いたのか？どんな海流に乗ってきたのか？など、世界地図を見ながら色々なストーリーを想像する。子どもたちが海ごみ問題をきっかけに視野を広げることができる、良い機会にもなりますよね」 また2019年には新たな取り組みとして、ビーチクリーンで拾う「シーグラス」と、沖縄の伝統工芸「やちむん」とを融合させた「シームン(seamun)」というオリジナルの陶器を開発しました。 「色とりどりのシーグラスを読谷村の陶真窯(とうしんがま)に持って行き、同じ窯でやちむんと一緒に焼くと、窯の中で融合するんです。やちむんの器の中にシーグラスの色が溶け込んだような神秘的でオンリーワンな仕上がりはとて素敵なので、小皿などの器のほか、ペンダントやストラップに加工したりして、読谷村のおみやげとして育てたいと思っています。ゴミすべで集めたシーグラスでおみやげを作り、売上の一部をまた清掃活動費として使う。シーグラス集め大会をやれば子どもたちも楽しんでビーチクリーンに参加してくれそうですし、色々とうまく回る、良い“循環”ですね」 ゴミすべの活動が持続的であるために、友寄さんが強く意識しているのが、次世代のリーダーを育てることです。 2020年2月、ワークショップで学んだことの集大成として発表会を開催した時には、小学1年から6年生までの多くの子どもたちが参加したそうです。 「子どもが自分たちで発信する機会を作ってあげることも大人の仕事だと考えているので、年に一度の発表会は今後も続けていきたい。正直な話、僕らの世代だけでは海は綺麗にならないでしょう。次の世代に繋ぎ、託すしかないんです。だからこそ次世代に向けた人材育成が必要です。...と言いつつも、厳しくやるわけではなくて、あくまで楽しく。これからも、子どもを含めたより多くの人を無理なく楽しく巻き込みながら、美ら海を守る活動を定着させていきたいですね」 大人も子どもと一緒に頑張るビーチクリーンチーム、ゴミすべ。 いつか未来の沖縄で、「美ら海が今も保たれているのは、すべてゴミすべが始まりだったね〜」と言われる日が来るのかもしれない。 ★ 編集後記 ★ 実はこんな人！ 「ゴミがすべての始まりだった。」といい、「シームン」といい、友寄さんのネーミングは独特で魅力的。シームンは、命名した後で調べたらたまたま沖縄の方言で「海に潜る」という意味のある言葉だったそうで、まさに絶妙！持ってますね〜 自分を海の生き物に例えると？ 「ジンベエザメかな〜。いつもゆったりマイペースで、どーんと構えてる感じが良いなあ〜」 その落ち着いたお話しぶりから、ジンベエザメ的な悠々感、パツパツにじみ出ています！

